

トヨタ財団
1985 (昭和60) 年度年次報告

目次

目次	2
凡例	3
理事・監事	4
評議員	5
“際”について考える 林雄二郎	6
研究助成・最近の動向 山岡義典	18
国際助成の多様化 若山佳子	22
I. 研究助成	27
I-0. 研究助成の概要	28
I-1. 第I種研究(個人奨励研究)	31
I-2. 第II種研究(予備的研究)	36
I-3. 第III種研究(総合研究)	44
I-4. 特定課題——活動記録の作成	50
II. 研究コンクール	53
II-0. 研究コンクールの概要	54
II-1. 第4回研究コンクール応募要項(抄)	55
II-2. 第4回研究コンクール予備研究助成対象	57
III. 国際助成	59
III-0. 国際助成の概要	60
III-1. 国際助成(一覧・プロジェクト概要)	61
IV. 「隣人をよく知ろう」プログラム	79
IV-0. プログラムの概要	80
IV-1. 日本向け・翻訳出版促進助成	82
IV-2. 東南アジア向け・翻訳出版促進助成	86
IV-3. 東南アジア相互間・翻訳出版促進助成	88
V. その他の助成	91
V-0. その他の助成の概要	92

V-1. フォーラム助成	93
V-2. 民間助成活動促進プログラム	95
V-3. 成果発表助成	96
V-4. その他助成	100
VI. 会計報告・事業日誌	101
VI-0. 事業実績の概要	102
VI-1. 助成金支出累計	103
VI-2. 1985(昭和60)年度会計報告	104
VI-3. 1985(昭和60)年度事業日誌	107

凡例

1. 財団法人トヨタ財団は、1974(昭和49)年10月15日、トヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社(両社は1982年7月1日合併し、トヨタ自動車株式会社となりました)の出捐に基づき、総理府より設立許可を受けた民間助成財団です。
2. 当財団では、1975年度以来毎年度、和文・英文の年次報告書を作成し、広く関係者にお配りしております。
3. この年次報告書は、1986年6月9日の第41回理事会において承認されました「昭和60年度事業報告書」に基づき、当財団の1985(昭和60)年度(1985年4月1日～1986年3月31日)の事業内容を取りまとめたものです。
4. 本報告書中の助成対象一覧は、いずれも助成決定時のものであり、決定以後の変更は割愛しました。ただしこれまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては、会計報告欄にそれを記載しました。
5. 本報告書中の助成概要は、いずれも助成決定時における計画の概要であり、助成による研究等の成果ではありません。これらの概要は、助成対象者からの提出書類に基づき、財団事務局にて作成したものであり、文責は当財団にあります。
6. 当財団では、和・英文の年次報告のほか、年数回「トヨタ財団レポート」を発行しており、これらは希望者に無料でお配りしておりますので、御希望の方は官製ハガキで当財団事務局あて、お申しこみください。

理事・監事

1986(昭和61)年3月31日現在 (五十音順・敬称略)

理事長	豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長 財団法人 トヨタ財団理事長
副理事長	森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団副理事長
専務理事	林 雄二郎	財団法人 トヨタ財団専務理事
理事	浅田 孝	株式会社 環境開発センター社長
	天城 勲	文部省顧問
	大島正光	財団法人 医療情報システム開発センター理事長
	加藤誠之	トヨタ自動車株式会社相談役
	瀬川美能留	野村證券株式会社取締役相談役
	富永誠美	全日本空輸株式会社顧問
	野口正秋	株式会社 豊田中央研究所常勤監査役
	山本重信	トヨタ自動車株式会社相談役
監事	菊池 稔	東京海上火災保険株式会社相談役
	中川 進	公認会計士

評議員

1986(昭和61)年3月31日現在 (五十音順・敬称略)

荒木信司	トヨタ中古自動車販売株式会社 顧問
石塚直隆	名古屋大学名誉教授
岡本道雄	京都大学名誉教授
加藤誠之	トヨタ自動車株式会社相談役 財団法人 トヨタ財団理事
駒井又二	豊田工業大学 学長
小山五郎	株式会社 三井銀行取締役相談役
佐伯喜一	株式会社 野村総合研究所取締役相談役
杉浦敏介	株式会社 日本長期信用銀行取締役会長
豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長 財団法人 トヨタ財団理事長
豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役社長
永井道雄	国連大学特別顧問
沼田 真	千葉大学名誉教授
長谷川龍雄	トヨタ自動車株式会社顧問
花井正八	トヨタ自動車株式会社相談役
林 健太郎	参議院議員 東京大学名誉教授
林 雄二郎	財団法人 トヨタ財団専務理事
日比野 進	名古屋大学名誉教授
平尾 收	東京大学名誉教授
松本重治	財団法人 国際文化会館理事長
本明 寛	早稲田大学文学部教授
森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団副理事長
盛田昭夫	ソニー株式会社取締役会長
渡辺 武	日米欧委員会日本委員会委員長

“際”について考える

——第三セクターにおける“際”のあり方について——

勸トヨタ財団専務理事

林 雄二郎

I 私たちは、助成活動を推進するに当たって、国際性、学際性、職際性ということを常に重視してきた。つまり、様々の“際”を重視してきたのである。

ところで、この“際”という字はどのような意味をもっているのであろうか。まず、手許にある二冊の辞書を開いてみよう。

○藤堂明保編『学研漢和大字典』によれば、「際」の字は、阝（こざとへん）に祭で、阝は本来「かべ」という意味であり、祭の方は「肉+手+示（まつり）」から成る会意文字でお供えの肉をこすってよごれをとることを示している。阝に祭だから、壁と壁とがこすりあうように、すれすれに接することをあらわす。したがって、「交際」は人と人とがみあいふれあうこと、「国際」は国どうしがふれあうこと。

○新村出編『広辞苑』によれば、「さい」（際）は、出合うこと、会うこと、まじわり、

と解説されている。確かに、一般的な理解として、国際といえば、国と国との相互のかかわり合いということであろうし、学際といえば、異なる学問領域の混じり合いとでもいおうか、職際（この言葉はいささかなじみが薄いようだが）の場合でも似たような感触になり、その限りでは、前述の辞書に出ている解説は納得できる解説であろう。だが、私個人としては、このような理解の仕方にはどうもあきたらないものがある。なぜならば国際にしても学際にしても、このような理解にとどまっている限り、そこから新しい創造の芽生えは望めそうもないからである。

私はいままで、学際研究という試みの場にしばしば身をおいたことがある。国際という名の下に行われた様々の催しにも参加した。なかにはずいぶん大がかりな大シンポジウムもあった。しかし、そうした試みに参加するたびに味わうのはなんともいえない空しさであった。華やかな催しであればあるほ

ど、催しが終わった後の空しさもまた大きかった。空しさの原因はなんだったのだろうかと思返してみると、共同して何か新しい創造をしたというクリエート・サムシングの実感が乏しかったからではないかと思う。創造ということが人間の心にかかる重要な影響を与えるものであるかをしみじみと実感する。それならば、“際”という字に伴う行動のなかから、クリエート・サムシングの実を挙げるためにはどうしたらいいであろうか。そのための一つの条件は、出会い、混じわることの延長を同じ次元のなかで、続けるだけでなく、より高次の次元への飛躍をすることではないかと思う。そして、そのためには、それぞれに、それぞれの土俵を抜け出すことをしなければならない。だが、それはなかなか難しいことのようにある。例えば、今日まで行われてきた学際研究なるものの実態をながめてみると、様々の専門分野の専門家が、それぞれの専門領域に腰を据えながら、手先だけを土俵の外に出し合って、適当に遊んでいるようなもので、遊んでいる間は、それなりに面白いものの、遊んだ後には何も残らない。このようなことをいくら繰り返してみても、一種の知的遊戯にはなるかもしれないが、学問的な成果としては何も期待できない。これでは、学際研究はレジャーとしての意義はあっても、学問研究の方法としてはほとんど価値を認められないとの評価が出てくるのもやむを得ないことであると思う。そこで、もっと本格的にそれぞれの土俵を飛び出して新しい試みをしようとしても、専門家として、それぞれの専門領域で確立してきたアイデンティティは、なかなかのことでは捨てられるものではない。だから、結局は結果がいかにか空しくてもそれぞれの専門領域の土俵のなかに安住しながらひとときの知的遊戯の時間つぶしをすることとどまってしまうのである。

科学技術が発達して社会のなかに新しいインパクトが起こる。最近のニューメディアをはじめとする先端技術がその好例であろう。あるいはまた、国際的な新しい摩擦が次々と発生し、それが深刻化する。そうした場合、いつも問題になるのは、いわゆるタテ割り行政の弊害である。しかし、そのためにいくら行政改革をやってもしよせん無駄であろう。なぜならば、仮に、新しい状況に対応するために従来なかった新しい組織を創設してみたところで、その新しい組織に従来の旧組織から出向してきた人たちが新しいナワ張りをつくって、そこに旧組織の出店のようなものをつくり上げてしまうのは目に見えているからである。これでは形だけ新しい組織ができて既存の土俵か

らの飛躍など望むべくもない。

II 様々な国際的な活動について考えてみよう。政府ないしはそれに準ずる機関すなわち、いわゆる第一セクターによる活動の場合は当然国対国という対応になるであろう。この場合、困った問題が二つある。一つはお互いに国益なるものが基本的な拠り所になる。その結果、どちらも“国”という立場からは寸毫も出られない。そしてもう一つの問題、特に日本の場合、経済的な面での関心が強いこともあって、“国”を示す総合的な指標として国民所得を拠り所にすることが多い。確かに、国民所得はそれぞれの国の力を示す指標としては極めて普遍的な指標ではあるけれども、この指標にははなはだ気になることが一つある。

歌の文句ではないが、“ボロは着てても心は錦”という言葉がある。国民所得という指標は、着ているボロのほうは確実に示し得ても心の錦のほうは見落としてしまう。なるほど、国民所得の数字のなかには無形のサービスの対価も入ってはいるけれども、それは対価として評価されるもののみである。私は幾度か東南アジアの国々を訪れているが、その度に、貧しくても心の豊かな多くの人たちにめぐり会う。自らを省みて確かに物質的には彼らより恵まれているかもしれないが、心の豊かさでははるかに及ばないことを思い知らされることがしばしばある。そして、そのたびに、そうした心の豊かさを少しも反映しないままに、1人当たりの所得では日本の10分の1といったような比較を安易に行ってなんの疑念ももとうとしない多くの日本人に言い様のないいらだたしさを感じるのである。

このような、いわば、うわべだけの評価と国益とが重なり合いながら、“国”と“国”との接する所、出合う所で、いわゆる国際的な様々の活動が行われる。そこからどのような新しい創造が生まれてくるであろうか。

このような一種の硬直性は、民間の非営利活動、すなわち、いわゆる第三セクターによる国際的な活動の場合にはないはずである。形式的には“国際的な活動”であっても、国という単位を唯一無二の単位と考えなくてもいいし、したがって、国益、国としてのprestigeなどといったことに必ずしもとらわれる必要もない。もっと自由な発想をもつことができるはずである。学際についても、職際についても、同じことがいえるはずである。とすれば、第三セクターによる活動は既成、既存のものにとらわれない自由な発想の下

にあらゆる“際”を通じて新しい創造を促進することが期待できるはずである。

III ところで、相異なるものが出合うことによって、そのいずれをも超越した新しい創造をする、ということは、実は我々日本人にとっては昔からなじみ深いことであった。

日本人はあいまいさを好むとよくいわれる。主観と客観、自と他、人間とそれを取り巻く環境等々、とかく対立的な発想をするヨーロッパ人的な発想を不連続の思想とすれば、日本人のそれは連続の思想ではあるまいかとも思えるが(注1)、従来、日本人のあいまいさを好む性向は、どちらかといえば無責任、付和雷同等に通じるものとして改めるべき欠点として指摘されることが多かった。確かにそういう一面もあることは見逃せないが、同時に、そこに、積極的な面も認めてもよいのではないかとも思う。

(注1)

拙著『日本の財団——その系譜と展望』(中公新書、昭和59年、中央公論社)の32ページ参照。

すなわち、日本人のあいまいさを好む性向のルーツをたどってゆくと、遠い昔の我々の祖先たちが、いつも自らの心と宇宙とを一つにすることができたことに到達するのではないかと思われる。そうした人々の心がやがて空海の説く即身成仏、人間はだれでも自ら覚れば仏になれるのだという説を受け入れることの下敷きになったのであろう。即身成仏という言葉は空海が言い出した言葉だといわれるが、これは明らかに大乘仏教のいう入我我入観(瞑想による精神統一を行い、その極限で宇宙と心とが一体化する境地に到達すること)に通ずるものであり、それはまた古代インドの聖典『ウパニシャッド』にいう梵我一如(梵はブラフマンすなわち宇宙の本体、我はアートマンすなわち個人の本体で、それが一体になるということ)の思想に通ずるものであろう。つまり本来、連続の思想をもっていた日本人は空海を伸介者として、インド人たちの考える思想をごく素直に理解できたのであろう。そして、そのような日本人であったからこそ明治以降、ヨーロッパから近代的自我思想を取り入れながらも、なお一方では西田幾多郎の主客合一の思想をも生み、それが多くの人々に大きな共感を呼びましたのであろうと思う。(注2)

(注2)

西田幾多郎『善の研究』（岩波書店、大正10年）によれば「純粹經驗説の立場より見れば、これは實に主客合一、知意融合の状態である。物我相應じ、物が我を動かすのでもなく、我が物を動かすのでもない。ただ一の世界、一の光景あるのみである」（同56ページ）ついでながらひと言附言しておく、かつて、西田哲学は日本の超国家思想の理論的支柱に祭り上げられたが、それは西田幾多郎にとって本意ではなかったのではないかと思う。『善の研究』のなかにも国家は一つの単位にすぎないという意味のことが述べてある。しかし、主客合一が、いわゆる滅私奉公につながることは当時の状況の下では十分に考えられる。明治憲法では天皇は現人神であったのであるから。西田哲学がこのような利用のされ方をしたことは今日も十分、肝に銘じておく必要がある。

これを要するに、主と客、梵（ブラフマン）と我（アートマン）との間に境界線としての“際”が存在するのではなく、それぞれが、それまでのそれぞれではなくなつて、そのいずれでもない新しい境地が開かれるということである。日本人になじみ深い般若心経の一節という色即是空もまた同じことで、色とはすべての物質的存在をいい、それらはいずれも生成し、変化し、消滅する。不変の存在はない。このような実体のない混沌とした主客未分の世界を一つのものとして実感しなければならないというのが色即是空であつて、まさに西田哲学にいう主客合一に通ずるものであろう。ただ西田哲学の場合、それがもっと身近に感じられることは、このような主客合一の状態が決して日常的に珍しいことではなく、例えば画家が一心不乱にある景色をキャンパス上に描いているとき、やがて完全に景色のなかに没入してしまい、景色と自分とが一体になつて、呼べども答えずの状態になってしまうことがある。これが主客合一だといわれると、なるほど、我々自身似たようなことは日常的にもよく体験する。幼児がテレビの画面に夢中になつて、親の言葉も全く耳に入らない状態などよくみる光景である。（注3）

(注3)

私が最近、親しいジャズ・ミュージシャンに聞いたところによると、ジャズには本来譜面のようなものではなく、演奏の前に、ほんの基本的な幾つかの約束だけはするが、後は即興的に演奏されることが多い。この場合、お互いに他人の演奏に合せようなどという気を起こしたらかえって合わなくなってしまう。ひたすらに、一心不乱に自らの演奏に没入し切ったときに、初めて見事なハーモニーが得られるのだという。ジャズという音楽は本来アメリカの黒人のなかから出てきた音楽だと思うが、この真髄はまさに主客合一の境地であらう。

カントが主観と客観の二元論をいい、デカルトが精神と物体の二元論を説いたのに比べて、梵我一如にせよ、主客合一にせよ、確かに対照的な考え方であろう。それが、時として、あいまいさを好む性向となって表れることがあるとしても、かたわら“際”をめぐる考え方において、そこから全く新しい創造を生み出すことも可能にするものではないだろうか。そして、その実験的な試みをするのに最もふさわしい者として、日本の財団を考えることは決して突飛なことではないと思うのだが、いかがなものだろうか。

IV 私たちは民間助成財団としてふさわしい助成活動を財団創設以来祈念し続けてきた。しかし、どのような活動が民間助成財団としてふさわしい活動なのか、となると、私たち自身にもなかなか焦点が絞り切れない。

数年来、私たちは、先見性、市民性、同時に国際性、学際性、職際性という三つの“際”を掲げて、そのような条件を満たしているプログラムが、私たちの望む、いわゆる民間助成財団としてふさわしいものであることを明らかにしてきた。そこで、三つの“際”を重ね合わせたことには若干の私たちの願いが込められていた。というのは、国際にせよ、学際性にせよ、それぞれに新しいことではなく、既に言い古されている言葉で、現に、そうした言葉を冠した様々の試みは数多く試みられていることは先にも述べたとおりである。だが、そのような様々の“際”と銘打った試みとは、ひと味違う“際”を私たちは期待しているのだということを示したかったために、あえて、職際というややなじみの薄い言葉を使ってまで三つの“際”を重ね合わせてアピールをしたのである。

では、どのような点で、従来の“際”と銘打った試みとは異なるものを期待したのかというと、それはなんらかの新しい創造の芽生えがそのなかから期待できるということであった。それならば、その創造の芽生えとはどのようなもので、そのためには、いままでの“際”とは、具体的にどのように違う条件が必要になるのかとなると、まだ私たち自身にも必ずしもはっきり分かっているとは言い難かった。

助成をする立場に在るということは自ら研究や事業をするのではなく、私たちがはかかわりのないところで、私たちがはかかわりなく、自らの目的と発想によって、研究や事業を行っている者に対して、私たちは側面から助成をするということである。したがって、私たちが、どのような願いや期待を

もっていても、それがただちに私たち以外の人たちに、私たちの願いどおり、期待どおりに理解されるとは限らない。まして、私たち自身が、私たちのいう“際”の意味はどのように、いままでいわれてきた“際”とは違うのかを、的確に、具体的に呈示できなければ、それを私たち以外の人に理解してもらうことは望み得ないであろう。

私たちは、ようやく、私たち自身の意図する“際”の意味を、やや明らかにするを得た。すなわち、

——“際”を通じて新しい創造をするためには、“際”をめぐる既存の土俵から飛躍することが必要である。——

ということになるか。そして、このことは、私たち日本人にとっては、実ははなはだなじみ深いことであって、極めて理解しやすいことであることを知った。とすれば、私たちは、私たちの助成活動を展開するに当たって、私たちの意図がよりの確に分かるような工夫をして、“際”を通じて新しい創造が芽生えてくるような場の設定をしておけば、そこから様々な形で新しい創造活動が生まれてくるのではないかと考える。

幸いにして、私たちは今日まで行ってきた助成活動のなかに、私たち自身、まだ十分に自らの意図を呈示し得ていなかったにもかかわらず、幾つかの助成対象は、結果的に私たちの意図していたことにやや近い新しい創造を、“際”の研究を通じて成し遂げつつあるように思われる。次にその幾つかを紹介しておこう。

○日本語対応「手話辞典」の編さんと作成

○ことばあそびの応用による障害児の言語指導

両方とも、心身に障害のある人たちに関する研究で研究助成の対象となったものであるが、いずれも学際・職際研究であり、チームの人たちは、学者、研究者、現場の教師、実務家、芸術家、タレントとすこぶる広範にわたっている。しかもそれは単なる研究のための研究ではなく、また、前者の場合は「手話辞典」という商品をつくらうとしているのでもなく、後者の場合は、現在行われている福祉活動の補助的な活動をしようとしているのでもない。両者とも、それぞれに新しい創造をしようとしているのである。すなわち、前者については手話辞典をつくるに当たって、現行の手話のシステムが日本語として様々な不備があることに着目し、日本人として、よりふさわしい新

しい手話のシステムをつくり出そうとしているのである。この新しいシステムが、今日まで広く普及している手話のシステムに対して、どのようなインパクトを与えるか。それは一種の冒険であろう。それはひょっとすると、いままで属していた学界や職場では不利な条件を自らつくり出す結果にもなりかねない。それを自ら認めながらも、なお新しいものをつくり出すことへの情熱を燃やしている人たちがかもし出している雰囲気は、確かに私たちが意図している新しい“際”のあり方を示すものではないかとも思われる。

後者の「ことばあそびの応用による障害児の言語指導」の場合も似たようなことがいえる。代表研究者の谷川俊太郎氏は詩人で、障害児の言語指導という面では専門家ではないし、実際に言語指導の実践に当たっている波瀬満子氏は演劇畑の女優が本職で、この方面はいわば素人である。専門の研究者や実務家からみれば、邪道かもしれない。谷川氏の作詩を、波瀬氏が現実に養護施設でそれを実践する。実践の過程で、多くの実務家が実際にプロジェクトに参加し、一方研究者はそれを評価してよりよい方法を提示する。こうしてみんなで共同しながら指導法を改善しつつ活動を広げてゆく。その過程で、それぞれの人がそれぞれの土俵に固執していたのではこのプロジェクトの発展はない。これが、今日、大きく成長しようとしていることは、お互いにそれぞれの土俵に執着することなく、それぞれの飛躍を通じて新しい創造が行われていることを示すものではないかと思う。(注4)

(注4)

「手話辞典」のプロジェクトは現在編さんの途上にあり、その完成には数年を要するであろう。谷川氏らの研究の結果は既にVTR等の形でまとめられており、この4月に「ことばが生まれるまで」と題して絵本とセットで榎太郎次郎社から発売された。

○十八鳴浜研究会の研究

これは、第二回の研究コンクールで最終の研究奨励特別賞を受けた研究で、研究題目は「宮城県気仙沼市大島十八鳴浜における鳴り砂の発音特性の変化と海および浜辺の汚染との関連について」という長いものである。宮城県気仙沼市の対岸に大島という島があり、そこには、歩くとキュッキュッと鳴る、いわゆる鳴り砂のある浜辺があり、地元では十八鳴浜として知られている。それが、最近、だんだん砂が鳴らなくなったというので、その原因を究明し、また砂が鳴るようにするにはどうしたらいいかを明らかにしようというのが

この研究の目的であった。気仙沼市の図書館長が代表となり、市役所の各課の職員、小・中・高校の先生などでチームを組織して、海流、気象、地質などといった基礎的な研究から、環境汚染の実態、さらに関係の文献の調査に至るまで広範な研究を行い、いままで不明であった様々のことを明らかにした。この研究も、学際、職際研究としては典型的なものであったが、単に調査だけにとどまってしまったら、従来の学際研究と変わらないものにとどまってしまったであろう。ところが、このチームの研究は面白い副産物を生み出した。人工的に鳴り砂をつくり出すことに成功したのである。それが学問的にどのような意味があるのかそれはよく分からない。たいした意味はないのかもしれない。また、それを大規模に製造して、観光土産として商品化するという目的があったわけでもない。現在でもまだそのようなまくろみはないようである。また、そのような観光土産はあまりいい趣味のものではあるまい。チームの人たちは、砂が鳴らなくなった原因の究明を目的にし、そのために協力して研究を進めてゆくうちに、このような副産物ができてしまったということのようである。創造などというには値しないマイナーな出来事といえそういえないこともない。しかし、現実にはこのようなものをつくり出すまでの過程は、やはり、私たちの意図する“際”を通じて新しい創造を行うということと何かしら共通するものがあるのではないだろうか。私たちはこれをやはり新しい創造の芽生えと評価してもいいのではないかと考える。

○東南アジアにおける一連の国際助成にみる国際性の動き

東南アジアの国々に対して行ってきた国際助成を通して、私たちは、固有文化の掘り起こしとその振興に努めてきた。固有文化というのはその言葉の示すように、いわゆる国際的ということとは無縁のことにようにみえる。私たちは、今日までに、例えばタイの北部、東北部、南部等で寺院に眠っていた貝葉（注5）による古文書を整備することや、寺院壁画の研究、保存のための調査等、またインドネシアやフィリピンにおける地方史の研究等に対する助成を続けてきた。ボロボドゥールやスコタイのような有名な大遺跡ではなく、いままでほとんど人に知られてこなかったような地方の固有文化の掘り起こしは、それを進めてもただちに経済的な発展にはつながりそうもないし、まして日本の国益とはほとんど無縁といってもいいだろう。にもかかわらず、こうした固有文化の掘り起こしを、国際的な視野で見つめ直すとき、

新たな創造が芽生える。

(注5)

貝葉というのはタリポット椰子の葉に書かれた古文書で、より正確には貝多羅葉^{パトラー}といい、貝多羅とは梵語のPattra（葉の意、手紙という意味もある）からきた語であるとされるが、貝葉の存在そのものはずいぶん古くから紹介されており、貝葉あるいは貝多羅葉の語は中国や日本の古典のなかにも散見される。またもっと身近なところでは、明治の初め、若き日の森鷗外がドイツに留学するときに記した『航西日記』のなかにも、コロンボの寺院でたくさんの貝多羅葉をみたという記述が出てくる。このように古くから知られていた貝葉であるにもかかわらず、そこに記載されていることを本格的に学問の対象として研究するという事はなかったらしく、いまようやくその緒に就こうとしている。

考えてみるとそれは至極当然のことで、東南アジアの国々は今日、それぞれに国境で仕切られてはいるが、今日の国境と、民族の文化とは必ずしも一致しない。タイ国の国境の内側はすべて一つのタイ文化をもっているといったような単純なことではない。

タイの北部はランナタイといわれるが、このランナタイは古くは北は中国南部、東はラオス、ベトナム、西はビルマのシャン地方からインドのアッサム地方にわたって広範なかかわりをもち、人や物の交流が盛んに行われていた。国境という人為的な境界ができ、今日その国境で隔てられた国のなかには政治体制を異にしたり、なかには鎖国状態にある国などもあるが、古い時代の歴史の跡は消すことはできないし、それは現代でも様々の目にみえないかかわりを残している。そうしたことの結果、それぞれの地域で、ただひたすらにそれぞれの固有文化の掘り起こしをやっているうちに、財団として“触媒的役割”を果たすことによって研究協力が発展してゆくこととなる。例えば「ランナタイとシブソンパンナ、文化関係の研究、連続性と変化」というテーマで、1985（昭和60）年にタイのチェンマイ大学のルチャヤ氏に助成をしているが、これは形の上ではタイに対する助成であるけれども、実際は、タイと中国の学者との国際的な研究協力であるし、同様な例は、タイ、シンラパコン大学のチャーク氏に対する「ビルマのデザインの編集」という助成はビルマとタイの専門家の国際協力である。また、ヴェトナム社会科学出版局のフウ氏に対する「チャム彫刻の編集」、あるいは同じくヴェトナム考古学研究所のトン氏に対する「ドンソン銅鼓の編集」の助成等は、現在はヴェトナムに対する助成であるけれども、将来国境を越えた広がりを期待できるプ

プロジェクトではないかと思っている。

これらの例にみられる国際的な広がりには、先にも述べたように、国対国といった対応では無理なのではないかと思う。それらの文化がどの国の文化であるのかという解釈など、“国”という傘の下では、国際的な広がりをもつ要素が思わぬ所に存在することがあるからである。国益とか、国家の престиージュとか、こうした意識が優先する雰囲気の中からは、国と国との出会いの場である国際的な試みが行われても、そこから、国を越えた何ものも生まれてはこないのではないだろうか。このような活動は民間非営利活動、すなわち第三セクターであるからこそ可能となるのではないかと思う。

○“隣人をよく知ろう”プログラムの実践のなかから

私たちは、1978(昭和53)年度以来、“隣人をよく知ろう”という名の独立したプログラムを実施してきた。読んで字のごとく、主として、出版物の翻訳・出版を通じて、東南アジアの国々と日本相互の間に、また東南アジアの国々相互間で、お互いに相手に対する認識を深め、また自らも相手に対する認識を深め合うことを促進しようとするを目的としていた。(注6)

(注6)

度々、年次報告で報告してきているので、詳しいことは省くが、このプログラムは、①東南アジア諸国で出版された書物を日本語に翻訳・出版する、②日本で出版された書物を東南アジア諸国語に翻訳・出版してもらう、③東南アジア諸国相互間で書物の翻訳・出版を促進する、④東南アジア諸国語→日本語の辞書の編さん、の四つのサブ・プログラムより成っている。

最初に手をつけたのが、東南アジアの国々で出版されよく読まれている本のうち、彼らが特に日本人にも読んでもらいたいと希望する本を選択・推薦してもらい、それを日本語に翻訳し、日本の出版者に出版してもらうプログラムである。そのうち、最も早く活動したのがタイ国であった。一流の知識人から成るアドバイザーグループをつくり、本の選択等一切を委ねた。アドバイザー諸氏が献身的な努力をしてくれたことは筆舌に尽くし難いものがあったが、その紹介をしている余裕はない。このプログラムを実践し始めて、既に7年余を経過するが、私は過日、たまたまバンコクで当初から献身的に協力してこられたタマサート大学のサネー、チャーソウィット両先生と話しているうちに、両氏とも、このプログラムのことを“我々のプログラム”と表現されることに気づいた。この場合の“我々の”という言葉が、彼らだ

けのという意味での“我々の”ではなく、彼らとトヨタ財団との両者共有のプログラムという意味での“我々の”ということであることは前後の話の文脈ではっきり理解することができた。

私には、この“我々のプログラム”というひと言は感動的なひと言であった。なぜならば、これこそ、私たちがともにそれぞれの土俵を超えて新しい創造をしつつあることの証しであるように思われたからである。

照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子

色不異空 空不異色

色即是空 空即是色

(唐、玄奘訳、般若波羅密多心経 より)

研究助成・最近の動向

トヨタ財団 研究助成部門 プログラムオフィサー

山岡義典

●三領域統合後の申請内容の変化

昨年度（1984年度）から、それまで三つの領域に分けて行っていた研究助成を、基本テーマの下に一つの領域に統合した。すなわち、「交通安全、生活・自然環境」「社会福祉」「教育・文化」の三つの領域を一本化し、「新しい人間社会の探求」を基本テーマとして研究プロジェクトの募集を行うことにしたのである。その意図やそれに伴うプログラムの改訂点については昨年度の年次報告で触れたので省略するが、今年度は統合後2年目になるので、それ以前に比べて申請や助成の内容がどう変わったかを簡単にみておくことにしよう。

図-1は過去5年間の研究種別毎の申請数の推移を示したものである。第I種は個人奨励研究、第II種は予備的研究、第III種は総合研究であってその内容については29ページの表I-1を参照していただきたい。1981年度の区分がないのは、まだこの研究種別を設定していなかったからである。グラフの一番上の「特定課題」について

は一応ここでは考察の対象から外しておこう。

この図からまず言えることは、昨年度は申請数が急減し、今年度はさらに微減したことである。昨年度の急減は第III種研究の減少によるが、これはこの年から第III種については予備研究を通過した継続申請のみを対象とし、新規申請を対象外としたためである。また本年度の微減は第II種研究の減少によるが、これは、第II種については「学際的・職際的・国際的」な共同研究に限定するという昨年度からの規定が今年度になってかなりよく徹底したためと思われる。昨年度は、これまでの延長上から一研究室一専門分野の通常の研究の申請がかなり多く含まれていたようであった。一方、第I種研究については、ここ4年間少しずつ増えていることが分かる。

次に図-2によって研究領域別の申請件数の推移をみてみよう。昨年度と今年度については個々の申請テーマを基に事務局で領域区分をした。三領域のほか「複合テーマ」と「その他」の区分も設けている。

図-1 研究種別申請件数推移

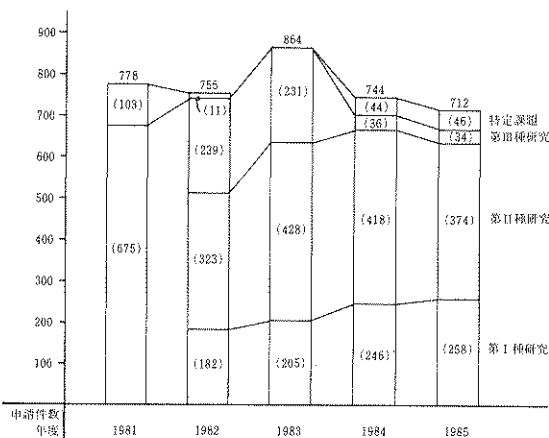
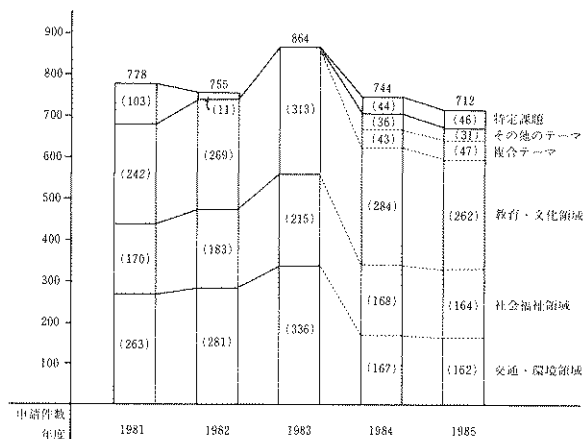


図-2 研究領域別申請件数推移



この図でまず目につくことは、昨年度から「交通・環境」領域の申請が半減したことである。今年度もほぼ同じ傾向であるところを見ると、これは特別な事情というよりもプログラムの改訂による影響と考えてよいであろう。この領域は、理・工・医・農学などの自然科学分野の研究が多数を占めるわけであるが、このような研究は「新しい人間社会の探求」という基本テーマのもつイメージに馴染みにくいということがあるのかもしれない。また、第II種の予備的研究からスタートするという方式や「学際・職際・国際」といった「際」的な研究に馴染みにくい点もあるようだ。

「社会福祉」と「教育・文化」の領域については、総数の減少を反映してわずかず減っているものの、その減り方は少ない。「複合テーマ」は昨年度43件、本年度47件と微増はしているが、まだ当初期待したほどには多くない。

●助成内容の変化

ではこのような申請内容の推移に対して助成結果のほうはどうなったであろうか。

図-3は研究種別ごとの助成件数の推移を示している。縦のスケールは図-1、2に比べ10倍にとってある。全体の件数で見ると、1981、82、83年度と増え続け、昨年度はかなりの減、そして本年度はさらに若干の減、となっている。昨年度の減少には二つの理由がある。一つは助成総額が減ったこと、一つは1件当たりの助成額が大きくなったことである。1983年度までの助成予算は、特定課題を含め2億8000万円であったが、昨年度からは2億2000万円となり、同時に、それまで200万円であった第II種研究の1件当たり限度額が300万円に増えた。その反映というわけである。本年度の微減は、結果的に1件当たり助成規模が大きくなったためであり、特にプログラムの変更によるためではない。

さて研究種別の内訳であるが、年々増えてきていた第I種の助成件数が今年度はやや減った。若手の個人奨励研究といえどもかなり高い水準を期待したため、相当絞り込む結果になったものである。また、現代では、若手研究者が個人の発想を生かして一人で自由に研究を行え

図-3 研究種別助成件数推移

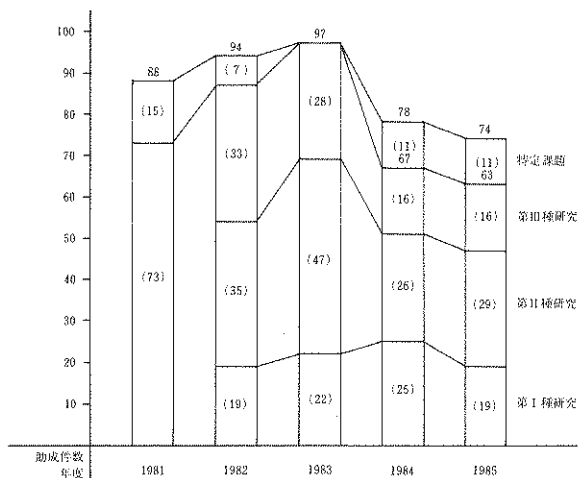
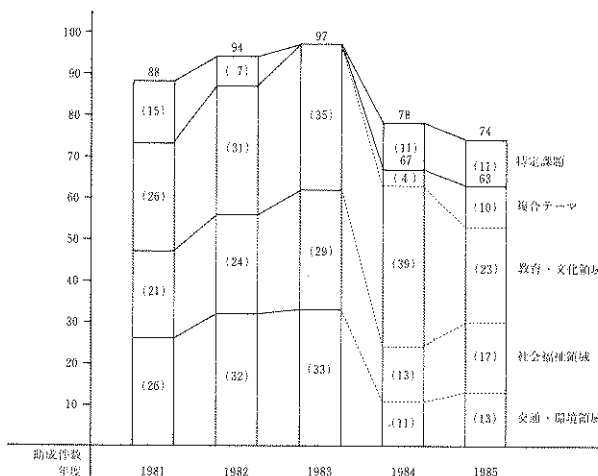


図-4 研究領域別助成件数推移



る分野というのはだんだん少なくなってきていることも痛感する。第II種、第III種の助成件数については、昨年度4割方減少し、本年度はほぼそのまま横ばいといったところである。

次に図-4によって領域別の助成件数の推移をみよう。昨年度は、数からいっても割合からいっても「教育・文化」(内容的にはとりわけ「文化」)が大幅に増え、その分「交通・環境」と「社会福祉」が減少した。申請数に対する比率からみてもややバランスを欠いた感はまだあられず、少し気になっていたが、本年度はバランスを回復

したようである。また、「複合テーマ」が増えてきた点は基本テーマの主旨がかなりよく反映されてきたと考えてよいのではないかと思う。

●外国人や海外居住者からの申請

以上、最近の研究助成について一通りの特徴を示したが、このほか、申請者については国籍・居住地・その他の一切の資格を問わないという特徴が従来からある。そのため、毎年、外国の研究者や海外居住の研究者からの申請も多い。居住地の分類は厳密には難しい点もあってややあいまいな数値ではあるが、これらの外国人や海外居住者からの申請の動きを示すと表-1 のようになる。表中のカッコ内の数字は助成件数を示している。限られたデータで特にどうという傾向を指摘するのは難しいが、これらの申請数が昨年度から急増したことはよく分かる。このような外国人や海外居住者に対する資金援助のパイプがわが国では余りに乏しいことを考えると、これらへの助成は今後ますます要求が高まるものと思われる。

表-1 海外および外国人の申請（助成）件数推移

	1983年度	1984年度	1985年度
海外在住の外国人	28 (6)	46 (11)	33 (4)
日本在住の外国人	10 (0)	8 (1)	16 (4)
海外在住の日本人	20 (2)	40 (5)	43 (8)
合 計	58 (8)	94 (17)	92 (16)
全申請(助成)件数	864 (97)	700 (67)	666 (63)

●「際」的な研究とは

先にも触れたように、昨年度以来、第II種研究では（ということはその展開として行う第III種研究についても言えることであるが）、助成対象を学際的・職際的・国際的な共同研究に限っている。このような「際」的な研究が今後の複雑な社会問題の解明や解決にとって極めて重要であると判断したからである。もちろん、一般の専門研究も、これら「際」的な研究に劣らず重要であることはいうまでもないが、それらは他からの資金援助が比較的得やすいと考え、トヨタ財団としてはそれ以外のものに焦点を当てることにしたわけである。これらの学際的・職際的・国際的な研究の意味については応募要項に記載されているので省略するが、ここでその意図するところを簡単に述べておこう。

すでによく言われていることであるが、新しい問題の解決には従来の専門分野にとらわれない学際的な共同研究が重要になる。しかし異なる専門分野の人がただテーブルを囲んで議論するだけでは真の学際研究にはならない。一つのフィールド（それは地理的な空間であったり情報的な空間であったりするわけだが）を対象に、異分野の人が共同して真剣に取り組むことが必要であろう。この「フィールドの共有」こそが学際共同研究を成立させる必須条件ではないかと私たちは考えている。

次に職際的な共同研究であるが、これは職場や職種を異にする人々が共同して行う研究のことを言っている。研究の成果がそれぞれの問題の現場にフィードバックされるためには、大学や研究所のいわゆる研究職の人だけでなく、問題の現場に直接携わる職種の人も積極的に研究に参加することが重要であろう。あるいは専門研究者の参加がなくとも、様々の職種の人が寄り集まってそれぞれの現場体験を生かした研究を行うことも重要であろう。従来、とすれば現場の人たちは、専門研究者の手足として協力することが多かったようであるが、しかしこれでは不十分である。望ましい職際共同研究は、「フィールドの共有」は当然のこととして、さらに「現場の発想を生かす」ことが重要な条件ではないかと思う。

次に国際共同研究のことであるが、異文化の理解や国際的な諸問題の解決のためにこのような研究が重要であ

ることは改めて言うまでもなかろう。しかしこの場合も、ただ海外に出かけて現地の人との協力を得て調査をすれば、外国の研究者を交えて議論をするだけでは（それはそれでももちろん大切なことではあるが）必ずしも十分な国際共同研究とは言えない。ここでもやはり「フィールドの共有」が不可欠であるが、その場合、「対等の立場での共有」が大切であろう。

そのうえ、さらに私たちは「フィールドの相互乗入れ」ということも重視し、期待している。例えば、外国の研究者と共同で日本の調査を行い、次に同じメンバーで当該国の調査を行うという方式である。このことによって、文化的な背景を異にする研究者が、全員「共通の比較の視点」をもつことになる。まわりくどいようだが、長い目でみれば相互理解の早道になるのではないかと思うのである。

以上からも分かるとおり、「際」的な研究には時間と手間がかかる。しかも成果もすぐには出にくい。研究者にとっては極めて効率の悪い研究に違いない。しかしあえてそういう研究に挑戦しようとするグループに、少しでも資金的なサポートができればと思うのである。

なお、この「際」的な研究は、一応共同研究についてだけ言っているわけだが、実はその精神は第Ⅰ種の個人奨励研究にも反映されている。第Ⅰ種で助成対象に選ばれた人のうちには、どこか学際性・職際性・国際性をもった人が多く、研究内容にもそれがよく現れているように思う。そういう人を私は「『際』的なマインドをもった人」と呼ぶことにしているが、端的にいえば、専門研究の世界からはみ出し指向をもった人、ということになるのかもしれない。経歴的にも、ストレートに専門家の道を歩んできた人より、幾つかの専門をわたり歩いたり、何年か実務についた後で研究生活にもどったり、海外で独自の青春を送ったり、といった経験をもつ人が多い。もしかしたら、こういう人たちはある意味で新しい研究者像を示しているのかもしれない。

以上、助成プログラム改訂後の2年間の動きを整理し、私たちの考える「際」的な研究について触れてみた。これらが真に民間財団の助成にふさわしい研究なのかどうか、あるいはもっと別の所に重要な課題があるかもしれないが、当面は現在のプログラムを冷静に見つめ、反省し、リファインしていくべきではないかと考えている。

国際助成の多様化

トヨタ財団 国際助成部門 プログラムオフィサー

若山佳子

●第2の10年期の最初の年

トヨタ財団の国際助成部門の活動は、1975年度の準備活動の期間も含めると、1984年で10年目を経過し、1985年度は第2のdecade（10年間）の最初の年であった。過去10年間の活動のまとめは1984年度の年次報告書に詳しく述べられているが、概説すると、国際助成は「各地域の固有文化の保存と振興」と「健やかで自立した青少年の育成」の二つのプライオリティを設けて、タイを中心にインドネシア、マレーシア、フィリピン、ネパール、シンガポール等へ助成を行ってきた。

「隣人をよく知ろう」プログラムでは、日本向け・翻訳出版促進助成において、東南アジアの文学作品や人文・社会科学書の日本語版の翻訳・出版を行う際の翻訳助成を行い、東南アジア向け・翻訳出版促進助成において、日本の文学作品、日本に関する人文・社会科学書、および日本人による東南アジア研究の成果を、東南アジア諸国の言語に翻訳・出版する際の助成を行ってきた。さらに東南アジア相互間・翻訳出版促進助成では、東南アジアの人の書いた文学作品、人文・社会科学書を他の東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成を行ってきた。

第2のdecadeの最初の年である1985年度においては、国際助成および「隣人をよく知ろう」プログラムの両方に関して、これまでの10年間とは異なる、質的および量的な変化もしくは、変化のきざしがみえてきた。

●国際助成の多様化

国際助成は件数が1984年度の26件と比較するとその2倍の52件となった。これは予算が1億円から1億3000万円になったこと、および円高になったことも原因であるが、同時に助成額が多様化し、1件当たりの助成金額が多額

のものも数件あったが、全体としては小型化したことを物語っている。

助成対象者を国別にみるとタイ18件、インドネシア12件、フィリピン11件、ネパール5件、ヴェトナム、スリランカ、マレーシア各2件となっている。これは前年度までのタイが助成件数の半数以上を占めていた傾向からみると明らかな変化である。対象国が多様化したと同時に、それによって、助成のプライオリティの中心となっている「固有文化の保存と振興」の固有文化の内容も国の状況によって異なり、多様化がみられる。

タイではこれまでに多くの助成がなされた、古文書、建築、民俗、考古学、美術の分野のプロジェクトが続行しているほかに、新しい傾向の活動が助成対象となっている。それはタイの固有文化の研究が進むうちに、その研究の範囲がおのずと国境を越えて国際的な広がりをもち始めるというタイプの活動である。例えば「ランナタイとシブソンパンナ：文化関係の研究、連続性と変化」の国際会議が助成対象となっている。ランナタイ地域は現在のビルマのシャン州、中国雲南省のシブソンパンナ（中国語表記では西双版纳）、およびラオス等の近隣地域との交流が古くからあり、これらの地域は一つの文化圏を構成していたと考えられる。そこで、ランナタイおよびその近隣地域との歴史的関係を研究し、社会、文化の比較研究を行うことは、ランナタイ社会をより深く研究し、タイ人の起源を解明するための重要な研究課題である。この国際会議ではタイのランナタイと中国の雲南省のシブソンパンナの文化関係に関する研究の促進を図るために、タイ、中国および日本の研究者を一堂に集めて国際会議を行う。

この助成は国際助成の今後の方向性を考えるうえで示

峻である。ある地方の固有文化を研究するということだが、その地方のみの研究にとどまらず、国境を越えて国際的な研究に発展する可能性を秘めているという状況はほかにも発掘可能であろう。特にタイの場合は、いままでに地方の固有文化の研究への助成を重点的に行ってきたので、今後はそれらの成果を核として、東南アジア地域、さらにはなんらかの形でグローバルなレベルの研究活動に発展させていくことが可能になってくると思われる。

このほかにもタイ関連の国際的広がりをもつプロジェクトの例を二つ挙げてみよう。一つは「18世紀中期のスリランカータイ宗教関係」である。これは助成対象者はスリランカの研究者であるが、タイとの関係が強いプロジェクトである。スリランカはインドで仏教が衰えてからは世界の仏教の中心地の一つであったが、オランダ、イギリスの支配の時代には、スリランカでも仏教が衰えていた時期があった。この仏教がスリランカで再興したのは18世紀中期のことで、当時スリランカからタイに派遣された使節団がタイの仏教の影響を持ち帰ったことが大きな要因になっており、この研究ではこのスリランカからタイへの使節団に焦点を当てて研究を行う。

もう一つの例は『ビルマのデザイン』の編集と出版である。このプロジェクトではビルマ人の建築デザイナーが永年にわたって模写し続けてきたビルマの伝統的なデザインのコレクションを出版する際に、タイの研究者が協力して、この出版をタイで行うものである。

上記二つの例ともに、固有文化の研究を行うことによって、東南アジアの研究者同士の直接のコンタクトがなされている例であり、今後この種のプロジェクトが拡大する可能性も大きい。財団のスタッフはその際、触媒の役割を果たすことが必要となる。

インドネシアでは、古文書、地方史、地方文化・地方社会制度、地方言語の分野のプロジェクトが助成対象となっているほかに、「固有文化の保存と振興」のプライオリティを拡大解釈して、近代化のなかでの伝統文化の変容過程、近代化への文化的・社会的対応などのテーマも助成対象となっている。その例は「北アチエの工業開発にともなう周辺社会の文化変容」および「複合社会に

おける社会的統合を促進する教育・社会施設の空間配置：メダン市の研究」等が挙げられる。このプライオリティの拡大解釈を、インドネシアのケースを吟味し、全体としてどこまで進めるかは今後の検討課題であろう。

インドネシアのプロジェクトのなかで国際的な広がりをもつテーマで行われているものは「東南アジアのイスラム」である。13世紀から19世紀初頭の東南アジアには、「マレー・イスラム世界」と呼び得るものが成立していた。その後、西欧諸国の植民地支配の結果として、この「マレー・イスラム世界」は現在のような国境によって分断され、各国のイスラム社会のその後の発展に違いが生じた。このプロジェクトは、インドネシア各地、マレーシア、シンガポール、フィリピン南部、タイ南部のイスラム社会を比較研究することにより、各国で起きている様々のイスラム社会の動きを、東南アジアというより広い視野から、深く理解しようとするものである。

フィリピンでは地方史、古文書、地方民俗、地方文学、演劇史、地方教育制度等の分野のプロジェクトが助成対象となっている。フィリピンは歴史的に植民地時代が長く、しかも複雑な多民族国家であるため、これまでに書かれてきた歴史書は首都マニラを中心とする政治的・行政的体制を扱っているものがほとんどであり、それも外国人によって書かれたものが多く、フィリピン人の歴史家によるフィリピン史はまだまだ完成されていない。フィリピン歴史にはまた多くの欠落部分があるため、それを埋めるためには、フィリピン社会を構成する様々な民族と様々な地方の歴史とを再構成することが必要であり、近年、地方史研究の重要性が認識されてきている。フィリピン社会が現在直面する問題の背景を明確にし、フィリピンのアイデンティティ確立のための基礎を築くには、地方史研究が重要な役割を果たすと考えられている。

その地方に住む研究者により地方史の研究が行われ、将来フィリピン史をフィリピン人の手によって書くための基礎固めがされていくという方法は、ボトム・アップの方法で着実な成果が期待できる。これは国際助成を開始した初期に助成対象となった、ある一つの機関が中心となって、東南アジア各国の歴史を書くために、各国の歴史執筆者を決め、さらにその人が各章を書く共同執筆

者を決めるという、トップ・ダウンの方法とは対照的である。ちなみにこの「東南アジア歴史プロジェクト」(1977年度助成)はいまだ終了していない。

ネパールでは古文書、古語辞書編纂、百科事典編纂、美術の分野のプロジェクトが助成対象となっている。1985年度より初めて助成の行われたヴェトナムでは美術および考古学の分野のプロジェクトが助成対象となっている。ヴェトナムとの協力は民間財団の役割の一つの可能性を示すものとして、その意義は大きい。特に、今後は近隣諸国とつながりのあるプロジェクトが発展する可能性がみられるので、将来の研究協力を目指して、財団が仲介役を果たすことも必要となってくると思われる。スリランカでは前述したタイとの協力で行われる宗教史の分野のプロジェクトのほかに、言語学の分野のプロジェクトが助成対象となっている。マレーシアでは伝統芸能および社会科学の振興の分野のプロジェクトが助成対象となっている。

このように1985年度は助成対象の国別内訳が多様化したと同時に、「固有文化の保存と振興」というプライオリティの内容が国によって質的に多様化した。

助成対象が量的にも質的にも多様化するにつれて、選考を行う際に留意しなければならない点がかかりしてきた。つまり、学術の状況は国によってかなり異なるので、一つの基準では計れないということである。申請の選考に当たっては、どうしても純粋に学術レベルの高いものが選考されがち傾向があり、それは正しいことではあるのだが、同時に東南アジア諸国の多様な状況を考えると、ある国の社会および学術の実情と進歩に最もふさわしい申請を選び出すという配慮も必要であるように思われる。

●「隣人をよく知ろう」プログラムの問題点と多様化

日本向け・翻訳出版促進助成は東南アジアの文学作品や人文・社会科学の日本語版の翻訳・出版を行う際の翻訳助成をするものであるが、8年目を迎えるに至り、累計で98件が助成対象となった。1985年度から出版社の数を増やすことを目的として、一つの出版社から提出できる申請の数を6件までと限定したため、結果的には申請数

が減り、助成件数、助成総額ともに減少している。やはり、東南アジアの本を出版することに関心のある出版社は限られてしまうのだろうか。この点は今後の検討課題である。また1冊の本の出版部数もいまだに1500~2000部の域を出ず、読書層が限られていることにも変わりがない。

読書層を増やすためにも、翻訳の質を高めていくことは必須の条件である。東南アジアからの翻訳書がほとんど手に入らなかった初期とは状況が違ってきており、この8年間で相当の経験を積まれたと思う。翻訳はいわば個人芸的な要素を含むため、画一的に質を高めるといってもそれは不可能であるが、少なくとも各言語ごとに質向上のための施策がなされてしかるべき時期にきているのではないだろうか。

東南アジア向け・翻訳出版促進助成は日本の文学作品、日本に関する人文・社会科学書、および日本人による東南アジア研究の成果を、東南アジア諸国の言語に翻訳・出版する際の助成を行う。1985年度はインドネシア(第2年度)、ネパール(第2年度)、ヴェトナム、スリランカのグループが助成対象となった。これまでにタイとマレーシアのグループが助成対象となっているので、現在6カ国のグループが翻訳・出版の作業を行っている。どのような本を翻訳書として選ぶかは各国のグループに任せているので、本の選択にも国柄が反映されて興味深いのが、各国共通の問題点が明確になってきている。それは日本向けとは次元を異にしているが、やはり翻訳の質の問題である。本来は日本語から直接各国の言語に翻訳するのが理想であり、実際日本語から直接翻訳されている本もあるが、そのような翻訳者はまだ十分に育っていないので、現在は英語版から翻訳するケースが多い。そのため様々な問題が生じ得る。例えば、アジアの言語のなかには日本語と同様、敬語や男ことば、女ことばを用いる言語があるが、英語版を通すため、そのニュアンスが正確に伝わらないなど、問題は多い。そこで、英語版を通さざるを得ない状況の下で少しでも改善を図るべく、財団では、日本語から英語に翻訳するプロセスがどのように行われているかについて、調査を外部に委託し、その調査報告を東南アジアのグループに知らせる計画である。

この調査は1985年度中ごろから開始され、報告書は1986年9月ごろに提出される予定である。

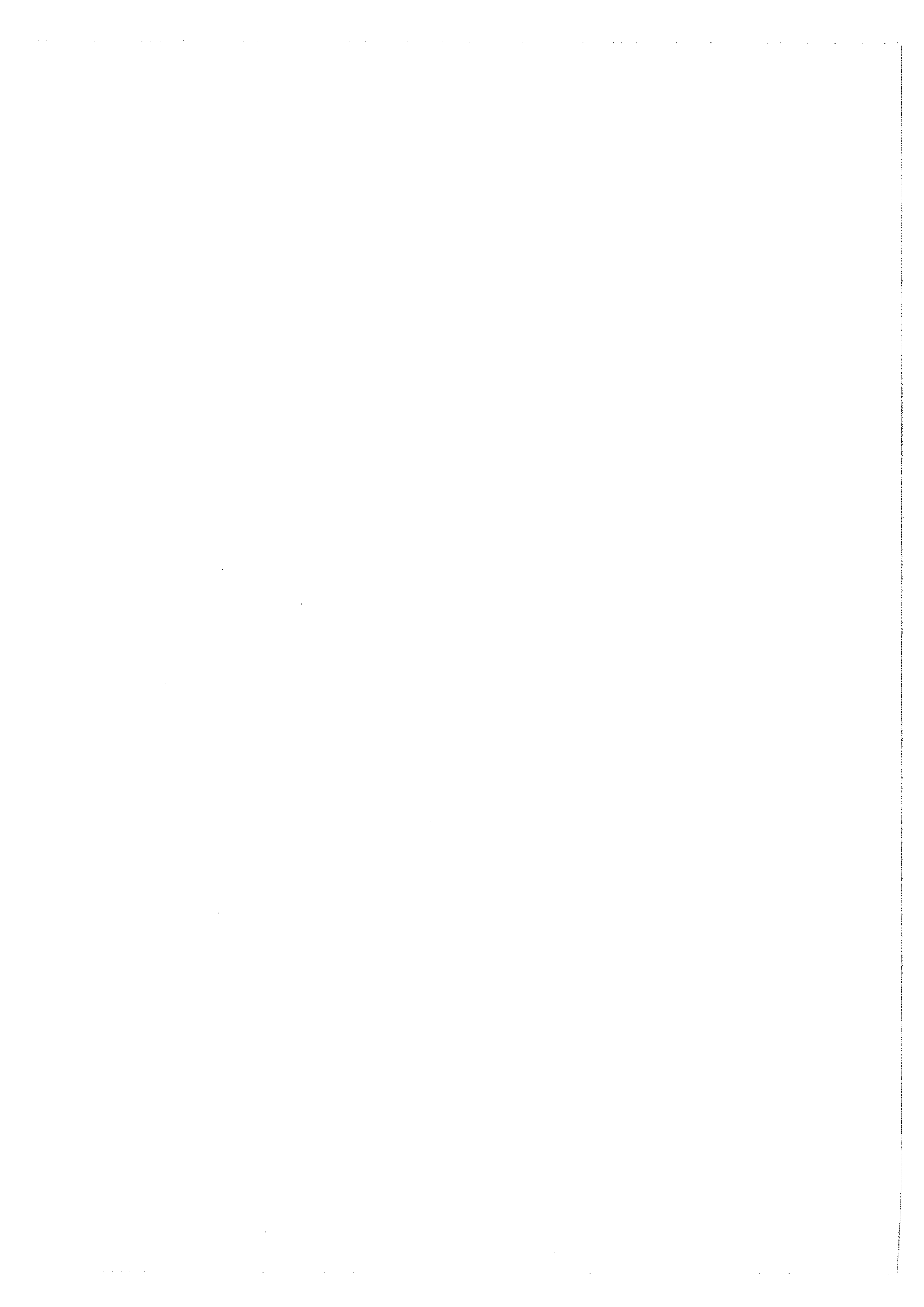
東南アジア相互間・翻訳出版促進助成は東南アジアの人の書いた文学作品、人文・社会科学書を他の東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成を行う。1985年度は、タイ（第3年度）とフィリピンのグループが助成対象となったほか、特別プロジェクトとして、タイのプラヤー・アヌマーナーチャトンによる民俗学関係著書の翻訳がヴェトナム、スリランカ、中国、ネパールで行われている。故プラヤー・アヌマーナーチャトンはタイ民俗学の創始者として令名高く、1988年にはその生誕100年を迎えることになる。そこで1988年までに東南アジア諸国でその著作の翻訳を行い、記念しようというものである。タイの民俗学の名著は、基層文化を共通とする東南アジア諸国の人々にとっても大きな刺激になると考えられ、これを契機として東南アジアの人々の直接の交流が促進されよう。

ヴェトナムではタイとの相互交流の基礎となる「タイーヴェトナム語辞書編纂」が助成対象となっている。この種の辞書編纂は今後東南アジア相互の交流が進むにつれて、さらに必要性が高まる分野である。

「隣人をよく知ろう」プログラムの東南アジア向けおよび東南アジア相互間・翻訳出版促進助成の下で翻訳・出版を行っているグループは、それぞれに共通の問題を抱

えているわけであるが、それらのグループに参加している翻訳者、作家等を一堂に集め、問題点を討論するためのワークショップをタイで開催しようというのが、「文学と翻訳の国際ワークショップ」であり、1985年度の助成対象となっている。このワークショップでは、アジアの言語間の翻訳の歴史が浅いこと、英語などを介した重訳をせざるを得ないこと、などの難しい問題に直面する、実際に翻訳に携わっている人々が実質的な意見交換をする。この点で、この種の会議にありがちな抽象論からいま一步、事の本質に迫ろうというものである。このワークショップには前述した、日本語から英語に翻訳するプロセスに関する調査の成果も報告される予定である。このワークショップによりアジア諸国相互の文学作品、人文・社会科学書の翻訳の質の向上が促進されることが期待される。

国際助成、「隣人をよく知ろう」プログラムともに新しい段階へ一歩踏み出した1985年度であった。基本的なプライオリティは変わらないが、その範囲内で、東南アジアの多様な状況やニーズへの対応が迫られている。そして、我々の目は東南アジアのみに向けられていればよいのではなく、グローバルなコンテキストのなかで東南アジアと日本の位置を把握することが必要な時期にきているのではないだろうか。



I. 研究助成

I-0. 研究助成の概要

研究助成については、例年どおり4月初日から5月末日の2か月間にわたり、一般公募を行った。基本テーマは「新しい人間社会の探求」であり昨年度と同様である。第I、II、III種の研究種別や特定課題についてもほぼ昨年準じている。それらの概要は表I-1に示すとおりである。なお、表中の「選考の重点」中にある選考基準①～⑤は、それぞれ次の内容を示している。

- ① (発想の独創性) テーマ設定や研究方法、研究体制について独創的な発想があり、研究内容に今後の展開となるようなものが存在すること。
- ② (社会に対する先見性) 研究目的が社会に対する鋭い洞察力をもって定められており、長期的にみて、その研究を遂行すること自体の、あるいはそれによって得られる成果の社会的意義が大きいこと。
- ③ (申請の適時性) 現時点でのその研究への助成が、研究者または研究チームの今後の成長・発展にとってかけがえのない契機になると予想されること。
- ④ (民間財団の助成にふさわしい研究) 他からの資金援助(たとえば政府や企業からの委託あるいは助成など)が得難い種類の研究であって、民間財団が助成することの意義が大きいこと。
- ⑤ (研究計画の実現性) 研究計画が十分に検討されており、所期の目的を達成することによって学術的にも社会的にもインパクトを与え得るような成果が得られる可能性が大きいこと。

応募件数は712件で昨年度より若干減少した。その内訳は表I-2に示すとおりである。第II種研究で応募件数の減が著しいが、これは、学際的・国際的・職際的な共同研究という主旨が徹底し、一研究室内の共同研究の申請が減ったためと思われる。

選考は7月から9月にかけて行われた。第I、II、III種研究については研究助成選考委員会(委員長:加藤一郎ほか委員11名)で、特定課題については特定課題選考委員会(委員長:縫田曄子ほか委員4名)で慎重に選考が行われ、第I種研究19件、第II種研究29件、第III種研究15件、特定課題11件が選出された。これらは10月開催の第39回理事会で審議の結果、すべて助成対

表 I-1 研究種別と助成の概要 (応募要項より抜粋)

研究種別	個人奨励研究(第I種研究)	予備的研究(第II種研究)	総合研究(第III種研究)	特 定 課 題
研究の性格	若手研究者による萌芽的な個人研究	学際的・国際的・職際的な総合研究のための準備研究(共同研究に限る)	第II種からの展開あるいは第III種研究の継続(共同研究に限る)	市民活動についての記録の作成(共同研究に限る)
1件当たり助成額	概ね50～200万円/件	概ね100～300万円/件	概ね200～2,000万円/件	概ね200万円/件
助成予定総額	約4,000万円 (約25件)	約6,000万円 (約25件)	約1億円 (約15件)	約2,000万円 (約10件)
助成期間	1985年11月1日より1年間	1985年11月1日より1年間	1985年11月1日より1年間または2年間	1985年11月1日より1年間
選考の重点	選考基準①③項を特に重視	選考基準①②④項を特に重視	選考基準①～⑤のすべての項目を総合して	別途基準を設ける

表 I-2 1985年度研究助成申請・助成結果集計

(金額は、万円単位)

	年度	全 体		第I種研究		第II種研究		第III種研究		特 定 課 題		
		申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成	
申請・助成件数	1985	712	74	258	19	374	29	34	15	46	11	
	1984	744	78	246	25	418	26	36	16	44	11	
申請・助成金額	1985	194,563	22,460	44,244	3,230	110,606	7,170	30,770	10,080	8,943	1,980	
	1984	188,953	21,870	40,738	4,060	116,437	6,570	23,347	9,240	8,431	2,000	
1件当たり平均 申請・助成金額	1985	273	304	171	170	296	247	905	672	194	180	
	1984	254	280	166	162	279	253	649	578	192	182	
外国人の参加する研究 (件)	1985	157	26	23	3	120	15	14	7	1	1	
	1984	141	30	25	6	103	14	12	9	1	1	
海外および 外国人からの 申請*	F/F	1985	33	4	13	0	18	4	2	0	0	0
		1984	46	11	19	5	25	4	2	2	0	0
	F/J	1985	16	4	10	3	6	1	0	0	0	0
		1984	8	1	6	1	2	0	0	0	0	0
	J/F	1985	43	8	26	5	16	1	1	2	0	0
		1984	40	5	30	4	10	1	0	0	0	0
	計	1985	92	16	49	8	40	6	3	2	0	0
		1984	94	17	55	10	37	5	2	2	0	0
代表者平均年齢	1985	42.7	45.6	33.3	33.2	47.8	47.5	50.5	50.6	48.6	54.9	
	1984	43.3	42.8	34.5	31.1	47.7	48.0	50.0	51.8	46.7	43.8	

* F/Fは海外在住の外国人, F/Jは日本在住の外国人, J/Fは海外在住の日本人を示す。

象に決定した。なお、各選考委員長による選後評は「トヨタ財団レポート」No. 34 に掲載のとおりである。

助成結果の特徴を幾つか要約すれば次のとおりとなる。

- ・第I種研究については、海外の大学に在籍する者（5名）や外国人研究者（3名）が多数含まれて一つの特徴となっているが、2名を除いては大学関係者であり、在野の研究者の発掘がもっと必要のように思われた。
- ・第II種研究については、学際的・国際的・職際的な共同研究の主旨がよく反映されてきたようである。そのなかでも特に国際性が強く、29件中過半数が国際共同研究であり、そのうち5件は代表者が外国の研究者である。テーマ的にも国際的な交流や相互理解、比較、援助といったものが多い。
- ・第III種研究については、大学以外の機関や民間グループの研究が多数採択されている。これらの研究は、現場との結びつきの強いもので、当財団の助成主旨をよく反映しているようである。
- ・全体のテーマを、「交通・環境」「社会福祉」「教育・文化」という一昨年度までの三領域、およびこれらの「複合」に区分してみると、それぞれ13、17、23、10件となっており、複合的なテーマが昨年よりも増えてきた。

助成研究報告会は、次の1回だけ行った。

第21回：「ことばを求めて——障害児とコミュニケーション」（1986年2月15、16日 於：東京都・こどもの城）

I-1. 第I種研究(個人奨励研究)

助成対象者一覧

助成番号下の()は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
1 85-I-006	アメリカ占領が日本映画に及ぼした影響 平野 京子 ニューヨーク大学芸術学部 院生 33歳	2,000,000
2 85-I-021	ヒトマラリア (<i>Plasmodium falciparum</i>) 可溶性抗原の解析 小俣 吉孝 大阪大学微生物病研究所 助手 35歳	1,500,000
3 85-I-031	三宅島の1983年噴火荒廃地における植生回復の初期段階の記録と位置づけ 松田 こずえ 東京都立大学理学部 研究生 33歳	1,800,000
4 85-I-044	エントロピー法則から見た経済と人間の新しいあり方 ——環境と経済システムの相互連関—— 岡 敏弘 京都大学経済学研究科 院生 25歳	1,000,000
5 85-I-053	先史時代フィリピンにおける国際長距離交易と都市集落の発展 西村 正雄 ミシガン大学人類学部 院生 35歳	2,000,000
6 85-I-061	細胞組込み型人工粘膜の開発およびその臨床応用 上田 実 名古屋大学医学部 助手 36歳	1,900,000
7 85-I-086	パプアニューギニアのファス族における歌謡と口頭伝承の研究 ——文化的認識装置としてのテキスト—— 栗田 博之 東京大学東洋文化研究所 研究員 30歳	2,000,000
8 85-I-091	早期失明者の空間的能力に関する発達的研究 山本 利和 関西学院大学文学研究科 研究員 29歳	1,800,000
9 85-I-103 (ヴェトナム)	日本の対東南アジア直接投資の成果・効果についての実証研究 ——過去の経験からの教訓を探って—— トラン・ヴァン・トゥ (独)日本経済研究センター 研究員 36歳	1,700,000
10 85-I-132	アマゾン河上流域インディオ諸族の医療文化の研究 ——現代医療問題への医療人類学的アプローチのための一視点として—— 武井 秀夫 東京大学社会学研究科 院生 37歳	2,000,000

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
11 85-I-134	鳥類の非捕殺的モニタリング方式の開発とその標準法作成の試み 本田 克久 愛媛大学農学部 技術補佐員 34歳	1,900,000
12 85-I-138 (アイスランド)	東アジアにおける葬礼体系の比較研究 ステファンソン・ハルドール 筑波大学歴史人類学系 講師 35歳	2,000,000
13 85-I-145	大衆演劇における演技の映像による研究 ——絞切り型とアドリブの構造—— 鶴飼 正樹 京都大学文学研究科 院生 26歳	1,500,000
14 85-I-154	母子相互作用における音環境としてのマザリーズ（母語）と乳児の発声行動の関連 志村 洋子 埼玉大学教育学部 助教授 34歳	1,800,000
15 85-I-180 (タイ)	19世紀後半の日本における用水開発型地域開発事業の思想及び構想の特性とその変遷 スントン・ラプキタロウ 東京工業大学社会工学科 院生 32歳	1,000,000
16 85-I-245	南方上座部仏教における女性の地位と役割 ——ビルマ“ミッテラシン”の存在の意義について—— 川並 宏子 ロンドン大学人類学部 院生 33歳	1,400,000
17 85-I-246	学歴と社会・経済的地位の達成：日・米・英国際比較研究 石田 浩 ハーバード大学社会学部 院生 31歳	1,800,000
18 85-I-249	米国における高齢者教育プログラムの実証的研究 ——高齢化社会に対応する新しい教育像を求めて—— 西出 郁代 カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学部 院生 43歳	1,200,000
19 85-I-250	アラスカ北極圏油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動とその狩猟生活 に関わるエスキモーの研究と記録 星野 道夫 写真家 33歳	2,000,000
小 計	19 件	32,300,000

研究概要

1. アメリカ占領が日本映画に及ぼした影響

(平野 京子)

第2次世界大戦後のアメリカ占領は、日本の文化・政治・社会・経済に様々な形で影響を与えた。最近ではこの占領時代の意義が、検閲の存在を中心に、日米両国で論議的になってきている。

当研究は、占領が日本映画に及ぼした影響を、当時の映画の分析、関係者のインタビュー、占領資料、検閲関係文獻および当時の雑誌・新聞等を通じて、日本映画界がいかにアメリカの占領政策を受け入れ、変化していったかについて詳細に検討する。

2. ヒトマラリア(*Plasmodium falciparum*)可溶性抗原の解析

(小俣 吉孝)

ヒトマラリアのうち、熱帯性マラリアは最も死亡率が高く、いまだ根絶しがたいため熱帯地方に広くまん延し、地域社会の開発を妨げる原因の一つとなっている。そのため効果的なワクチンの開発が待たれている。

当研究は、感染原虫であるマラリア虫体の抗原の検出および分離精製を目的として、抗原性成分の解析を行うことによって、マラリア虫体の赤血球内寄生現象や薬剤耐性株出現機序の解明を試みることにしている。

3. 三宅島の1983年噴火荒廃地における植生回復の初期段階の記録と位置づけ

(松田 こずえ)

植物群落の移り変わってゆくプロセスは、その長いタイムスケールのゆえに把握されにくい。従来、噴出年代の異なる幾つかの溶岩流上の植生を比較するとか、木の年輪解析などによって変化過程の推定が行われてきた。

当研究は、直接観察により、群落の変化をより具体的に記録することを目指す。三宅島のシイ林は全国でも数少ない自然林として貴重なものだが、1983年の噴火時の降灰によりその一部が大規模な被害を受けた。そこで、このような自然林において、植生回復の初期過程を詳しく記録し今後数十年にわたる継続観察の第1歩とする。

4. エントロピー法則から見た経済と人間の新しいあり方

——環境と経済システムの相互連関—— (岡 敏弘)

1970年代以降、環境問題は、単なる私的な企業犯罪や階級対立の表現といった見方だけではとらえ切れないという認識が深まってきた。そして、何人も被害者であると同時に加害者であるような、また、影響が長期間でかつ不可逆であるようなものとして環境問題をとらえる場合、エントロピーという概念が有効と考えられる。

当研究は、エントロピーの視点の教えるところを重視し、現在の経済システムが定常性を崩していく仕組みを、理論と現実観察の両面から解明し、市民運動と手を携えながら、これに代わる社会を探ろうとするものである。

5. 先史時代フィリピンにおける国際長距離交易と都市集落の発展

(西村 正雄)

従来、東南アジア考古学において、国際長距離交易は研究の中心課題であったが、その見解は、交易の一方の相手である東南アジア社会は文化的に極めて遅れた段階にあり、交易を媒体とした他文化からの影響下でのみ発展し得たとするものであった。

当研究は、東南アジアの1集落の側から、その発展の過程と交易との相互関係を研究する。このため、まず交易と社会—文化システムの複合化に関するモデルを確立し、フィリピン、セブ島セブ市における野外調査により獲得される実際の考古資料により、これを検証する。

6. 細胞組込み型人工粘膜の開発およびその臨床応用

(上田 実)

口腔粘膜が損傷を受けた場合には、粘膜移植によってその組織再建を行わなければならない。しかし粘膜の供給量は極端に少ないため、人工粘膜の開発が強く望まれてきた。

当研究では、患者自身の微少な粘膜細胞を生体外で増殖させ、大量の粘膜組織を作製し、再び患者に移植する「細胞組込み型人工粘膜」の作製法および移植法を確立することが目的である。さらに、この人工粘膜の安全性を確認した後、ヒトへの応用を試みるのが究極の目的である。

7. パプアニューギニアのファス族における歌謡と口頭伝承の研究 (栗田 博之)

パプアニューギニアの諸社会は、今世紀半ば以降、一気に新石器時代の生活から現代社会へと飛び込んでしまった。そのなかで、高地地帯や海岸地帯の開発は急速に進んでしまったが、ファス族を含む高地周辺部の諸社会は地理的に孤立していたために開発が遅れ、いま現在、文化変容・社会変化の真つただなかにある。

当研究は、このような急激な変化を経験しているファス族が、歌謡や口頭伝承を通していかに文化的アイデンティティを保持し、社会的統合を保っているかを明らかにしようとするものである。

8. 早期失明者の空間的能力に関する発達的研究 (山本 利和)

視覚障害者の歩行訓練や歩行補助具の開発のためには、視覚障害者の歩行や定位能力に関する基礎的なデータが必要とされる。ところが、現在の日本ではこうした情報の蓄積がほとんどなされていない。

当研究は、小学校入学前の盲幼児において、空間認識能力や移動能力がどのように発達変化してゆくのかを、実験と自然な生活場面での長期にわたる行動観察を通じて明らかにしてゆく。こうした研究を通じて、視覚障害者の歩行や定位能力に関する貴重なデータが得られることが期待される。

9. 日本の対東南アジア直接投資の成果・効果についての実証研究 (トラン・ヴァン・トゥ)

日本の対東南アジア諸国民間直接投資は、本格化してから約15年間経過した。その投資が東南アジア経済にどのように貢献してきたか、どのような問題を起こしているか。この投資の成果・効果を分析し、この分野での日本と東南アジアとのこれからの関係のあり方のために一つの教訓を引き出せれば有意義なことである。

当研究は、産業発展プロセスと外国資本との関係という視点で、合成繊維産業を事例研究として、東南アジアの産業発展と日本多国籍企業の行動・成果を分析し、産業の国際競争力や日本の技術移転のあり方等を評価する。

10. アマゾン河上流域インディオ諸族の医療文化の研究 (武井 秀夫)

従来、医療人類学は、様々な文化要素のなかから現代医学に対応する部分のみをその文化の民族医療システムとして分離し、これに焦点を当ててきた。しかし、いわゆる「未開医学」では病気は災厄の一部と認識されていることが多く、それゆえ、医療システムは災厄指向性のシステムの一部を構成する形で存在していると考えられる。

当研究は、アマゾン河上流域インディオ諸族を対象として、そのコスモロジーと治療儀礼に焦点を当て、病者の生活史と、それを取り巻く社会関係をも考慮に入れ、災厄指向システムという視点からの医療民族誌を試みる。

11. 鳥類の非捕殺的モニタリング方式の開発とその標準法作成の試み (本田 克久)

野生生物を捕殺し分析することは、その保護・管理の面から社会的に問題視されることがあるが、毛・爪・羽などの硬組織や血液は生物を生存したままで採取できる。しかし、これら組織中の元素値は必ずしも体内の総体を表しているとは限らず、組織固有の蓄積変動を示す。特に鳥類では換羽、渡り、産卵などの過程で体内蓄積量の変動が硬組織にどう影響するかは、未開拓のままである。

当研究は、生理生態の異なる多種鳥種を対象に多種元素の組織濃度と羽蓄積との関係を一部の室内実験も含めて検討し、鳥類の非捕殺的モニタリング方式を作成する。

12. 東アジアにおける葬礼体系の比較研究 (S. ハルドール)

中国(台湾)、韓国と日本は、地理的、歴史的、文化的に非常に隣接性を持ち、そのため相互に様々な規模と程度において、恒常的に影響を与え合ってきた。そのため、これらの国々は、文化的多様性を越えて、最も深い部分で同一と見なされる共通の特徴をもっている。

当研究は、台湾、韓国の2カ国に滞在し、各国で葬礼に関する調査を、儀礼の専門家である宗教者や葬儀屋、あるいは遺族を通して行う。日本を含め、東アジア諸国の各地域における葬礼体系の実態を、様々なレベルから観察、究明することを主な目的としている。

13. 大衆演劇における演技の映像による研究——紋切り型とアドリブの構造—— (鶴飼 正樹)

大衆演劇はその起源を歌舞伎にもち、明治以降、新派・新国劇・曾我廼家劇等を取り込みながら、今日まで脈々と継承されてきた。その芝居の稽古は「口立て」と称し、台本はなく口頭で行われる。しかも、一つの劇団の持ちネタは200～300本といわれている。

当研究は、この大衆演劇をビデオや写真を使用して記録するとともに、紋切り型とアドリブという視点から、演技（役柄、セリフ、行為、舞台衣裳、小道具、場面、モチーフ、ストーリー等の体系としての演技）の構造を明らかにすることを目的としている。

14. 母子相互作用における音環境としてのマザリーズ (母語)と乳児の発声行動の関連 (志村 洋子)

近年、乳幼児のもつ様々な能力について多くの知見がもたらされ、早い時期からの人間としての絆、とりわけ母と子の絆の重要性が見直されてきている。なかでも、声を通しての母子相互作用は最も基本的なものと考えられている。

当研究は、日本人の母親が生後60日前後の乳児と声を通して交流する際の語りかけ（マザリーズ）の音響分析と、乳児の発声の音響分析をともに行い、それらの関連性を探り、音環境としてのマザリーズの特徴を明らかにすることを目指している。

15. 19世紀後半の日本における用水開発型地域開発事業の思想及び構想の特性とその変遷 (スントン L.)

19世紀後半の地域開発は近代化の渦中にあり、当時の各地の農業用水開発は、都市部の商業拠点地と違って生活基盤の食糧生産にねらいがあった。不毛の荒地、過剰人口、水量不足などのあらゆる問題を克服しながら、開拓者がエネルギーを投入して事業を成功させようと東奔西走していた。

当研究は安積疎水、明治用水、広瀬井手および通潤橋用水を選んで、土木技術的側面や地域経営方式、開拓者固有の特質を取り上げ、事業の思想と構想を体系化していくことをねらいとしている。

16. 南方上座部仏教における女性の地位と役割

(川並 宏子)

あらゆる宗教的伝統のなかで、女性は重要な役割を果たしながら、その存在意義は無視されがちであった。特に南方上座部仏教においては、女性は「不浄で煩惱の源」として低い地位におかれ、「出家」の道も断たれていた。

当研究は、南方上座部仏教社会のなかで、理論的には存在しないはずの女性出家者＝ミッテラシンが、なぜ現実には存在しているのかという宗教的・社会的疑問に取り組み、サンガおよび在家者との関係で、そして社会全体のなかでその機能と役割を探るものである。調査方法は社会人類学の伝統的な「体験調査」による。

17. 学歴と社会・経済的地位の達成：日・米・英国際比較研究 (石田 浩)

現代の日本社会は学歴社会である、という主張の根底には、他国に比べ、学歴効用の大きさが飛び抜けているのではないかという考えがあるものと思われるが、厳密な調査の下に実証されているとは言い難い。

当研究は、日・米・英の全国社会調査の基礎データを比較可能な形に組み直し、学歴が多次元的な社会経済的地位の達成に与える影響力を、比較研究するものである。また学歴のもつ社会移動機能と世代間の不平等再生産機能に着目し、どちらの機能が、各国においてより有力であるかを、比較検討するものである。

18. 米国における高齢者教育プログラムの実証的研究

(西出 郁代)

高齢化社会は世界各国の共通の関心事となっており、その対応策として、高齢者教育の果たす重要な役割が論議されるようになってきている。

当研究は、アメリカにおいて多面的に取り組まれている高齢者教育プログラムを、特に学習者のニーズとプログラムの立案過程、授業内容と授業形態、教授法および補助教材の利用、プログラム提供者と教師、学習者の連携、財政的保障等に焦点を当てて実地に研究し、その比較検討により、日本における高齢者教育の将来に向けて具体的提案を模索しようとするものである。

19. アラスカ北極圏油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動とその狩猟生活に関わるエスキモーの研究と記録 (星野 道夫)

アメリカ最後のフロンティア、アラスカは、北極圏最大級の油田発見により、大きく変貌しようとしている。その開発をめぐる大論争は、人類の直面している環境問題の一つのシンボルであったが、結果として開発の波に押しされつつあるのが現状である。

当研究は、論争の焦点ともなった、開発により大きな影響を受けてゆくであろうカリブーの季節移動と、その狩猟生活にかかわるエスキモーの記録とに焦点を絞り、写真を用いて追跡調査を行っていかうとするものである。

I-2. 第II種研究(予備的研究)

助成対象一覧

助成番号上の*印は国際共同研究を示す。(日本人の協力を伴う外国人だけの共同研究も含む)
助成番号下の()は代表研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
20 85-II-024	身体障害者の意識と行動における周囲とのギャップと社会への融合対策 内野 昇 グループ西遊記 代表 31歳 ほか2名	2,000,000
21 85-II-025 [*] (中華人民共和国)	外から見た日本経済の活力 ——中国人として日本経済発展の根源と将来の展望についてどう見る—— 馮 昭奎 中国社会科学院日本研究所経済室 主任 45歳 ほか2名	3,000,000
22 85-II-026 [*]	新世代住民に対する新しい保健医療計画の確立 ——日米両国における比較研究に基づいて—— 稲田 紘 筑波大学社会医学系 助教授 43歳 ほか6名	3,000,000
23 85-II-052	「国民の住宅白書」づくりのための予備研究 吉野 正治 京都府立大学生生活科学部 教授 56歳 ほか7名	2,400,000
24 85-II-075 [*] (イギリス)	日欧ビジネスマンの文化摩擦に関する調査方法論的研究 ——国際間の誤解解消のために—— イレーネ・M・ヤング 筑波大学 私費外国研究員 54歳 ほか7名	2,800,000
25 85-II-079 [*]	日本語およびタイ語一次史料に基づく日・タイ交渉史の予備的基礎研究 吉川 利治 大阪外国語大学外国語学部 教授 45歳 ほか5名	3,000,000

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
26 85-II-100*	汎都市化時代の大都市圏における計画システムに関する日・英共同研究 ——新しい公共・民間セクターの役割分担を求めて—— 渡辺 俊一 日英都市計画比較共同研究会 代表 46歳 ほか8名	2,900,000
27 85-II-103	医療におけるテクノロジー・アセスメントの予備的研究 吉田 忠 メディカル・テクノロジー・アセスメント研究会 代表 45歳 ほか5名	2,600,000
28 85-II-105	聴覚障害児の身体・心・言葉を育て、健聴児と一緒に生活ができる方法を考える 中島 誠 京都大学教養部 教授 60歳 ほか12名	1,900,000
29 85-II-110	都市再開発における私権の処理と再構成 水本 浩 不動産利用権研究会 代表 64歳 ほか9名	1,500,000
30 85-II-114	「ヒトと野生」共栄の途を探る ——「鶴の山」をモデルとして—— 佐藤 孝二 名古屋大学農学部 教授 56歳 ほか2名	1,400,000
31 85-II-129* (タイ)	北タイ山岳部族の定着化及びケン栽培転作計画実施のための基礎的調査 ——シイタケ栽培導入を通して—— チיתי・ピントング タイ高地農業研究会 代表 42歳 ほか5名	3,000,000
32 85-II-136	健康習慣と身体的及び精神的健康度との関連性 ——好ましい健康習慣への行動変容のために—— 小泉 明 東京大学医学部 教授 58歳 ほか9名	2,700,000
33 85-II-170	心身障害児の早期発見のための「母親によるチェックリスト」の実用化 村井 憲男 宮城発達障害研究会 代表 50歳 ほか12名	1,600,000
34 85-II-173	社会的ハイリスク環境下でのストレスとコーピングに関する行動科学的研究 宗像 恒次 国立精神衛生研究所 主任研究官 37歳 ほか3名	1,800,000
35 85-II-198*	アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究 ——自動車および電機企業における「日本的経営」の現地適応可能性—— 安保 哲夫 多国籍企業研究グループ 代表 48歳 ほか10名	3,000,000
36 85-II-228*	東アフリカの作物害虫（ズイムシ類）に対する主要作物の抵抗性に関する国際共同研究 日高 敏隆 日本ICIPE協会 会長 55歳 ほか5名	2,900,000
37 85-II-232	北海道沿岸に生息するアザラン類の保護・管理に関する研究 ——特にゼニガタアザランを中心として—— 中村 悟 ゼニガタアザラン研究会 代表 48歳 ほか18名	2,600,000

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
38 85-II-234*	ネパール山村における先進国ボランティア団体と現地NGO、行政、住民との共同参画的 地域開発のあり方に関する研究 川喜田 二郎 ヒマラヤ技術協力会 代表理事 65歳 ほかに9名	2,700,000
39 85-II-251	学校における児童・生徒の人間関係の探求 ——保健室と児童・生徒の関係を中心に—— 中丸 弘子 広島・養護教諭精神衛生研究グループ 代表 42歳 ほかに12名	1,600,000
40 85-II-261	雪に対する住民意識の日本と北欧（主としてフィンランド）との比較に関する研究 武田 英文 雪問題研究会 代表 40歳 ほかに5名	2,200,000
41 85-II-264	日米戦時交換船の実態究明と帰国者に関する資料収集 ——日系アメリカ人の歴史の視点から—— 村川 庸子 津田塾大学国際関係研究所 研究員 32歳 ほかに1名	2,600,000
42 85-II-275*	中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析（予備調査） ——特に毛烏素沙漠において—— 松田 昭美 内蒙古沙漠研究会 代表 60歳 ほかに11名	3,000,000
43 85-II-284*	タイ東北部ソンホン村における手織物の向上・発展を支援するための日・タイ共同研究 森本 喜久男 タイ農村手織物研究会 代表 37歳 ほかに8名	2,600,000
44 85-II-293*	「ガンダーラ地域博物館」基本計画に関する調査・研究 西川 幸治 京都大学工学部 教授 54歳 ほかに9名	3,000,000
45 85-II-313*	西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 (フィリピン) エフレン・フローレス 東南アジア漁船研究会 代表 43歳 ほかに3名	2,000,000
46 85-II-330*	タイ国における企業内民主主義に関する意識と実態 ——純タイ企業と日・タイジョイント・ベンチャーにおける比較研究—— (タイ) ピシエツ・マオラノン ベーカーアンドマッケンジー法律事務所 所員 36歳 ほかに4名	2,400,000
47 85-II-331*	国際プロジェクトチームによる日本美術史研究のための基礎資料整備計画 佐々木 丞平 JACP 代表 44歳 ほかに10名	2,700,000
48 85-II-368	近世・近代日本のセクシュアリティの歴史 ——性の言説の成立とその象徴論的分析—— 酒井 直樹 シカゴ大学人文学部 助教授 39歳 ほかに2名	2,800,000
小 計	29 件	71,700,000

研究概要

20. 身体障害者の意識と行動における周囲とのギャップと社会への融合対策 (内野 昇)

身体障害者は社会を恐れると同時にそこに出たがってもあり、健常者とともに生きる必要を漠然とは考えている。だが行動力と知識に欠け、現実の壁を自力では破りかねている。そして劣等感や2次障害を抱え込み「甘え」や逃げも出ているのだが、他人との深い接触をもてないため、そのことに自覚的でない。

当研究は、重度障害者、軽度障害者、ボランティア健常者の各視点から、このジレンマを体験的にとらえ、各視点を尊重することで問題を客観的に追求し、弱者と強者の共存の意味と対策を探るものである。

21. 外から見た日本経済の活力

(馮 昭奎)

現在、中国は社会主義現代化建設および経済体制の改革を推し進めていると同時に、対外開放を実行するなかで、中日の友好的な政治関係と経済関係を樹立しつつある。

当研究はそういう情勢の下で、中日両国間の相互理解を深めるために、日本経済発展の原因と将来の展望について研究するものである。中国の経済体制改革の問題意識をもちながら、日本の経済、技術の発展についてのプラス、マイナスの両面の経験に着目し、中国人らしい観察・分析・研究成果を提出することが、当研究の特徴である。

22. 新世代住民に対する新しい保健医療計画の確立——日米両国における比較研究に基づいて—— (稲田 紘)

慢性疾患の予防と健康管理に不可欠な1次予防活動の推進にはコミュニティとしての取り組みが要求されるが、旧来のコミュニティは新しい世代で崩壊しつつあり、結果的に組織的な保健予防活動が停滞している。

当研究は、コミュニティの改編により新世代住民の保健活動への参加を促すとともに、都市と農村で食生活改善キャンペーン等の1次予防活動を行い、さらにアメリカと共同研究を行って、アメリカの保健活動に関する方策を日本に適した形で導入して我々の活動との融合を図り、今後における新しい保健活動計画の確立を目指す。

23. 「国民の住宅白書」づくりのための予備研究

(吉野 正治)

わが国社会の当面の緊急課題であり、来るべき21世紀に向けての最大の課題の一つでもある国民の住宅・住環境問題の解決に当たって、長期的視野に立った抜本的な政策の確立が求められているが、その基礎には国民が実際に直面している住居の問題を正確にリアルに把握することが不可欠である。

当研究は、以上の視点に立ち、住宅問題の赤裸々な実態を、現にそれに悩んでいる生活者・国民の側から具体的・多面的に明らかにしようとする調査研究であり、住居学から公衆衛生学までの専門家を含む共同研究である。

24. 日欧ビジネスマンの文化摩擦に関する調査方法論的研究 (E. M. ヤング)

日本と西洋諸国はお互いに友好関係にあるが、国際間の緊張は高まるばかりである。このような、現在問題になっている摩擦は、主に文化的要因から生ずるコミュニケーション・ギャップに起因すると考えられる。

当研究は、異文化間のコミュニケーションの成否は内容よりむしろ過程に関する特定の技術に依存しているとの考えにより、日本人と西洋人が出会う場合の接触の過程を解明することを目的としている。具体的には、企業活動や学会などの日本人と西洋人の出会いの場を観察し、学際的・国際的なチームにより討論を重ねていく。

25. 日本語およびタイ語一次史料に基づく日・タイ交渉史の予備的基礎研究 (吉川 利治)

15世紀初頭に開始された日・タイ間の交渉は、近年ますます多角化し、両国の関係はその密度を増しつつあるが、その歴史を通観する作業はまだ行われていない。

当研究は、将来、日・タイ交渉史を執筆するための基礎的作業として、日・タイ両国の歴史学者が協力して、現存する日本語およびタイ語の公刊・未公刊資料の所在を確認し、その一部を予備的に複写し、確認された関係資料の組織的複写保存の準備を行うことを目的とするもので、作業は、東京の外務省公文書館、内閣文庫、バンコクの国立公文書館を中心として行われる。

26. 汎都市化時代の大都市圏における計画システムに関する日・英共同研究 (渡辺 俊一)

日英両国は、都市的生活様式が広く確立した汎都市化の状態に達している。早い時期に汎都市化段階に達し、都市整備の計画技術を蓄積してきたイギリスの経験は、日本にとって参照すべきものであり、一方、経済問題に悩むイギリスにとっても、日本の民間活力を生かした都市整備の推進は大きな現実的関心となっている。

当研究は、〈汎都市化〉を基本的視点に、今後の大都市圏における生活環境を整備・開発・保全していくための計画システムについて、公共・民間セクターの役割分担を軸に、日英の比較共同研究を行うものである。

27. 医療におけるテクノロジー・アセスメントの予備的研究 (吉田 忠)

近年の医療技術の進歩は目覚ましく、診断や治療で著しい成果を上げている。しかし反面、医療現場における機械化の結果、医師とのコミュニケーション不足により患者の疎外感は増大しており、更には医療費の高騰といった問題も生じている。

当研究は、こうした当面の医療問題・危機への打開へ向けて、医療における新技術の安全性、効果などを分析するとともに、新技術導入による医療費の高騰や社会通念・倫理への影響など、医療におけるテクノロジーに関する諸局面を再評価・検討することを目的としている。

28. 聴覚障害児の身体・心・言葉を育て、健聴児と一緒に生活ができる方法を考える (中島 誠)

聴覚障害児は、言葉や知能の発達が遅れ、「9歳の壁」を越えられず、精神発達遅滞や学力不振扱いされることが多く、また、言葉のやり取りができないため、健聴児から孤立しがちである。

当研究では、聴覚障害幼児について、次のことを重点的に検討する。①FM式補聴器を使用し、大人の言葉を入力する機会を多くする。②動物や乗物などの実物に接して対象を多面的に把握する機会を多くし、上位概念形成の基礎をつくる。③動物や乗物の玩具を用いる象徴遊びの機会を多くし、言葉の象徴的理解の基礎をつくる。

29. 都市再開発における私権の処理と再構成

(水本 浩)

都市再開発については、従来、都市工学および行政法学の研究者たちによって研究されてきた。しかし、都市に存在する土地・建物などの不動産には私権が付着しているので、私権の絡まりを解きほぐすことなしには、実際には都市再開発は進まない。

当研究では、所有権、借地権、借家権その他各種の私権につき、それらをどのように処理し、再構成すべきかに関するルールを探究しようとするものである。民法学者が中心となり、行政法・不動産鑑定・税務理論などの専門家が参加した学際的共同研究である。

30. 「ヒトと野生」共栄の途を探る——「鶺鴒の山」をモデルとして—— (佐藤 孝二)

自然と野生の保護は、人類の果たすべき重要な課題であろう。しかしながら、その実施に際し、時として保護すべき動物とヒトとの間でトラブルを招来することがある。

当研究は、「鶺鴒の山」(愛知県)のカワウ (*Phalacrocorax carbo*) を対象として、ヒトと野生の共栄の途を模索することを目的として計画された。カワウの繁殖性、餌の生産・供給など、動物側における因子と、人間社会からのインパクト(環境汚染)について、生態・生理・環境疫学的手法により解析を試み、その結果に基づき「鶺鴒の山」の未来像を検討する。

31. 北タイ山岳部族の定着化及びケン栽培転作計画実施のための基礎的調査 (チイティ・ピントング)

現在、タイ国北部山岳地帯の山地民は、広く焼畑およびケン栽培を生業としているが、彼らの定着化ならびにケン栽培転作を目的に、換金作物栽培実験と栽培奨励策がとられてきた。しかし、実験作物選択の問題、山地民の市場知識の欠如等による低生産意欲により、彼らによる十分な栽培実施には至っていない。

当研究は市場価値の高いシイタケ栽培の実験をタイの一山村、ケイノ村で行い、同時により有効な転作計画立案のため村の社会生態調査を進めながら、村民のケン転換作物栽培意欲を探ることを目的とする。

32. 健康習慣と身体的及び精神的健康度との関連性

(小泉 明)

日常的な健康習慣が身体的・精神的な健康度に及ぼす影響は、長期的な調査によって初めて明らかになる。アメリカでは約30年間の調査でこの影響関係が実証されているが、わが国には同種のデータはない。

当研究は、これからの健康増進や疾病1次予防にはセルフ・ケアの観点からの対策が必要であると考え、アメリカにおける先行研究事例を参照として、長期的な追跡調査に着手しようとするものである。そのため東京区部の保健所と協力し、本年は約10,000名の健康診査受診者を対象に調査を行うほか、米国研究者との交流を図る。

33. 心身障害児の早期発見のための「母親によるチェックリスト」の実用化

(村井 憲男)

我々は、これまでに行った子供の行動観察者としての母親の能力に関する基礎的研究の成果を踏まえ、母親による障害発見のためのチェックリストを作成した。

当研究は、こうした母親の検知能力を利用するチェックリストを、心身障害児早期発見のための道具の一つとして、実際に使用するための基準をつくることを目的に行われる。すなわち一つの地方自治体での乳児検診で、このチェックリストを実際に使用して、母親の早期の異常印象が後の時期の障害発現につながるかどうかを、追跡調査し、検討するものである。

34. 社会的ハイリスク環境下でのストレスとコーピングに関する行動科学的研究

(宗像 恒次)

ストレスと疾病に関する研究はアメリカを中心に盛んに行われ、ストレス性の高いライフイベントが疾病形成に強い影響を与えることが明らかになっている。しかし逆に疾病自体がライフイベントを増加させるという相互作用性があり、疾病の社会的起因を説明する変数として不十分である。

当研究は、社会的ハイリスク環境、すなわち強い社会・経済・心理的拘束が恒常的にある環境下の人々はライフイベントを多発しやすく、疾病を発生しやすいという仮説を実証的に検討しようとするものである。

35. アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究

(安保 哲夫)

最近わが国製造企業は、輸出主導型から海外現地生産型へと急速に對外発展の重点を移している。そこで問題となるのは、製造工程で高い効率と品質基準を実現して驚異的に輸出競争力を強めた「日本的経営」が、日本とは異なる社会文化的環境下でいかに可能かという点である。

当研究は、この日本企業の強味が、多様な地域と民族から成るアメリカという対極的な環境下で、いかに、どこまで適用可能かという問題を、自動車と電機の主要対米進出企業を対象に、日米共同の現地調査を通じて検討するものである。

36. 東アフリカの作物害虫（ズイムシ類）に対する主要作物の抵抗性に関する国際共同研究

(日高 敏隆)

東アフリカの主要作物であるトウモロコシ、ソルガム等は、その生産性の拡大に伴って害虫被害も増加しており、減収と農薬の過剰使用を避けるために、害虫に抵抗性のある作物品種の育成が急務となっている。

当研究はそれら主要作物の重要害虫（ズイムシ類）に対する作物の抵抗性の機構を解明することを目的とし、ケニア（ICRIP）と日本で並行して、害虫の側の反応、作物の側の性質、害虫側の変異性についての解析を進め、ゆくゆくは現地における野外試験にまで発展させることを意図したものである。

37. 北海道沿岸に生息するアザラシ類の保護・管理に関する研究

(中村 悟)

現在、ゼニガタアザラシは道東の6箇所の岩礁帯にわずか350頭ほどしか生息しないという危機的状況にあり、早急に、科学的・法的・社会的裏づけに基づく適切な保護管理対策が必要である。

当研究は、地元の動物園と大学の専門家が協力し、アザラシ類の生息数・生息域等の生態調査、漁業との関係の調査、被害防除方法の検討等により、適切な保護管理のための基礎的データを蓄積するものである。加えて野生動物やその生息地の社会教育的活用の可能性も模索する予定である。

38. ネパール山村における先進国ボランティア団体と現地NGO, 行政, 住民との共同参画的な地域開発のあり方に関する研究 (川喜田 二郎)

開発途上国の農山村開発における不可欠の要素は、地域住民の創造性の誘発や伝統的知識の資源化であるとされており、それらを有効にもたらす開発コミュニケーションのあり方や社会組織化方式が強く求められている。

当研究は、ネパール山村に対する過去10余年の技術協力活動を分析対象として、特に技術移転の諸過程に注目し、開発にかかわる地域住民や行政機関、技術者集団、各種ボランティア団体などによる相補的・協同的關係の形成メカニズムを解明するとともに、そのネットワークの手法を提示するものである。

39. 学校における児童・生徒の人間関係の探求——保健室と児童・生徒の関係を中心に—— (中丸 弘子)

今日の規律を重視した学校管理体制のなかで、保健室は、だれもがいつでも利用できる所であり、保健室には児童・生徒が様々な訴えで訪れている。しかし、保健室の役割や意義はあいまいにされたままである。

当研究は、広島県下の高校に勤務する養護教諭が中心になり、保健室を訪れる児童・生徒と養護教諭との人間関係の開発を図り、児童・生徒の背景・主訴を明らかにし、これからの保健室の機能を追究することを目標としている。

40. 雪に対する住民意識の日本と北歐（主としてフィンランド）との比較に関する研究 (武田 英文)

雪国の地域社会づくりには、そこに住む人たちの意識の問題が大きい。雪国に生活しながら、自分たちの風土に立脚した物の考え方はなく雪のない地方の思考を安易に受け入れ、そのため後で雪や寒さにかかわる問題が派生してくることが多いからである。

当研究は、同じような寒冷積雪の環境下でありながら高度福祉社会を築き上げ、国民所得も高い北歐の人々は雪に対してどのような意識をもっているのか、日本とはどのように違うのかをアンケート調査を主体にして把握しようとするものである。

41. 日米戦時交換船の実態究明と帰国者に関する資料収集 (村川 庸子)

日系アメリカ人の諸問題は、日本出移民史およびアメリカ合衆国における少数民族史の観点から、歴史的社会的にとらえる必要がある。この研究分野において、戦中および戦後の日系人の実態は十分解明されていない。

当研究は、これまで手つかずであった第2次世界大戦中の日米交換船に着目し、戦時外交資料等により、交換船に日本人移民と日系アメリカ市民が含まれるに至った経緯と人選の根拠を究明する。さらに、“帰国者”を追跡して関係資料の収集と対面聞き取り調査を行い、帰国以後の経済的・社会的および心理的状況を明らかにする。

42. 中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析 (松田 昭美)

中国陸地の13%、128万km²は沙漠地帯である。この地帯には、かつては緑草地帯を築きながら、自然環境・人為環境の変遷により沙漠化している地域が含まれる。内蒙古の400万haの毛烏素沙漠は、1950年代になって10万ha/年の速度で沙漠化が進行しており、気象・土壌・塩類集積・開墾・過放牧などがその発生要因といわれている。

当研究は中国沙漠の農業開発に貢献するため、中国研究者とともに毛烏素の沙漠化の機構・動態を気象・土壌・灌漑・砂防の立場から総合的にシミュレーション解析し、沙漠化防止、緑化に対し基礎的な提言を行う。

43. タイ東北部ソンホン村における手織物の向上・発展を支援するための日・タイ共同研究 (森本 喜久男)

タイ東北部のソンホン村で、農閑期に村の婦人たちが織る伝統的な絹織物「マットミー」を向上・発展させ、出稼ぎの多い村の収入向上を図るプロジェクトが、日・タイの草の根グループのイニシアティブで昨年始まった。この事業を成功させるためには、幅広い専門的知識と調査・研究が不可欠である。

当研究は、桑・養蚕・手織り・デザイン・染め・マーケティングなどに関する日・タイの専門家が村人や市民グループと協力して、専門的立場からの助言と協力をを行い、側面からこの事業を支援しようとするものである。

44. 「ガンダーラ地域博物館」基本計画に関する調査・研究 (西川 幸治)

東西文化の交流の結実として生まれたガンダーラの仏教遺跡は、いま東西の人々の強い関心がマイナスに作用し、乱掘によって遺跡が破壊され、遺構と遺物が遊離する結果を招いている。現状が放置されるならば、ガンダーラの仏教遺跡は十分に調査されることなく消失する危険にさらされている。

当研究はガンダーラ仏教遺跡の救済と保存のため、ガンダーラ地域全体を博物館地域として保存と開発を図り、その中心的施設としてシャールバズガリに地域博物館を建設するための基本計画の調査研究を目指している。

45. 西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 (E. フローレス)

アジアの太平洋西岸地域では様々な沿岸漁業が行われているが、互いに共通のものも多く見いだされる。

当研究では、フィリピンからインドネシアまでを南北に8分割した調査地点を設け、これらについて沿岸漁業、特に漁船漁具について詳しく調査する。また、その船型(船体線図)、構造(船体・漁具)、操業方法について正確に記録する。そしてこれらの資料を漁業的要因により分析する。なお、本調査地点はおおむね水産高校所在地付近に設定されており、調査直前にこれらの教官に調査方法について研修を行い、研究協力者になってもらう。

46. タイ国における企業内民主主義に関する意識と実態 (ピシュツ M.)

発展途上国において共通の課題となっているのは、自国産業の工業化を通しての経済発展であるが、多くの場合、それは外資の導入という形で他国の社会制度・技術等とともに導入することになる。このような過程では、政府や企業家の役割に加えて労働者の積極的参加が必要となり、またそれを可能にする環境が必要である。この一つの有効な手段が企業内民主主義の考え方であろう。

当研究は、このような視点に立ち、タイ企業における企業内民主主義の実態や将来性を、法制度・労働者の意識・企業経営の側面から研究しようとするものである。

47. 国際プロジェクトチームによる日本美術史研究のための基礎資料整備計画 (佐々木 丞平)

日本美術史研究は今日、可能な限りの資料を収集し、国際的・総合的な立場から研究を進めることが必要となっている。しかし、現在実物が所在不明の作品も数多く、これらは「入札目録」によってしか確認できない。

当研究は、英・米・独・日、11名の研究者による国際プロジェクトチームを組んで、各地に散在している「入札目録」の写真を複写収集し、和・英両文で索引を完備するものである。これが完成することにより、現代の学問研究の方法に対応でき、密度の高い研究が可能となる。

48. 近世・近代日本のセクシュアリティの歴史——性の言説の成立とその象徴論的分析—— (酒井 直樹)

セクシュアリティの研究は、正統なアカデミズムの研究からは排除されてきたが、今日、社会と身体の結節点であるセクシュアリティの構成という観点から日本の近代を問い返してみることは、従来の近代化論の盲点を補うとともに、日本文化の研究に重要な視座を導入するものと考えられる。

当研究は、このような観点から、近世史・人類学・社会学の学際的な協同により、江戸期から近代以降にわたる性の言説を扱い、セクシュアリティをめぐる広義のテキストの成立と変容を明らかにしようとするものである。

I-3. 第Ⅲ種研究(総合研究)

助成対象一覧

助成番号 { 上の*印は国際共同研究を示す。
下の継2, 継3はそれぞれ継続2年目, 3年目を示す。
助成金額上の()は助成期間を示す。無記入は1年間。

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
49 85-Ⅲ-001 [*] (継2)	遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構の研究 直良 博人 オーストラリア国立大学生物科学研究所 教授 57歳 ほか3名	(2カ年) 7,000,000
50 85-Ⅲ-003 (継2)	ダウン症幼児の早期療育プログラムについての臨床的研究 西村 辨作 愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所 主任研究員 39歳 ほか4名	3,200,000
51 85-Ⅲ-009 (継2)	先天異常の総合的医療支援システムの作成と運用に関する研究 ——遺伝相談ネットワークシステムの実践的検討—— 和田 義郎 名古屋市立大学医学部 教授 48歳 ほか8名	(2カ年) 4,800,000
52 85-Ⅲ-013 [*] (継2)	脊髄麻痺者に対する機能的電気刺激の実用化研究 川村 次郎 機能的電気刺激研究会 代表 51歳 ほか9名	(2カ年) 10,000,000
53 85-Ⅲ-014 [*] (継2)	日本文化と日本人の形成 ——「型」の問題を中心として—— 源 了圓 国際基督教大学 教授 65歳 ほか9名	(2カ年) 4,700,000
54 85-Ⅲ-015 (継2)	航空におけるINCIDENT REPORT SYSTEMに関する総合的研究 宮城 雅子 航空法調査研究会 代表幹事 55歳 ほか10名	9,600,000
55 85-Ⅲ-016 (継2)	日本語対応「手話辞典」編纂作成のための総合研究 田上 隆司 手話コミュニケーション研究会 代表 57歳 ほか16名	(2カ年) 5,000,000
56 85-Ⅲ-019 [*] (継2)	職場集団における文化摩擦と葛藤 ——便宜置籍船乗組員に関する研究—— 大橋 信夫 労働の国際化問題研究会 代表 47歳 ほか8名	(2カ年) 15,000,000
57 85-Ⅲ-020 [*] (継2)	女性雑誌の日・墨・米比較研究 井上 輝子 女性雑誌研究会 代表 43歳 ほか10名	(2カ年) 6,600,000
58 85-Ⅲ-024 (継2)	山地生活者の平地への移住による生活および生活文化の変容に関する追跡研究 ——映像手段の活用を中心として—— 姫田 忠義 民族文化映像研究所 所長 57歳 ほか14名	(2カ年) 11,000,000

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
59 85-III-026 (継2)	都市における歴史的土木遺産の評価と継承に関する研究 ——震災復興橋梁を例として—— 伊東 孝 東京の橋研究会 代表 40歳 ほかに10名	(2カ年) 5,000,000
60 85-III-028 (継2)	海洋に投棄されたごみが生物に及ぼす影響に関する研究 ——東京湾, 銚子沖を中心に—— 清水 誠 東京大学農学部 助教授 50歳 ほかに8名	(2カ年) 7,500,000
61 85-III-029 (継2)	町並み保存運動の展開と全国町並み保存連盟の役割 石川 忠臣 全国町並み保存連盟 顧問 56歳 ほかに17名	(2カ年) 4,000,000
62 85-III-030* (継3)	伝統的サゴ生産集落における経済力向上の試み ——小規模援助の適用と村の変容—— 高谷 好一 京都大学東南アジア研究センター 教授 51歳 ほかに7名	(2カ年) 3,700,000
63 85-III-034* (継2)	バングラディッシュの農村におけるプライマリーヘルスケア促進に関する研究 石川 信克 (財)結核予防会 研究嘱託 43歳 ほかに6名	(2カ年) 3,700,000
小 計	15 件	100,800,000
第I・II・III種合計	63 件	204,800,000

49. 遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構の研究

(直良 博人)

正常細胞内で低レベルで発現されている癌遺伝子は、正常細胞の機能に極めて重要な役割をもっていることが推定され、この癌遺伝子の異常な活性化が発癌の機構、ならびに癌細胞機能の保持に深く関与していることが知られている。前年度の予備的研究において、研究代表者らは、正常細胞内でみられる癌遺伝子の低レベルでの発現機構について理論的に考察し、癌遺伝子に隣接する活性化された正常遺伝子の存在を予言した。そして、その存在を実験的に証明することに成功した。

当研究は、前年度の研究を更に発展させ、正常細胞内で癌遺伝子が、他の遺伝子による領域効果によって、不活性化されている分子機構を更に詳細に研究するとともに、領域効果の除去に伴って活性化された癌遺伝子に再び領域効果を加え、癌遺伝子の不活性化を試みるものである。

50. ダウン症幼児の早期療育プログラムについての臨床的研究

(西村 辨作)

ダウン症は21番染色体の異常によって生じる発達障害であり、その出現頻度は1000出生に1人で精神遅滞の原因のなかでも大きな比率を占めている。この症候群は、特徴的な運動・認知・言語の障害をもっているが、近年、幼児期からの適切な訓練によってこの発達障害がかなり改善され得ることが指摘され始め、ダウン症幼児への早期療育の重要性が唱えられ始めている。

当研究は、ダウン症幼児における発達諸側面の進行と停滞を実証的に検討し、その障害の背景要因を見だし、ダウン症幼児の発達遅滞の特徴を踏まえた訓練プログラムを開発することを目的としている。とりわけ、第II種研究において認められた初期の感覚運動発達、中期の言語発達、後期の認知発達が停滞する要因を更に詳しく分析し、これらのダウン症児に特有な“発達の壁”を克服するスモールステップの訓練プログラムを開発することに重点をおいている。

51. 先天異常の総合的医療支援システムの作成と運用に関する研究

(和田 義郎)

近い将来の情報通信網が発展した社会環境における医療知識の高度利用を図るため、その方法を検討することは重要である。特に、豊富な知識がすでに獲得され、しかも逐次新たな知識が増している先天異常の領域において、これら知識の有効かつ効率的な利用法を確立する必要性は大きい。なぜなら、先天異常の全出生児に占める比率は数パーセントと少ないが、原因疾患は多岐多様で、これらの知識をすべて獲得することは非常に困難と考えられるからである。そこで応用人工知能の技法によりこの問題の支援を図ることは有用と考え、昨年度そのためのソフトウェア開発を行った。

今回の助成では更により実用的なシステムを目指してソフトウェアの改善を図るとともに、複数の小児病院を結ぶ通信網を構築し、実際の運用を介してシステムの実用性を高めることとしている。この成果により先天異常を有した家族に対する医療水準の向上が期待される。

52. 脊髄麻痺者に対する機能的電気刺激の実用化研究

(川村 次郎)

現在、脊髄損傷に対する根本的治療法はなく、後遺症に対して、機能訓練、装具療法、種々の機能再建手術などが行われているにすぎない。麻痺筋に電気刺激を加えて四肢の機能的運動を起こす機能的電気刺激は、従来のものより一歩進んだ治療法であり、さらにアクチュエーターとして麻痺筋を再活用でき、駆動に必要なエネルギーも非常に小さいという特徴を有している。

当研究は、体内に完全に埋め込める機能的電気刺激装置を製作し、各種の工学的・生物学的試験を行った後、脊髄麻痺のなかでも最も重症な頸髄損傷による四肢麻痺者の上肢の把持動作の回復に適用しようとするものである。本年度は埋め込み装置の1次および2次試作、装置の耐久性試験、家兎を用いる生体反応テスト、動作テストを実施する。

53. 日本文化と日本人の形成——「型」の問題を中心として——
(源 了圓)

当研究の代表者は1981年度に「日本文化と日本人の形成」(予備研究)というテーマで当財団の助成を受け、その成果を『文化と人間形成』と題して出版した。同氏は、そのころから上述の問題を「型」という視点に絞って研究する必要を感じ、数編の試論を書いてきたが、今回この問題を学際的な共同研究を通じて解明していくこととした。

当研究は、日本文化と日本人の性格形成との関係を「型」の問題を通じて究明することを目的とする。今日の日本はこれまでの伝統的な型が失われ、しかも新しい状況にふさわしい型がまだ形成されていない時代であると考えられる。このような状況にかんがみ、研究代表者等は、単に芸能や武道の型にとどまらず、個人の自己形成の次元から教育や社会的次元の問題、更には文化の型の問題にまで及んで、比較文化的・比較思想的・比較社会的方法をもって日本文化の型について研究しようとしている。

54. 航空におけるINCIDENT REPORT SYSTEMに関する総合的研究
(宮城 雅子)

航空機運航における「安全確保」は潜在的危険を管理して事故を未然に防止するIRSの手法に転換する必要があるとの基本的考えから、代表者らは、昨年度日本の定期航空全6社の乗員に対し予備調査を行った。その結果、IRSの重要性と必要性を確認するとともに、その実現のための不可欠な要件が報告者側の安全に対する厳しい認識と報告を受け取る側に対する信頼にあることが明らかになった。

当研究は、第三者の公平な立場から信頼関係を更に醸成しつつ、本格的調査を行い、乗員が日常業務中に経験するincidentの具体的かつ詳細な情報を収集し、それを基礎に事故の主要要因であるhuman factorsの態様やincidentへのかかわり方、およびINCIDENTとACCIDENTとの関連の解明を試みるものである。また乗員がミスに陥る背景要因を究明し、取るべき改善策を検討する。

55. 日本語対応「手話辞典」編纂作成のための総合研究
(田上 隆司)

聴力障害者のコミュニケーションの方法として手話があるが、現行の手話は、わずか2000程度の単語しかなくまた日本語との対応関係も確立していないので、内容伝達にかなり無理がある。聴力障害者の社会参加を進めるうえでも、現行手話の改善と充実が緊急の課題である。

当研究は、昨年度の予備研究を踏まえ、今後2年間で新しい手話の体系を確立しようとするものである。昨年度は、手話化すべき語彙の選択を終了し、手話の造語法について検討を行ったので、今後は造語方法を確立し、約3500の単純語と約3000の複合語の手話を作成する。これらは日本語約15000語に相当する。作成・決定された手話はビデオに録画し、後にイラスト化する。各語ごとに使用上の留意事項や文例などを付し、日本語の50音順に索引をつける。文とイラストによる辞典のほか、ビデオテープによる辞典の作成も目指している。

56. 職場集団における文化摩擦と葛藤——便宜置籍船乗組員に関する研究——
(大橋 信夫)

海外出稼ぎという形態を中心とする最近の労働力の国際化は、各国の諸産業の職場における民族的・文化的状況を著しく複雑にし、文化摩擦および葛藤を引き起こすに至っている。日本においても、すでに海運産業では期間雇用された多くのアジア船員が日本船員とともに便宜置籍船の運航に従事している。こうした労働の国際化は、近年の技術革新の進展、労働観の変化、人口構造の変容、難民の受入れなど内外の諸要因によって国内の様々の職場にも今後及ぶものと考えられる。

当研究は、学際的・国際共同研究体制により、便宜置籍船乗組員を対象とし、乗船による参与観察・面接・質問紙調査等を実施して、文化摩擦および葛藤の実態を明らかにし、異文化をもつ職場集団の成員が、それぞれの固有の文化の差異を理解し、その差異を認めたとうえで、混じり合い、共存し、しかも集団としての機能を遂行してゆける条件を見いだそうとするものである。

57. 女性雑誌の日・墨・米比較研究

(井上 輝子)

女性雑誌は、現代女性文化の動向を最も敏感に反映するメディアである。最近の女性雑誌界は、①消費社会化に伴う誌面の広告化、②性役割の流動化による記事内容の変化、③欧米白人女性文化の影響、を特徴としている。この特徴は、日本のみならず、欧米諸国、非欧米諸国のいずれにもみられる。

当研究は、世界の女性雑誌文化の震源地アメリカ、その直接的支配下にあるメキシコ、同じく欧米女性文化の影響を受けつつそれらとは微妙に異なる日本の各女性雑誌を、同じ方法・尺度で比較分析し、女性雑誌の世界的画一化動向の実態を把握するとともに、三国の文化的伝統の違いを探ることを目的とする。1983年度助成の予備研究を基に、今回は、通年の誌面構成分析、美容・ファッション・料理・人生ページの詳しい内容分析、「コスモポリタン」誌の各国比較などを、数量的方法も含めて実証的に行う。

58. 山地生活者の平地への移住による生活および生活文化の変容に関する追跡研究

(姫田 忠義)

戦前戦後を通じておびただしい数のダムが日本につくられ、そのために多くの山村の人々が住み慣れたふるさとを離れた。しかし、その人々の移住後の生活や生活文化の変容の記録や研究はほとんどない。移住後の変容を把握するには、その前提である移住前の状態が当然把握されていなければならない。

当研究は、新潟県北部の朝日山地にある山村（朝日村奥三面・42戸）の人々を対象者として1980年から5年間にわたってその生活と生活文化を記録研究してきた代表者らが、ダム水没のための平地移住（1985年11月完了）後の2年間、その変容を観察・記録しようとするものである。奥三面は、はるかな縄文遺跡や平家落人伝説を伝えた歴史の古い山村である。また広大な山地自然と見事に対応したその生活や生活文化は、日本の基層文化の典型である。それが平地移住後どう変容していくか、日本人の生活史変遷を知るうえでも貴重な記録となる。

59. 都市における歴史的土木遺産の評価と継承に関する研究——震災復興橋梁を例として——

(伊東 孝)

予備的研究「東京における震災復興橋梁の土木史的研究」では、これらの橋梁が一定の配置計画に従い地域環境デザインを踏まえて設計されたことを、ある程度明らかにした。しかしながら築後60年近く経た今日、このうち何橋かはすでに架け替えられ、今後架け替えられる橋も多い。

当研究は、今後の都市づくりのなかでの精神的・環境的価値への配慮の重要性にかんがみ、これらの土木遺産を評価し継承する手法を開発するため、震災復興橋梁を例として、その歴史的な位置づけを明らかにし、今日における意義や保存のあり方に検討を加えるものである。内容的には、江戸の街を近代都市東京につくり替える過程のなかで震災復興橋梁をとらえ、土木遺産の歴史的な評価を行うときに必要な設計図等基礎資料の保存活用に関する検討を行い、震災復興橋梁の評価と継承に関する個別研究を行う。

60. 海洋に投棄されたごみが生物に及ぼす影響に関する研究——東京湾、銚子沖を中心に——

(清水 誠)

海洋に投棄される様々な物質のなかで、重金属やPCBのような化学物質の影響については数多くの研究が行われてきたが、空かん、ビニール製品等の分解されにくい固体廃棄物の生物に与える影響についてはほとんど研究されていない。昨年度は、港湾・航路としても有数でまた本来漁場価値の高い東京湾と銚子沖合水域を対象として、難分解性のごみの堆積の現状を知り、これが生物の分布や漁獲に与える影響についての予備的な研究に着手した。その結果、様々な事実が明らかとなる一方、多くの問題も生じてきた。

本年度は、このような問題点を踏まえ、昨年度同様東京湾と銚子沖を中心として、ごみの種類とその量の推定、生物、特に底層性生物の分布特性、消化管内容物の分析、海中におけるごみとそれに対する生物の挙動観察により、ごみが生物に及ぼす影響を、海に関係する市民と研究者の協力により明らかにする。

61. 町並み保存運動の展開と全国町並み保存連盟の役割
(石川 忠臣)

近年、まちづくりや地域のよりよい景観を形成してゆこうという動きが官民ともに盛んになりつつある。こうした運動・事業の根底には、個性ある都市を守り育ててゆきたいという幅広い層の願いが存在していると考えられ、地域の歴史的環境・町並みの存在はその有力な手掛かりと見なすことができる。

当研究は、よりよい地域社会づくりの一環として町並み保存運動を取り上げ、その将来像を、運動を推進する側に立って主体的かつ動的にとらえることを第1の目的としている。また、各地域の町並み保存運動を進めるための全国的な視野を有する運動理論・実践方針を確立するために、運動体の連合組織である全国町並み保存連盟は今後どのような役割を果たしてゆかなければならないかを、各地の固有な運動の展開との関連のなかで明らかにしてゆくことが第2の目的である。

63. バングラディッシュの農村におけるプライマリーヘルスケア促進に関する研究
(石川 信克)

研究代表者らは、この数年間バングラディッシュ（以下バ国）での結核対策活動に協力してきたが、その間、このような国々では保健問題の多くが単なる人的・物的資源の欠乏ではなく、広く社会の下部構造に根ざしており、この認識に基礎をおいたプライマリーヘルスケア（PHC）こそが問題の真の解決方法であることを痛感してきた。

この観点から、研究者らは結核対策を長期の標的として位置づけつつ、バ国の農村にヘルスポランティアの育成を中心とした組織的なPHCの導入を目指している。この際、地域や住民に対するより有効なアプローチと、その阻害要因はなんなのかを、バ国という現実の条件下で体系的に、社会学的方法を用いて明らかにすることが本研究の目的である。この点に関してより普遍性のある結論が得られれば、今後の発展途上国の保健対策やそのための国際協力のあり方にとっても重要な指針となると思われる。

62. 伝統的サゴ生産集落における経済力向上の試み

——小規模援助の適用と村の変容—— (高谷 好一)

東南アジアの多雨林にはサゴを主要な生産物として生活している社会がある。しかし、こうした社会は近年の農業開発に巻き込まれて存亡の危機に瀕している。南スラウェシ、ルウ島のペンカジョアン村は、こうしたなかでなんとかサゴで自立し、伝統文化を保存しようと鋭意努力している村の一つである。代表者らは、このペンカジョアン村に小型ポンプを設置し、サゴ生産の能率を上げる実験を1983年より2カ年にわたって行ってきた。

当研究は、この1983年に開始した実験の延長である。小型ポンプの設置により動き出した村に、いままの援助を行い、村の離陸を決定的なものとし、その変化の過程を記録にとどめることが目的である。また、実験をより実りのあるものにするため、当研究には同時に、第三者による評価作業をも組み入れている。

I-4. 特定課題(新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成)

助成対象一覧

助成番号	研究題目 代表研究者	助成金額 (円)
64 85-K-001	日本環境プランナーズ会議 (NEPA) の活動に関する記録の作成 ——アドボケイト・プランニングに関して—— 青山 貞一 日本環境プランナーズ会議 代表幹事 38歳 ほかに12名	1,800,000
65 85-K-011	天神崎保全市民協議会の活動に関する記録の作成 米本 憲市 天神崎保全市民協議会 理事 28歳 ほかに7名	1,800,000
66 85-K-014	働く母の会の活動に関する記録の作成 広田 寿子 働く母の会 会員 64歳 ほかに7名	1,600,000
67 85-K-016	福島智君とともに歩む会の活動に関する記録の作成 小島 純郎 福島智君とともに歩む会 代表 57歳 ほかに6名	2,000,000
68 85-K-029	老人給食協力会「ふきのとう」の活動に関する記録の作成 平野 真佐子 老人給食協力会「ふきのとう」 代表 44歳 ほかに9名	1,900,000
69 85-K-030	難民を助ける会の活動に関する記録の作成 ——教育援助活動を中心とする日本定住難民への支援に関して—— 吹浦 忠正 難民を助ける会 代表幹事 44歳 ほかに9名	1,800,000
70 85-K-033	ふきのとう文庫の活動に関する記録の作成 小林 静江 働くふきのとう文庫 理事長 60歳 ほかに7名	1,700,000
71 85-K-035	^(注) 海外市民活動情報センターの活動に関する記録の作成 野村 かつ子 海外市民活動情報センター 代表 74歳 ほかに13名	1,900,000
72 85-K-037	北九州YMCAグループワーク研究会「のびのびキャンプ実行委員会」の活動に関する 記録の作成——障害児と非障害児のインテグレーション・キャンプに関して—— 山岡 浩一 北九州YWCAグループワーク研究会「のびのびキャンプ実行委員会」 委員長 59歳 ほかに8名	1,600,000
73 85-K-045	関西分譲共同住宅管理組合協議会の活動に関する記録の作成 杉原 貞男 関西分譲共同住宅管理組合協議会 世話人代表 64歳 ほかに14名	1,900,000
74 85-K-046	大野の水を考える会の活動に関する記録の作成 安土 義雄 大野の水を考える会 会長 72歳 ほかに11名	1,800,000
特定課題・合計	11 件	19,800,000

(注) 本件は助成決定後、グループの都合により助成辞退となった。

記録の概要

64. 日本環境プランナーズ会議 (NEPA) の活動に関する記録の作成 (青山 貞一)

日本環境プランナーズ会議 (NEPA) は、組織の設立以前からアメリカにおけるアドボケイトプランニングに学び、専門家の立場から地域住民と協力して、まちづくりや環境保全のための活動を推進してきた。

当記録は、アドボケイトプランニングの理念と方法を整理するとともに、これまで東京中心に各地域でNEPAのメンバーが支援してきた具体的な活動を取りまとめ、わが国におけるアドボケイトプランナーの役割を広く一般に周知し、今後の支援活動の一助とすることを目的としている。

65. 天神崎保全市民協議会の活動に関する記録の作成 (米本 憲市)

天神崎保全市民協議会の主たる活動は、①全国からの募金により、開発の対象となった貴重な自然を買い取ること、②買い取った自然を子供たちの教育のために利用すること、の二つである。

当記録は、天神崎保全市民協議会の12年にわたる活動の記録である。子供たちの宝である天神崎を守るために買い取りのための募金を決意したこの運動の発端から、全国の人々の温かい支援によって土地買い取りの資金が目標額に達するまでの全過程を通史とし、各活動を部門史として、作成する予定である。

66. 働く母の会の活動に関する記録の作成

(広田 寿子)

終戦後の激動する社会のなかで、家事と育児とに責任をもつ妻や母が外で働くことは並大抵のことではなく、当時の社会通念に抵抗しつつ、働くための条件をまず自分たちの手でつくり出さねばならなかった。こうした戦後の社会を築きつつ、新しい生き方の道作りをした女性たちの集まりが「働く母の会」である。

当記録は、彼女たちが働くためにまず最初に試みた保育所づくり運動を核としながら、日本の女性にとって史上初めての経験を常に先頭に立って切り開いてきた30年間の活動の歴史について、記述することになっている。

67. 福島智君とともに歩む会の活動に関する記録の作成 (小島 純郎)

「福島智君とともに歩む会」は、全盲ろうの大学生福島智君 (東京都立大学3年生) の学習と日常生活を支えることを目的として活動している。福島智君はわが国における初めての盲ろう大学生であり、当会は福島君の支援を通じてわが国における盲ろう二重障害者の高等教育の可能性を探究し実践している。

当記録は、福島君独特のコミュニケーション手段である「指点字」を中心に、盲ろう者に対する介助のあり方や、コンピュータによる「点字電話」の開発の試みを紹介し、後進の参考に資することを目的としている。

68. 老人給食協力会「ふきのとう」の活動に関する記録の作成 (平野 真佐子)

当会では、ボランティアの手作りによる老人給食サービスを定期的に行っている。会食形式を主としているが、外出困難な老人には、宅食の制度もある。このほか、年間行事として各種のイベントを実施するかたわら、ボランティアの資質向上のための試みも行っている。

当記録は、あしかけ4年にわたるふきのとうの実践活動を系統的にまとめ、今後の活動の指針とする。同時に他の老人給食サービス団体や外国の活動例と比較しながら、日本での老人給食サービスのあり方をも問おうとするものである。

69. 難民を助ける会の活動に関する記録の作成

(吹浦 忠正)

難民を助ける会は1979年11月、難民救援のみを目的とした団体としてはわが国で初めての組織として誕生し、以後6年にわたり、国内外において様々な難民の支援活動に従事してきた。なかでも特に重点をおいてきたのが、日本に定住するインドシナ難民への進学・就学の世話である。

当記録はそうした活動の概要と、難民各自が就学のために抱える様々な問題について調査・記録しようとするものである。

70. ふきのとう文庫の活動に関する記録の作成

(小林 静江)

当文庫の主な活動は、①病院小児病棟や施設への子供図書室ふきのとう文庫の設置と本の貸出し、②知恵遅れの子供のための「布の本」および、弱視児のための「拡大字本」の製作と貸出し、などである。活動の本拠地である「ふきのとう子ども図書館」は障害をもつ子供とまたない子供のふれあいの場にもなっている。

当記録は、「すべての子どもに本のよろこびを！」をスローガンに努力しているふきのとう文庫の20年来の活動の流れを、出発当初から整理し、まとめようとするものである。

71. 海外市民活動情報センターの活動に関する記録の作成

(野村 かつ子)

(本件は、助成決定後、グループの都合により助成辞退のため概要を省略)

72. 北九州YMCAグループワーク研究会「のびのびキャンプ実行委員会」の活動に関する記録の作成

(山岡 浩一)

「のびのびキャンプ実行委員会」は、障害児と非障害者がともに生きる社会づくり（社会のノーマライゼーション）を目指し、そのための試みとして、1976年より10年間継続している障害児と非障害児のインテグレーションキャンプ（のびのびキャンプ）の実行責任母体としての役割を果たしてきた。

当記録は、ほかでもこの種のキャンプの実行が可能となるような手引書の記録を目指すものであり、インテグレーションキャンプの意義・目的、キャンプの実際、障害の種類と理解、安全対策、指導者養成等を含んでいる。

73. 関西分譲共同住宅管理組合協議会の活動に関する記録の作成

(杉原 貞男)

分譲マンションでは、居住者が自分たちで組合をつくり管理をしていかなければならない。ところが住宅管理については素人であるため、不明な点が多い。そこで管理組合の成功や失敗の経験を学び合うことが必要になり、経験交流団体として「関西分譲共同住宅管理組合協議会」が1981年に結成された。

当記録は、同協議会が行ってきた20回を越える経験交流会の報告と討論、学習会や相談会の内容、典型的組合活動事例、組合の実態調査結果等を収録し、マンション管理に直接役立つことを目指している。

74. 大野の水を考える会の活動に関する記録の作成

(安土 義雄)

福井県大野市は、古くから地下水の豊富な土地として知られてきたが、近年に至り地下水位は著しく低下し、特に冬期の井戸枯れによって市民の飲用・家事用水まで事欠く事態が生じてきた。この事態を重視した一主婦を中心に起こったのが「大野の水を考える会」の活動である。

当記録は、同会の活動が市民に節水を呼び掛けるだけでなく地下水規制の市条例制定までに発展し、さらに現在、水を中心とした新しいまちづくりにまで展開しつつあるという事実を踏まえ、過去8年にわたる活動の経過を記すことを目的としている。

II. 研究コンクール

II-0. 研究コンクールの概要

研究コンクールは“身近な環境をみつめよう”のテーマにより、1年おきに公募を行っている。これは、それぞれの地域で生活する住民と専門の研究者とが一体となって、地域に密着した長期的な研究活動を行うことを目指したものである。

今年度は1983年に始まった第3回の継続事業と、本年度に始まった第4回の事業が実施されたが、それぞれの事業は次のような段階により進められている。なお、第4回では賞の名称等について前回のものとは若干変更した。

〈項目〉中の（ ）内は第3回の名称を示す。

〈項目〉	〈第3回〉	〈第4回〉
●研究計画の公募	1983年10月～翌年1月	1985年11月～翌年1月
●予備研究助成対象（研究奨励賞候補）の決定	1984年3月	1986年3月
●予備研究実施	1984年4月～同年9月	1986年4月～同年8月
●本研究助成対象（研究奨励賞）の決定	1984年10月	1986年10月
●本研究実施	1984年11月～86年10月	1986年11月～88年10月
●最優秀賞・優秀賞（研究奨励特別賞）の決定	1987年3月	1989年3月
●研究奨励基金、フォローアップ助成金の決定		1989年10月

本年度は、第3回研究コンクールについては、選考委員による各受賞チームの現地インタビューと、各チームが一堂に会しての中間研究報告会が行われた。

第4回研究コンクールについては、公募を行い、140件の研究計画の応募を受け付け、このうち20件を予備研究助成対象として選出し、各チームに予備研究実施のための助成金（合計1,055万円）を贈呈した。

なお、第4回の選考委員の構成は次のとおりである。

委員長：浅田 孝、委員：板倉聖宣、岡部昭彦、加藤幸子、島津康男、鈴木継美、原ひろ子、日高敏隆、本間義人

II-1. 第4回研究コンクール応募要項 (抄)

研究コンクールの主旨

私たちの日常生活は、環境との様々なかわりのなかで成り立っています。この環境という概念には、自然や、人間が造り出した物や、周囲の人間など、ありとあらゆる形あるものを含むことはもとより、制度、文化、情報、人間関係など、形のないものまで含めて考えることができでしょう。このように環境の概念を幅広くとらえると、環境を考えることは、すなわち私たちの生き方を考えることにほかならないといえます。

環境については、これまでも多くの研究者によって、それぞれの専門分野からの高度な研究が進められています。しかし、私たちの生活に密接に結びついた「身近な環境」の様々な問題は、私たち一人一人の問題として、毎日の生活のなかで考え、そして積極的に取り組んでいくべき課題なのではないでしょうか。

身近な環境のなかで、何がどう変わりつつあるのかを知り、それがなぜかを探求し、あるいは望ましい環境のあり方を問い、そのために何が必要かを実践的に試みる——トヨタ財団はこのような研究が全国で一層活発に行われることを期待して、研究コンクールを行います。

生活の場にある人々と、専門の研究者とが一体となって、毎日の暮らしのなかから身近な環境をじっとみつめ、未来の兆しを読み取り、いままで見過ごされていた問題を発見し、それに新しい方法で取り組んでいく、そのような研究の計画が全国各地から多数寄せられることを期待いたします。

こんな研究を求めています

このコンクールは上の図(略)のように、「身近な環境」を対象とする研究のアイデアに対してまず助成を行い、その助成による研究成果について賞を差し上げるものです。

<研究テーマ> (抄)

・研究テーマは、応募される方が「身近な環境」と思わ

れるものならばなんでもかまいません。毎日の暮らしのなかから、重要だけれど見過ごされている問題や、これからの課題の芽などを見つけ出してください。

・これらの環境を断片的にみつめるのではなく、様々な要素のからみ合った全体としてみつめるような研究テーマを期待します。

<研究対象区域> (略)

<研究期間> (略)

<研究費用> (略)

<研究体制> (抄)

・地域の住民を中心に、地域の生活とつながりの深い施設に勤めている人や、専門的な研究活動に従事する人が加わった形が望まれます。小・中・高校生・大学生などの参加も歓迎します。

<研究方法> (抄)

・テーマに見合った、だれでも日常生活のなかで取り組めるような独創的な方法を見つけ出してください。

・課題への取り組みを通じて、参加者が、専門的な研究方法を理解し、使いこなせるようになることも重要です。そのような学習の可能性についても配慮してください。

助成金や賞金を贈呈します

<予備研究助成金> (抄)

・研究計画に基づき選ばれた約20チームに対して、予備研究助成金50万円(上限)を贈呈します。

<本研究助成金> (抄)

予備研究の成果に基づく本研究の実施計画書などを基に選考を行い、約10チームに対して、本研究助成金400万円(上限)を贈呈します。

<賞および賞金> (抄)

・2か年にわたる本研究の成果を基に選考が行われ、最優秀賞1件、優秀賞数件が選出されます。

・最優秀賞には、賞牌ならびに賞金100万円、優秀賞にはそれぞれ賞牌ならびに賞金50万円を贈呈します。

〈研究奨励金，フォローアップ助成金〉（抄）

・賞を受賞したチームのなかから，特に今後の活動の展開が期待されるチームには，その活動のための研究奨励基金またはフォローアップ助成金を贈呈します。助成金額は最高で1件2,000万円を予定しています。

このように選考します（略）

助成金費目一覧（略）

応募方法（略）

その他のご案内（略）

選考委員名簿（略，54ページ参照）——以上——

II-2. 第4回研究コンクール予備研究助成対象

助成対象一覧

コード番号	研究題目 応募団体名 (代表者・氏名)	対 象 都道府県 人 数	助成金額 (円)
1 4C-008	名古屋市東部とその周辺のため池の現状調査と都市環境に果す 役割および自然教育の場としての活用についての研究 名古屋ため池の自然研究会 (浜島 繁隆)	愛 知 8ほか	500,000
2 4C-018	北条市水道水源の水質保全の研究 (ごみ焼却場建設に関連して) 北条市の飲み水を守る会 (坂本 信子)	愛 媛 24ほか	550,000
3 4C-021	植物の宝庫といわれる屋久島において人は植物たちとどのようにつきあってきたか おいわあねっか屋久島 (真辺 末彦)	鹿児島 10	600,000
4 4C-027	クリエイト生きがい——世田谷区のある高齢者グループの模索—— 世田谷区老人大学生活コース8期生グループ (安食 義典)	東 京 29	500,000
5 4C-034	オホーツク海沿岸の流氷と人間生活のかかわりに関する研究 オホーツク流氷研究会 (山原 良一)	北海道 14ほか	600,000
6 4C-037	上野・谷中・根津・千駄木の「親しまれる環境」の調査研究 江戸のある町上野・谷根千研究会 (浦井 正明)	東 京 12	500,000
7 4C-052	神田のサウンドスケープ——その歴史と現状—— 神田サウンドスケープ研究会 (鳥越 けい子)	東 京 14	500,000
8 4C-060	情報化社会の中に生きつづける「文庫」の研究——地域・家庭文庫やおもちゃ 図書館を通して見た、母親と子供の生活環境の研究—— 倉吉・文庫のあるべき姿研究会 (生田 昭夫)	鳥 取 12	550,000
9 4C-063	都市化の中で谷戸の自然環境を考える ——茅ヶ崎市・天神原谷戸の生物相の研究—— 茅ヶ崎自然に親しむ会 (平石 広)	神奈川 12ほか	500,000
10 4C-066	礼文島における自然保護及び島民のための環境教育カリキュラム 礼文島自然保護研究会 (谷口 弘一)	北海道 23	550,000

コード番号	研究題目 応募団体名 (代表者・氏名)	対 象 都道府県 人 数	助成金額 (円)
11 4C-073	緑の鉄道構想——野生動物を身近に取り戻すために—— 緑の鉄道研究会 (大島 久明)	東 京 15ほか	500,000
12 4C-089	甲府と世界とのつながりを明らかにする 「甲府と世界」プロジェクトチーム (大沢 英二)	山 梨 16	500,000
13 4C-094	「神奈川にふたたびメダカを」神奈川におけるメダカの生息調査と メダカ放流をめざして 神奈川メダカの会 (綿貫 知彦)	神奈川 10ほか	500,000
14 4C-098	「福祉のまち稲荷山」のコミュニティー ——障害者が気がねなく自由に動けるまちな環境の研究—— コミュニティー生態学研究会 (堀内 美貞)	長 野 6	500,000
15 4C-102	住環境としての炭住街が夕張の精神的風土をどう育んだか ——再生に向かういま、改めて問い直す炭鉱の心と暮らし—— 夕張学研究会 (太田 泉)	北海道 17	550,000
16 4C-104	浜名湖における水中環境変化と生物の生態に関する研究 ダイビングチーム・シーフロッグス (大高 淳)	静 岡 14	500,000
17 4C-112	石垣島アンパルの野鳥たち 石垣島アンパル野鳥研究会 (本成 尚)	沖 縄 29	650,000
18 4C-121	よみがえれ新浜——水質浄化と水鳥の誘致—— 行徳野鳥観察舎の友の会 (東 良一)	千 葉 19	500,000
19 4C-139	重度身体障害者の『食環境』に関する研究 ——京都市における調査を中核にして—— しりたいクラブ (谷口 明広)	京 都 13	500,000
20 4C-140	都市環境としての酪農・農村集落存続の試み ——多摩ニュータウン19住区及び隣接地に於る都市と農村の共存を目指して—— 八王子市寺沢地区・酪農ヴィレッジ(村)研究会 (鈴木 昇)	東 京 28	500,000
合 計	20 件		10,550,000

当初予備研究助成金は各チーム当たり50万円を上限とし、全体で1000万円を予定していたが、東京で行われる説明会や研究報告会への参加旅費がチームごとにより異なるため、遠方のチームには旅費の一部を追加した。

III. 国際助成

III-0. 国際助成の概要

国際助成の対象地域は当面の間、東南アジア諸国に焦点を絞っており、関心分野は、過去9年間に行った国際助成の経験から、1985年現在、次の二つの分野に重点をおいている。

1. 各地域の固有文化(indigenous culture)の保存と振興を目指すもの。
2. 健やかで自立した青少年の育成を目指すもの。

また、助成対象の選考に当たっては、以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

1. 現地の人々の発想になり、現地の人々によって行われるプロジェクトである。
2. 政府や国際機関のプロジェクトであるよりも、大学や民間(非営利)のプロジェクトである。特に地方の大学における自主的なプロジェクトである。
3. 研究のための研究ではなく、具体的な成果が期待でき、社会的なインパクトの大きいプロジェクトである。
4. 学問分野を越えて、できるだけ一般の人々にもかかわりをもつようなプロジェクトである。

国際助成への応募方法を簡単にまとめると次のとおりである。東南アジア諸国の人々が助成を希望する場合は、助成を希望するプロジェクトについて簡単な概要を書いて、当財団の国際助成部門あてに直接送っていただきたい(当財団の事務所は東京にあるのみで海外にはない。)原則として以下のみには助成を行わない。基金の拠出、建設費、装置購入、博物館用収集品の購入、図書館用蔵書の購入、機関助成、既に充足しているプログラムの年間経費、政治活動、宗教活動、等。また、研究のための研究(例えば過去の実績の積み重ねがなく、当該分野における社会的インパクトも予想されないような研究)への助成、プロジェクト・リーダーおよび研究者への給料の助成は原則として行わない。申請は1年中受け付けるが、申請プロジェクトの具体性およびプロジェクトについての情報の多寡によって、審査に要する時間が異なる。通常、審査に要する期間は6カ月から1年である。ほとんどの申請プロジェクトについて、審査前および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問し調査を行う。継続プロジェクトであっても毎年申請が必要である。助成決定は10月の理事会で行われる。

III-1. 国際助成

助成対象一覧

注 (継 2) : 継 続 2 年 目
(継 3) : 継 続 3 年 目
(継 4) : 継 続 4 年 目
(継 5) : 継 続 5 年 目

	プロジェクト題名 代表者	助成金額 (円)
1 (継2)	パンニヤサ・ジャータカの北タイ版の研究 ピチット A. チェンマイ大学 (タイ)	1,800,000
2 (継5)	タイにおける伝統建築研究の成果出版：『東南アジア建築の歴史：6～13世紀タイにおける発展』 アヌウィット C. シンラパコン大学 (タイ)	350,000
3 (継2)	イロイロの史跡と歴史的建物の記録と研究 H. F. フンテッチャ フィリピン大学ヴィサヤ分校 (フィリピン)	1,020,000
4	マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版 M. D. コロネル ミンダナオ州立大学 (フィリピン)	2,070,000
5	異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ H. K. グロリア アテネオ・デ・ダバオ大学 (フィリピン)	2,680,000
6	マレーシアのジョゲット・ガムランの舞踊と音楽 アフマッド O. 国立文化センター (マレーシア)	1,270,000
7	18世紀中期のスリランカータイ宗教関係 G. D. ウィジャヤワルダナ コロンボ大学 (スリランカ)	1,820,000
8 (継2)	バタラ・ゴワ：マカッサル地域の社会運動におけるメシアニズム ムフリス ハサヌディン大学 (インドネシア)	1,200,000
9	フィリピンのマドラサ学校 M. ボランシン ミンダナオ州立大学分校イリガン工科大学 (フィリピン)	4,240,000
10 (継3)	東北タイの古文書調査 ユボン D. マハーサラカム教育大学 (タイ)	6,400,000

	プロジェクト題名 代表者		助成金額 (円)
11	タイ社会学・人類学セミナー：現状と方向 シャラチャイ R.	チェンマイ大学 (タイ)	1,330,000
12	北タイの文化に関する民族学・歴史学研究：儀礼と信仰のインヴェントリー作成 アナン G.	チェンマイ大学 (タイ)	2,480,000
13 (継3)	タイの古代集落のデータベース：古代集落情報センターの設立準備 ティワ S.	チュラロンコン大学 (タイ)	13,470,000
14	古典ネワール語辞書編纂 P. B. カンサカール	ネワール語辞書委員会 (ネパール)	2,730,000
15	ランナタイ研究情報プロジェクト チャヤン V.	チェンマイ大学 (タイ)	4,480,000
16 (継2)	ネパール古文書の複製・翻字・解説の刊行 K. P. マツラ	トリブヴァン大学 (ネパール)	3,010,000
17	ダティ：慣習法に基づくアンボン社会の社会経済制度 アブドゥール R. H.	パティムラ大学 (インドネシア)	780,000
18 (継2)	ネパール諸語古文書の保存と記録 S. L. シュレスト	チュワサ・パサ (ネパール)	11,280,000
19	バリの歴史関係具葉文献のインヴェントリー A. A. G. P. アグン	ウダヤナ大学 (インドネシア)	1,300,000
20 (継3)	ナコンシータマラート地域の古文書の調査と研究 ウィッチェン N. N.	ナコンシータマラート教育大学 (タイ)	2,800,000
21	バンジャル地域の私立イスラム教育機関の研究 アナリアンシャ	アンタサリ国立イスラム高等学院 (インドネシア)	3,320,000
22	トラジャのトンコナン：その歴史と機能 P. P. タンディランギ	郷土史家 (インドネシア)	1,280,000

	プロジェクト題名 代表者		助成金額 (円)
23	北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容 ダヤン D.	ジャクアラ大学 (インドネシア)	2,340,000
24	アチェ起源のマレー古文書のインヴェントリー ザカリア A.	国立アチェ博物館 (インドネシア)	1,220,000
25	複合社会における社会的統合を促進する教育・社会施設の空間的配置：メダン市の研究 ウスマン P.	メダン教育大学 (インドネシア)	3,150,000
26	ブギス・マカッサル文字のタイプライターの製作と寄贈 サラフディン	南スラウェシ州庁 (インドネシア)	2,090,000
27	ミナンカバウ語に特有の語彙、連語、表現の研究 ハイディル A.	ミナンカバウ文化研究財団 (インドネシア)	1,540,000
28	ネパール文化百科事典 K. K. B. シャー	トリブヴァン大学 (ネパール)	7,490,000
29 (継4)	東北タイの寺院壁画の調査と写真による記録 パイロート S.	コーンケン大学 (タイ)	4,010,000
30 (継2)	東北タイの碑文：碑文学、歴史学研究 タワット P.	ラームカムヘーン大学 (タイ)	1,450,000
31	ペガンボン：ラナオの複数のサルタン制度の歴史的研究 M. R. タワゴン	ミンダナオ州立大学 (フィリピン)	1,310,000
32	チナカラマリニの美術索引 ピリヤ K.	タマサート大学 (タイ)	1,100,000
33	ワライの伝承：レイテ地域の地方史と社会変化 J. B. ポロ	文化人類学者 (フィリピン)	1,440,000
34	西スマトラの歴史：1908年の租税反乱 ルスリ A.	郷土史家 (インドネシア)	1,840,000

	プロジェクト題名 代表者		助成金額 (円)
35	カトマンズ盆地の美術品の写真インヴェントリー L. S. バンデル	ネパール王立アカデミー (ネパール)	1,400,000
36 (継2)	貝葉文献に基づく北部タイ古語辞書編纂 アルンラット W.	チェンマイ教育大学 (タイ)	1,000,000
37	1901年より1972年までの北部フィリピン、パンガシナン州の地方史 R. M. コルテス	フィリピン大学 (フィリピン)	1,880,000
38	東南アジアのイスラム タウフィク A.	国立文化研究所 (インドネシア)	2,420,000
39	東北タイ南部の古代集落研究に関するワークショップ パイトゥーン C.	ブリラム教育大学 (タイ)	440,000
40	北タイの古代集落研究に関するワークショップ モンコーン T.	チェンマイ教育大学 (タイ)	440,000
41	東北タイ北部の古代集落研究に関するワークショップ スントン K.	サコンナコン教育大学 (タイ)	440,000
42	フィリピン演劇の歴史とアンソロジー N. G. ティオンソン	フィリピン大学 (フィリピン)	990,000
43	ネグロス：1850年より1985年までの社会・文化・経済史 V. L. ゴンザガ	ラ・サル大学 (フィリピン)	2,360,000
44	ランナタイとシブソンパンナ：文化関係の研究、連続性と変化 M. R. ルチャヤ A.	チェンマイ大学 (タイ)	2,280,000
45	モルディヴのディヴェヒ語の歴史・方言学的研究 S. ウィジェスンドラ	コロombo大学 (スリランカ)	4,080,000
46	フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査 M. B. D. アランパイ	デ・ラ・サル大学 (フィリピン)	2,050,000

	プロジェクト題名 代表者		助成金額 (円)
47	フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成 R. A. コンセプション	国立公文書館 (フィリピン)	810,000
48 (継4)	『社会科学ジャーナル』の発行 S. フセイン A.	マレーシア社会科学会 (マレーシア)	2,810,000
49	『チャム彫刻』の編集と出版 P. フウ	社会科学出版局 (ヴェトナム)	1,380,000
50	『ドンソン銅鼓』の編集と出版 P. H. トン	考古学研究所 (ヴェトナム)	1,380,000
51	『ビルマのデザイン』の編集と出版 チャーク S.	シンラパコン大学 (タイ)	750,000
	合 計	51 件	127,000,000

助成対象概要

1. パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究

(ピチット A.)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。ジャータカ物語は、釈迦が悟りを開くまでに輪廻転生を重ねた前世を描いた仏教説話である。仏教が様々な地域に広まるにつれて、各地方の風俗・習慣を取り入れたその地方独特の地方版ジャータカ物語が生まれた。15～16世紀に北タイの僧によって書かれたとされるパンニャサ・ジャータカはこのような地方版の一つで、同ジャータカは北タイ王国だけでなくビルマや中央タイの諸王国などにも受け入れられ広く東南アジアの仏教国に定着していった。

本プロジェクトは、パンニャサ・ジャータカの発祥地である北タイ版の定本を、多数の貝葉文献を資料として作ろうというものである。第1年度には、北タイ各地に散在するパンニャサ・ジャータカの貝葉異本や研究書等の収集を行った。第2年度には、これらの資料を基にパンニャサ・ジャータカの北タイ版定本作りを行う。

2. タイにおける伝統建築研究の成果出版：『東南アジア建築の歴史：6～13世紀タイにおける発展』

(アヌウィット C.)

本プロジェクトは、1980、81、82年度に助成したプロジェクト「東南アジア伝統建築の歴史—6世紀から13世紀のタイにおける建築の発展」の成果出版を目的としたものである。研究成果のうち、研究を進めるなかで非常に重要であることが明らかになった特殊テーマに関しては、『タイにおけるクメール石棺の型』の編集、出版費用が1984年度の助成対象となった。

本プロジェクトでは、研究成果の全体をまとめた『東南アジア建築の歴史：6～13世紀のタイにおける発展』を編集・出版することを目的としている。本の内容は、6世紀から13世紀のタイにおける主要な建築および美術の派であるドヴァラヴァティ、クメール、スリヴィジャヤについて、その建築デザインの発展を詳細に叙述し、また、評価を行うものである。

3. イロイロの史跡と歴史的建物の記録と研究

(H. F. フンテッチャ)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトでは、フィリピン・パナイ島のイロイロ州において歴史的・文化的に重要な史跡と歴史的建物を記録し、研究することを目的として以下の作業を行う。①史跡・歴史的建物を捜し出し、②それらの史跡・歴史的建物が地方、地域、国の歴史および開発にどのような重要性をもつかを明らかにし、③それらについて歴史的記述を行い、写真、スライド、スケッチ、地図その他の形で記録を行う。

第1年度には、イロイロ市、市の近郊の町、イロイロ州の北部、および中央部についてフィールド調査を行った。また、マニラの国立公文書館、地方の図書館、私的コレクション等から文献を収集し、調査を行った。第2年度には、第1年度の調査を継続するとともに、フィールド調査から得られたデータと文献資料から得られたデータを照合し、報告書の形にまとめる予定である。

4. マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版

(M. D. コロネル)

フィリピン・ミンダナオ島、ラナオに住むマラナオ族はフィリピン第2のイスラム教徒のグループであり、スペイン統治時代もキリスト教化されることなくその伝統を保持してきた。このマラナオ族は、その民族の遺産ともいべき叙事詩「ダランガン」を有している。

イスラムの到来とともに変形アラビア文字キリムで記録された同叙事詩はいままで詳しく研究されたことがなかったが、ミンダナオ州立大学研究センターが1977年から1981年の間に「ダランガン」の収集を行い、叙事詩の英雄バントウガンの家系図をたどることにより、叙事詩の全容が17巻から成ることを明らかにした。

本プロジェクトでは、ローマ字表記に翻字した古典マラナオ語のテキストに英訳をつけた形の「ダランガン」を年4巻の割合で出版していく予定である。

5. 異文化間交流的視点から見たダバオの3民族グループ

(H. K. グロリア)

フィリピン・ミンダナオ島東南のダバオ地域には、多数の文化共同体や民族グループが存在し、それら相互間の文化変容、文化包摂、同化等が進展している。

本プロジェクトは、現在急速に変化を遂げているこれらの文化を記録し、保存するとともに、これらの変化過程を明らかにするために、以下三つの文化グループの相互関係を研究する。①過去400年間にミンダナオに移住した最大のキリスト教徒のグループであるヴィサヤ族、②19世紀以来ダバオに住んでいる最大のイスラム教徒であるマギンダナオ族、③ダバオでは3番目に大きな非キリスト教、非イスラム教徒であるが、伝統的グループの代表と考えられているバゴボ族。

研究方法としては、民族誌、比較民俗学、社会調査を使った学際的な方法が取られる予定である。

6. マレーシアのジョゲット・ガムランの舞踊と音楽

(アフマッド O.)

ガムランの伴奏で行われるマレーシアの伝統舞踊劇であるジョゲット・ガムランは、インドネシアのリアウのマレー王朝に起源を發し、19~20世紀にかけてパハンおよびトレンガヌのサルタンの宮廷で独自の発展をみたが、1940年代の全盛をピークに、現在は消滅の危機に瀕している。本プロジェクトは、ジョゲット・ガムランに関して以下の研究を行うことを目的としている。舞踊に関しては、①使用される衣裳や小道具などを調査し記録する、②その起源と社会・文化的背景、およびマレーシアのサルタン宮廷での舞踊様式の発展過程を調べる、③個々の踊りと音楽が一つの統一された舞踊劇を構成する際の構造的研究を行う。また、ラバン撮影法を用いて舞踊を記録する。音楽に関しては、電子機器なども用いてガムラン演奏のなかで使われる音楽編曲法と調律のシステムを詳しく調査する。また、ジャワのガムランで用いる採譜法を使ってデジタル化して記録する予定である。

7. 18世紀中期のスリランカ・タイ宗教関係

(G. D. ウィジャヤワルダナ)

世界の仏教の中心地の一つであったスリランカでも、オランダ、イギリスの支配の時代には、仏教がほとんど絶滅しかかっていた。しかし18世紀中期に、スリランカからタイに派遣された使節団がタイ仏教の影響を持ち帰り、シャム・ニカヤ(タイ派)の仏教の派を創設したことが大きな要因となって仏教が再興した。

本プロジェクトは、スリランカの仏教復興の背景となった18世紀中期のスリランカとタイの宗教関係を、特に数次にわたるスリランカからタイへの使節団に焦点を当てて研究しようとするものである。従来このテーマに関する研究は、その主要な資料をシンハラ語の古文書のみにも頼っていたが、本プロジェクトでは当時スリランカを支配していたオランダの文献、スリランカにあるパーリ語文献、タイにあるパーリ語文献およびタイ語文献を用いて行う予定である。研究の成果は、英語とシンハラ語でまとめて出版する。

8. バタラ・ゴワ：マカッサル地域の社会運動におけるメシアニズム

(ムフリス)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトの対象であるインドネシアのスラウェシ島南部には、ブギス人とマカッサル人が居住し、オランダの統治下に入る前は、ボネ王国とゴワ王国という強大な海洋国家を築いていた。オランダ植民地時代、ゴワ王国を再興する英雄(バタラ・ゴワ)を名のる男が現れ、マカッサル農民の間にメシアニズム運動が起こった。本プロジェクトでは、この運動を植民地支配下の抵抗運動の観点から社会史的にとらえることを目指す。第1年度には、現在も存在するこの信者集団の調査を含むフィールド調査によるデータ収集と、ジャカルタの国立公文書館でのオランダ側の資料収集等を終え、バタラ・ゴワに関係する一連の社会運動の全体像がつかめるようになった。本年度には、同じく南スラウェシに住むブギス人の間に起こった様々の種類の社会運動を、同様の視点から調査を行う予定である。

9. フィリピンのマドラサ学校

(M. ボランシン)

14世紀にアラブの宣教師等によってフィリピンに導入されたイスラム教教育を行う学校マドラサは、今日、フィリピン全土に約2,000あるとされているが、その大半はミンダナオ島に集中しており、約100万人のイスラム教徒の子弟がアラビア語やイスラムの歴史と文明を勉強し、コーランを学んでいる。マドラサ学校は公式の教育機関として認定されていないため、そこで教育を受けた者は中等教育以上には進学できないが、依然としてイスラム教徒の親達は子供をマドラサ学校へ送り続けている。

本プロジェクトでは、フィリピンのイスラム社会・文化を理解し、またイスラム教徒の住む地域における有効な教育プログラムを開発する糸口を見いだすために、以下の研究を行う。①マドラサ学校の位置的分布、カリキュラム、教員と学生、資金等の基礎的データを収集し、ディレクトリーを作成する。②マドラサ学校の歴史的背景、変遷、社会的役割、社会文化的影響等を調査する。

10. 東北タイの古文書調査

(ユボン D.)

本プロジェクトは、1983年9月、84年10月の理事会で、それぞれ第1年度と第2年度の助成が決定したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、東北タイ地方に散在する貝葉文献、石碑に刻まれた碑文、また紙に書かれた古文書の所在とその内容を調査し、重要な古文書はマイクロフィルムに撮って保存し今後の基礎資料にしようとするものである。

本プロジェクトは、マハーサラカム教育大学文化センターが中心になって、東北タイの他の七つの教育大学が各々の地域を担当して協力して作業を進めている。第1、2年度を通し、当初の予想をはるかに上回る約15,000巻の古文書が発見された。本年度は、文書の調査を継続するほか、収集した古文書のマイクロフィルム化を開始し、また人々の意識改革をねらってキャンペーンなども企画している。

11. タイ社会学・人類学セミナー：現状と方向

(シヤラチャイ R.)

西洋の経験と思考方法に基づいた社会科学の方法論を、そのまま適用してタイの社会の研究を行うことは問題が多い。特に経済学や政治学の分野では、西洋で生まれた科学とタイの経験的世界の間の不一致は明瞭であり、これらの専門分野の有効性やタイ社会の発展における役割については多くの議論がなされている。しかし社会学、人類学の分野では、西洋的規範に基づく学問がタイ社会、文化を説明する能力をもつかどうかということは、比較的長い間、真剣に問われることがなかった。

本会議では、タイの社会学者、人類学者、また実際に農村開発に携わっている実践家も加わって、以下の点を討議する予定である。①タイ社会学、人類学の知識水準の現状の評価、②タイの社会学と人類学の二つの専門分野が、タイの社会的・文化的現実にとどのような関連性をもち、どのように適用可能であるか、③タイの社会や文化の発展に社会学や人類学が果たす役割。

12. 北タイの文化に関する民族学・歴史学研究：儀礼と信仰のインヴェントリー作成

(アナン G.)

タイ中部とは対照的に、北タイに関しては、文化の研究、特に儀礼と信仰を扱った研究は少ない。本プロジェクトでは、現在急速に失われつつある北タイの文化、特に儀礼とそれに関した信仰について以下の研究を行う。①フィールド調査、文献調査（特に貝葉文献の解説）を行って、北タイの儀礼と信仰に関する情報を収集する。②文書、スライド、カセットテープやビデオテープによる記録等を資料とした儀礼と信仰に関するインヴェントリーを作成する。③北タイ文化の全体像と習慣の多様性を理解するために、儀礼と信仰の地域性を地図で表す。④北タイの文化儀式の変化と多様性を理解するために、各地域で行われている儀礼と信仰を分析し、比較する。

本プロジェクトの特徴は、地域を狭く限定する人類学的研究とは対照的に、北タイ地域全域を研究対象とする広い視野をもつことにある。

13. タイの古代集落のデータベース：古代集落情報センターの設立準備 (ティワ S.)

本プロジェクトは、1983年9月、84年10月の理事会で、それぞれ第1年度と第2年度の助成が決定したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、1981年から3年間にわたって助成して完成した『航空写真によるタイ環濠集落遺跡のインヴェントリー』を核として、タイ全土の集落遺跡に関する情報を総合的に収集し、コンピュータ利用のデータベースを作り、古代集落に関する情報センター設立を準備するものである。遺跡の情報収集には、タイ全土36校の教育大学の研究者を中心とした遺跡の地元の人々がフィールド調査を行う予定である。

第1年度では、航空写真のデータ、フィールド調査のデータ、関連文献のデータが記載できるコンピュータ入力用の作業シートを作成した。第2年度では、インヴェントリーの利用と遺跡のデータ収集に関するセミナーを2大学で開催した。本年度は実際にコンピュータを導入し実質的な情報センターとしての機能を高める予定である。

14. 古典ネワール語辞書編纂

(P. B. カンサカール)

本プロジェクトは、1982年から3年間にわたって助成してきたプロジェクト「伝来のKoša資料からの古典ネワール語辞書編纂」の発展として行われるプロジェクトである。

カトマンズ盆地の先住民族であるネワール族は、隣国のインドと中国の影響を受けつつ独自の高度の文化を築き、ネパール史や仏教史に関する多くの古文書を残してきた。これらの古文書の解読の一助として、Košaと呼ばれる古典ネワール語とサンスクリット語、パーリ語を対照した語彙集を編集し直して、古典ネワール語小辞典を作る作業が進められてきた。本プロジェクトでは、この小辞典を核としてKoša資料以外の多くの古文書に現れる語彙をも含めた中規模の古典ネワール語辞書を編纂しようとするものである。

15. ランナタイ研究情報プロジェクト

(チャヤン V.)

ランナタイ社会はその独特な歴史的、社会・文化的活力ゆえに多くの研究者の関心を集めている。しかしランナタイ研究の問題点として、大量に収集されている文献に関する組織的な情報がない、北タイの教育機関が収集している文献の情報が定期的に外部に伝えられていない、ランナタイ研究の現状を把握し、今後の研究方針を考える評価作業が行われていない、ことなどが指摘できる。

本プロジェクトでは、こうした問題点を解決するために以下の活動を行う予定である。①研究者、司書、研究所等と密接に連絡を取り合い、ランナタイ研究に関する情報を総合的に収集する、②セミナーやワークショップを開催し、ランナタイに関する研究を刺激し、ランナタイ研究に関する情報交換を促進する、③ランナタイ研究に関する情報を文献目録、季刊誌、あるいは個人的交流を通して広める、④ランナタイ研究に関するニュースレターを発刊し、ランナタイ文化に対する理解を高める。

16. ネパール古文書の複製・翻字・解説の刊行

(K. P. マッラ)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトの目的は、ネパールに残存する貴重な古文書のなかから厳選した四つの古文書とネパール独自の文化遺産として高度に発達した細密画2種類の複写を入手し、古文書についてはそれを現代語表記に直し、英訳、注釈、解説をつけ、細密画については解説をつけ出版することである。

第1年度には、1380年の日付の法律書、および1577年の日付の仏教説話集の2点の古文書について上記の作業を行った。本年度には、1179年から1349年のネパールの王の年代記とそれを補完する年代記2点について作業を行う予定であるが、これらの年代記よりもより完璧なものである可能性の大きな年代記が、第1年度の研究のなかで新発見された。そこで、この新発見の古文書と当初予定していた年代記の関係を文献学的に明らかにし、そののちに当初の作業を行う予定である。

17. ダティ：慣習法に基づくアンボン社会の社会経済制度 (アブドゥール R. H.)

香料の原産地として名高いインドネシア東部にあるマルク諸島の中心アンボン島は、マレー文化圏の東端に属するが、ミクロネシアの文化との共通性ももっている。

本研究は、アンボン島に存在するダティと呼ばれる伝統的な社会経済制度を、社会学・人類学の立場から研究しようとするものである。ダティとは、一つの親族集団によって共有・共同利用される、分割不能な耕作地の形をとる財産からきた言葉である。ダティの共有権をもつかどうかで、親族集団の成員の規定が成されており、伝統的なアンボン社会の基本構造を形作っていた社会経済制度である。しかし、近年の貨幣経済の浸透に伴ってダティ制度も徐々に壊れてきている。そこで、ダティ制度が伝統的アンボン社会で果たしてきた役割を研究し、また現状におけるダティ制度の状況を把握することを目的としてこの研究は行われる。

18. ネパール諸語古文書の保存と記録

(S. L. シュレスタ)

本プロジェクトは、1985年3月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。ネパールには、サンスクリット語、パーリ語、ネワール語、ネパール語等で書かれた多数の古文書があり、それらは古い時代のことを伝える記録としてネパールの貴重な文化遺産となっている。本プロジェクトは、古文書の個人的な収集家数名のコレクションを適切な場所を確保して収集・保管し、このままでは散逸してしまう貴重な古文書の保存と、利用者へのサービスの向上を目指したものである。

第1年度には、古文書のカードとカタログ作りに着手し、また適切な古文書の保管場所を捜す努力を重ねてきた。非常に適した家が見つかったため、本年度には、この家の購入と修理、改修を行って古文書館の設立に向けて努力する予定である。

19. バリの歴史関係貝葉文献のインヴェントリー

(A. A. G. P. アグン)

今日に至るまで、バリにはロンタルと呼ばれる貝葉文献が多数残されている。これらの古文書は、バリの歴史と文化のみでなく、王朝系統的に近い関係にあったジャワの古い時代を伝えてくれる重要な資料である。バリ語または古ジャワ語で書かれバリ文字が使われているロンタル古文書の内容は、文学、倫理、宗教、哲学、バリ暦、伝統医療、民話、歴史などに分類できる。しかしこれらの古文書に関しては、博物館に保存されているものは十分整理がされていないし、また民間に散在するものも多く、その全貌はよく知られていない。

本プロジェクトは、博物館に保存されているもの、また、民間にあるものも含めてバリのロンタル古文書のうち歴史関係のものインヴェントリーを作ろうとするものである。その目的はバリの歴史関係古文書の全体像を把握して今後の更なる保存活動に貢献するとともに研究者の利用しやすい目録を提供しようというものである。

20. ナコンシータマラート地域の古文書の調査と研究

(ウィッチェン N. N.)

本プロジェクトは、1983年9月、84年10月、85年3月の理事会でそれぞれ第1、第2年度そして追加助成が決定したプロジェクトの第3年度である。南タイのナコンシータマラートは、現在のタイ、マレーシア、インドネシアにまたがる大王国、スリヴィジャヤの首都があったのではないかといわれ、東南アジア史研究の焦点となっている地域であるが、その真相は解明されていない。

こうした状況のなかで、本プロジェクトは地元の教育大学の研究者を中心としたチームが、ナコンシータマラートの16の地区にあると予想される総数約3,000の古文書の調査、収集、マイクロフィルム化、翻字、解釈、出版を行おうとするものである。第1、2年度では、ナコンシータマラートの11地域で約2,000点の古文書を調査、収集した。本年度では、更に5地域で約1,000点の古文書の調査、収集を行うとともに、これまで収集した古文書のマイクロフィルム化を中心に行う予定である。

21. バンジャル地域の私立イスラム教育機関の研究

(アナリアンジャ)

カリマンタン島の南部、バンジャル・マシを中心とした地域は、バンジャル王国が成立した16世紀からイスラム教がこの王国の国教であり、インドネシアのなかでも最も古くからイスラム化が進んだ地域の一つである。ここに学校制度的なイスラム教育機関マドラサが普及したのは、オランダの学校制度の影響を受ける19世紀中期になってからであるが、20世紀初頭にはその総数は公立学校の数を上回っていた。しかし1970年代になって、これらのマドラサの役割は大きく変わりつつある。

このようにバンジャル社会は、インドネシアのなかでもイスラム教育が盛んなところとして知られていながら、その実態に関する詳しい調査は今日までなされていない。そこで本プロジェクトでは、地元の国立イスラム高等学院の研究者がチームを作って、バンジャル社会の私立イスラム教育機関の歴史、現状およびそれを支えている社会・文化的背景を探ることを目的としている。

22. トラジャのトンコナン：その歴史と機能

(P. P. タンディランギ)

スラウェシ島の高地に住むトラジャ人は、その独特の形をした舟型の家や盛大な葬儀などで知られ、従来より世界の文化人類学者の注目を集め多くの研究がなされてきた。本研究は、従来研究の対象者の立場にあったトラジャの王族の末裔が、郷土史家として長年にわたってトラジャの歴史や文化の口承による情報を収集してきた経験を生かして研究を行おうとするものである。

本プロジェクトの対象となるトンコナンは、トラジャの村々にある独特の形をした家で、儀礼を行う場所、集会所、系統を示す家などとしての様々な機能をもっており、またトラジャの歴史にも重要な意味をもっている。本プロジェクトは、このトンコナンのトラジャ社会における機能とトンコナンにまつわるトラジャの歴史について研究し、本にまとめようとするものである。

23. 北アチェの工業開発にともなう周辺社会の文化変容

(ダヤン D.)

北アチェの近代的な大規模工業プロジェクト（LNGプラントと肥料プラント）の出現は、それまで社会的・文化的・経済的に伝統的な状態にあった周辺の農村社会の住民に、大きな衝撃を与えた。また、同工業プロジェクトの関係者として、インドネシア各地の様々な民族の人々、また多くの外国人がここに居住するようになり種々雑多な諸文化の混交のなかで興味深い現象が起こっている。

本プロジェクトは同工業プロジェクトが周辺の伝統的農村社会にもたらした社会的・文化的変容過程について、以下の点に焦点を当てて研究しようとするものである。

①地域の工業化のプロセスに対する周辺社会の人々の認識の変化の経年調査、②プラントの敷地内およびその周辺で起こっているインドネシア語の変容に関する社会言語学的研究、③中部アチェから北アチェへ向けて起こっているガヨ族の移住の研究である。

24. アチェ起源のマレー古文書のインヴェントリー

(ザカリア A.)

スマトラ島の西端に位置するアチェは、インドネシア・マレーシア地域のマレー世界のなかでイスラムの学術・教育のセンター的な役割を長く果たし、多くのイスラム学者が輩出している。

本プロジェクトは、アチェ内外に残存するアチェ起源のマレー古文書の総合的なインヴェントリーを作ろうとするものである。アチェで書かれた、あるいは使用されたこれらの古文書は、アチェ語やマレー語で書かれアラビア文字が多く使われている。その内容は、文学、物語、民話などやイスラム宗教関係である。現在は、オランダ、イギリス、マレーシア、シンガポール、ジャカルタなどに散在しており、またアチェのなかでもイスラム教育機関や個人の手元にあるものが多い。本プロジェクトは、これらのアチェ起源の古文書を網羅したインヴェントリーの作成を目指している。

25. 複合社会における社会統合を促進する教育・社会施設の空間的配置：メダン市の研究 (ウスマン P.)

スマトラ島の西部の北スマトラ州の州都であるメダンはインドネシア第3の都市で、この地域の経済の中心地である。メダンには、先住民のマレー人、農業労働者として流入した中国人とジャワ人、また周辺地域のミナンカバウ人とバタック人も流入し、5～6の民族がほぼ同じ割合で住んでおり、インドネシアの都市の特徴の一つである複雑な民族間関係が最も顕著に表れている。各民族は、特定の職業を独占して他の民族を排除し、またその伝統様式を保持して各々の居住区をつくって固まって住み、居住区の境界上では民族間の紛争が絶えない。

本プロジェクトは、このようなメダン市の民族間関係の改善にとって、学校やスポーツセンター等の教育・社会施設の果たすべき役割に着目し、これらの施設の管理者や利用者の民族構成を調査して、民族間関係にこれらの施設が果たし得る役割ならびに施設をどこに配置するのが最も効果的であるかを明らかにしようとする。

26. ブギス・マカッサル文字のタイプライターの製作と寄贈 (サラフディン)

インドネシアにはその民族固有の文字をもつ民族が幾つかあるが、南スラウェシを中心とするブギスとマカッサルの人も独自の文字をもっている。両民族の文字は若干異なるが基本的には同じで、その文字を用いてロンタラと呼ばれる貝葉文献が残されてきた。これらの古文書は、ブギス・マカッサルの歴史や文化を知るうえで大変貴重な資料である。しかし、これらのロンタラを用いて歴史や文化の研究を行っている研究者にとって、ブギス・マカッサル文字のタイプライターがないことは、研究の大きな障害となっている。

本プロジェクトはこのブギス・マカッサル文字のタイプライターを日本で製作し、これをしかるべき研究機関や個人に寄贈しようとするものである。

27. ミナンカバウ語に特有の語彙、連語、表現の研究

(ハイデイル A.)

インドネシアの西スマトラ地方のミナンカバウ語はマレー語の重要な一つの地方語であり、このミナンカバウ語を含むマレー語を基礎にインドネシア語がつけられたため、ミナンカバウ語とインドネシア語には共通点が多い。しかし両言語には、全く異なる語彙や、似たような語彙でも意味の異なるものもまた多い。そこで本研究ではこれまであまり研究されてこなかったミナンカバウ語に焦点を当て、インドネシア語にないミナンカバウ語に特有の語彙をフィールド調査によって収集し、チェックリストを作成して、インドネシア語と英語の対訳を付すことを目指している。

このチェックリストの作成後、ミナンカバウ語の連語の調査、および慣用表現や格言の調査を予定しており、全体を通してミナンカバウ研究にとって不可欠な、ミナンカバウ語に関する言語学的情報を提供すること、またミナンカバウ語の記録に資することを目的としている。

28. ネパール文化百科事典

(K. K. B. シャー)

中国とインドに接するヒマラヤ地方にあるネパールは、様々の民族が居住し、また両文明から大きな影響を受けて豊かな伝統文化を育んできた。本プロジェクトでは、このようなネパール文化に関して、これまで行われてきた幾多の研究成果を百科事典の形でまとめることを目指す。編纂作業は、ネパール唯一の大学であるトリブヴァン大学のネパールアジア研究センターのスタッフが行う。

第1年度には各国の百科事典編纂の経験に学ぶためにアジアの数か国にスタディー・ツアーを行う。その後、毎年、定められた見出し語について執筆者を決めて、既存の文献等を調査して各見出し語をまとめていく。執筆陣はネパール人研究者が中心になるものの、外国人のネパール研究者にも執筆を依頼し、国際的な協力体制の下に編纂作業を進める予定である。

29. 東北タイの寺院壁画の調査と写真による記録

(パイロート S.)

本プロジェクトは、1981年9月、83年9月および84年9月の理事会でそれぞれ第1年度、第2年度、第3年度の助成が決定したプロジェクトの第4年度である。本プロジェクトは、東北タイの貴重な文化遺産であり、また同地域の民俗研究資料ともなる東北タイの寺院壁画の調査を行い、壁画を写真と模写により記録することを目的としている。

第1年度では、東北タイの壁画の全体像をつかむために全地域を対象とした予備調査を行い、東北タイ15県の70の寺院のうち35寺院に壁画のあることを発見した。第2、3年度では、壁画の保存状態のよい重要な10寺院について、①建物の図面の作成、②原寸大の壁画の複製の作成、③プリントとスライドの写真撮影、④壁画に関する伝承の収集を行った。第4年度は、これまでの研究成果の集大成として、研究報告書を出版し、またタイ各地で東北タイ壁画の写真展、討論会を開催する。

30. 東北タイの碑文：碑文学，歴史学研究

(タワット P.)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。東北タイの碑文は、各々言語・文字の異なる3グループ①前アンコール期(6～10世紀)、②アンコール期(10～12世紀)、③ラオス期(13～19世紀)に分類される。本プロジェクトでは、まだ解明の進んでいないラオス期の碑文の拓本を取り、それを現代タイ文字に翻字し、その内容を分析することを目指している。

第1年度では、東北タイの五つの地点で調査を行い、44の石碑と13の仏像画石碑を発見し、それらすべてを写真、スライドに収め、また拓本に取った。第2年度には、第1年度に収集したデータを現代タイ文字に翻字し、また方言語彙集や単語表の編纂を行う予定である。また、ラオスへも行って碑文の現地調査を行い、東北タイの碑文との比較研究を試みる予定である。

31. ペガンボン：ラナオの複数のサルタン制度の歴史的 研究

(M. R. タワゴン)

フィリピン第2のイスラム勢力であるミンダナオ島、ラナオのマラナオ族には、非常に多くのサルタンが存在するが、その理由は分析されていない。本プロジェクトは、マラナオ族に特有のペガンボンという制度とサルタン制度の関係を歴史的に解明することにより、マラナオ族が複数のサルタンをもつ理由を明らかにすると同時に、マラナオ族の歴史を研究しようとするものである。

ペガンボンとは、マラナオ族の人間関係を規定する成文化されていない契約で、それによってマラナオ族は領地的にも社会階層的にも細分化されたサルタン領によって分けられる。本研究者は、マラナオ族が、イスラム教に伴ってサルタン制度が導入される前にペガンボン制度をすでに確立していたため、サルタン制度は土着の制度と結びついた形でしか受け入れられなかった、等の幾つかの仮説を立てて研究を進める予定である。研究方法には、文献調査とフィールド・インタビューが用いられる。

32. チナカラマリニの美術索引

(ピリヤ K.)

本プロジェクトでは、ランナタイの美術史の全貌を解明する一環として、同地域に残存する多数の美術品、建造物の遺跡を、過去に美術品に関する詳細な記録が盛り込まれているランナタイの代表的年代記であるチナカラマリニを利用して調査し、より正確で詳細なランナタイの美術品のインヴェントリーを作成することを目的としている。

作業手順は、①チナカラマリニに記されている美術品に関連した部分(パーリ語原文)を新たに英語とタイ語に翻訳し直す、②ランナタイ地域でフィールド調査を行い、チナカラマリニに記載されている美術品と実物との同定作業を行うと同時に、それらの美術品の写真撮影をする、③上記の作業で得られたデータを基に、それらの作品の様式等を分析・分類する、④分析の終了した美術品に関して、実物の写真、注釈、平面図、全体図等を盛り込んだインヴェントリーを作成する、である。

33. ワライの伝承：レイテ地域の地方史と社会変化

(J. B. ポロ)

フィリピン社会は豊かな伝統文化と民俗的生活様式をもっているが、その文化の表れである伝承を記録、分析することによって民衆の世界観や社会意識へと理解を深めようという試みはあまり行われてこなかった。本プロジェクトは、ヴィサヤ地方の言語の一つであるワライ語の話されているレイテ島に伝わる伝承の総合的な記録を目指した初めての試みであると同時に、伝承を民族学的、人類学的に解明し、伝承が生まれた歴史的な文脈を知るために、レイテの地方史の研究を行う。

研究方法は、①レイテ島の農業・漁業の様々な生産過程の現場を観察し、それに伴って行われる儀礼等の伝統表現を記述して写真やスライドに撮る、②特に、農業・漁業の儀礼の主要調査地としてマリピピ島を選び、継続的な観察と記録を行う、③マリピピ島の農業・漁業の生産過程における経済・社会的なデータを調査する、④ワライの地方史に関する歴史的文献調査を行う、である。

34. 西スマトラの歴史：1908年の租税反乱

(ルスリ A.)

インドネシアの西スマトラ地方に関しては、文化人類学的研究、イスラム研究が中心で、歴史研究はあまり行われていない。こうしたなかで地元出身の郷土史家である本研究者は、オランダの公文書館や図書館に保存されている膨大な量の資料、記録を読破・整理して、すでに1833年に植民地政府が西スマトラの住民に対して布告した「長い布告」、およびそれ以前の西スマトラの歴史研究を行っている。本研究は、この研究に続くもので、同様の研究方法で行われる。

「長い布告」とは、西スマトラのイスラム反乱勢力を鎮圧するためにオランダ植民地軍が、西スマトラの住民の支援を得ようと金銭による租税の導入をしない旨を約束した布告である。この布告によってオランダ軍は、反乱勢力の鎮圧に成功する。その後、布告での約束が次々と反古にされていったことに対して1908年に住民が起こした「租税反乱」が本プロジェクトのテーマである。

35. カトマンズ盆地の美術品の写真インヴェントリー

(L. S. バンデル)

カトマンズ盆地には、精緻な建築、彫刻、碑文等が高度に発達した文明が存在してきたが、今日、これらの貴重な文化遺産は度重なる盗難で危機的状況に瀕している。これらの美術品を盗難から保護するためには、美術品を確定していく作業と、それが現在おかれている状況を正確に把握する必要がある。

本プロジェクトでは、現在まだカトマンズ盆地に残っている美術品に関して、現場を訪れて写真に撮り、現場の地理や状況を記録し、これらを集積してインヴェントリーとして編集・出版することを目指している。また併せて、古い写真や記録などによって、現在はネパールから流出してしまっている美術品のカタログを作成することも目指している。

36. 貝葉文献に基づく北部タイ古語辞書編纂

(アルンラット W.)

本プロジェクトは、1985年3月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトは、北部タイの貝葉文献のなかで使われている北部タイ古語の辞書の編纂を目的とするものである。

トヨタ財団が助成してきたタイ各地の貝葉文献の発掘、マイクロフィルム化のプロジェクトのなかでも、特に北タイの古文書に関する作業が進展している。この北タイの古文書をより多くの分野のより多くの研究者が利用できるようにするため、これらの古文書で使われている北部タイ古語の辞書作りを行おうというのが、本プロジェクトの目的である。第1年度には、辞書の形式、辞書に盛り込む内容等を討論した。また、15の貝葉文献から問題の多い語彙を抜き出し、そのうち109語に関しては解明が完了している。第2年度には、第1年度に引き続いて、問題のある語彙の用語法等を明らかにし、併せて、対象とする文献の範囲をより広げていく予定である。

37. 1901年より1972年までの北部フィリピン、パンガシナン州の地方史 (R. M. コルテス)

フィリピンの歴史研究に存在する多くの欠落部分を埋めるためには、フィリピン社会を構成する様々の民族と様々の地方の歴史を再構成する必要がある。そこで近年、地方史研究の重要性が認識されてきている。

本研究者は、現在までにフィリピンのパンガシナンの歴史について、1572年から1800年までの時代と1801年から1900年までの時代を研究してきている。本プロジェクトは、以上の二つの研究に続くものであり、1901年より1935年までのアメリカ植民地政権に対する住民の反応、1935年より1945年までの独立準備期、日本占領期、1945年より1972年までの独立と共和国の初期25年間についてパンガシナンの政治・文化・社会・経済史を書き上げる予定である。研究方法は、文献調査とパンガシナンでの聞き取り調査である。文献調査はフィリピン国内の公文書館での調査とともに、アメリカ、ワシントン・D. C.の国立公文書館での調査を行う。

38. 東南アジアのイスラム

(タウフィク A.)

13世紀から19世紀初頭にかけての東南アジアには、各地に多くの王国、侯国等がそれぞれの特徴をもって存在していたが、全体としてみると『マレー・イスラム世界』と呼び得るものが成立していたとみられる。

本プロジェクトは、インドネシア各地、マレーシア、シンガポール、フィリピン南部、タイ南部のイスラム社会を訪問調査し、資料調査を行って、これら東南アジアに広がるイスラム社会を比較研究することを目的としている。これはすなわち、『マレー・イスラム世界』と呼ばれるものが、現在の東南アジア地域のイスラム諸社会にどう受け継がれているのか、いないのかを探求するとともに、東南アジアというより広い視点からみることによって、各国それぞれの歴史的文脈から自由になって、イスラム社会という共通の視座から、各国で起きている様々のイスラム社会の動きをより深く理解することを目指すものである。

39. 東北タイ南部の古代集落研究に関するワークショップ (パイトゥーン C.)

1981年から3年間にわたる助成で完成した『航空写真によるタイ環濠集落のインヴェントリー』を核としてタイ全土の集落遺跡に関する情報を総合的に収集して、コンピュータを導入したデータベースをもつ古代集落情報センターを設立しようとするプロジェクトが進展している。

本プロジェクトは上記のデータベース作りの一環として、東北タイ南部の古代集落に関するフィールド調査を同地域の4校の教育大学を中心とした地元の研究者が実施するに当たって、地表調査を正確に、また一致協力してできるように、ブリラム教育大学でワークショップを開催することを目的としている。ワークショップでは、①これまでの研究実績の発表、②航空写真からつくった古代集落のインヴェントリーを地表調査にいかん利用したらよいかの意見交換、③フィールド調査のためのオリエンテーション・ツアー、④調査および保存活動のための協力体制づくりに関する話合い、を実施する予定である。

40. 北タイの古代集落研究に関するワークショップ

(モンコーン T.)

本ワークショップは、前述の「東北タイの古代集落研究に関するワークショップ」と同様、航空写真によるタイ環濠集落のインヴェントリーを基にして北タイの地表調査を行うに当たって、同地域の教育大学を中心とした地元の研究者が協力して調査および保存活動を実施できる体制をつくることを目的としている。

41. 東北タイ北部の古代集落研究に関するワークショップ
(スントン K.)

本ワークショップは、前出の東北タイ南部および北タイの古代集落研究に関するワークショップと同じ趣旨の下に、東北タイ北部の古代集落研究に関するワークショップを同地域の4校の教育大学が中心となって、開催しようとするものである。

42. フィリピン演劇の歴史とアンソロジー

(N. G. ティオンソン)

演劇はフィリピン芸術のなかでも最も古い芸術の一つであり、演劇の研究はフィリピン人のアイデンティティの探求への努力に貢献するところが大きい。

本プロジェクトでは、過去10年間伝統的演劇と現代演劇の記録を行ってきた研究者が、以下の研究を行う予定である。①フィリピン演劇の包括的な歴史を書く、②様々な演劇の様式を、フィールド調査と文献調査により記録する、③主要な演劇様式の代表的作品の完全な脚本を原語で再現し、英訳と注釈をつける、④これらの様式の主要な作品の注釈つき目録を作成する。

研究成果は『フィリピンの演劇：歴史とアンソロジー』として2巻に分けて出版する。第1巻で扱う演劇様式は、フィリピン土着の演劇、コメディア(もしくはモロモロ)、コメディア・デ・サント、シナクロ、宗教的演劇であり、第2巻で扱う演劇様式は、サルスウェラ、ドラマ、ポダベル、スペイン語と英語の演劇、現代演劇である。

43. ネグロス：1850年より1985年までの社会・文化・経済史
(V. L. ゴンザガ)

フィリピン・ネグロス島の砂糖きび栽培の大農園(アシエンダ)を所有するネグロス人は巨大な権力を握っていた。しかし、マルコス政権による砂糖産業の独占、1980年代の世界市場での砂糖価格の暴落は、ネグロス経済に大きな打撃を与えた。本研究は、ネグロス島の現在の社会経済的危機を理解するために、その歴史的背景を明らかにすることを目的とすると同時に、ネグロス人の社会史・文化史の欠落を補うことをも目的としている。

研究は3段階で行われる。すなわち社会調査、文献調査、そしてケース・スタディである。文献調査はフィリピンの公文書館や図書館およびアメリカ、ワシントン・D. C.の国立公文書館で行う。ケース・スタディは参与観察に基づく人類学的調査方法を用いる。アシエンダの分類を行い、代表的なアシエンダをサンプルとして選び、その所有者や管理者へのインタビューを行う。

44. ランナタイとシブソンパンナ：文化関係の研究、連続性と変化
(M. R. ルチャヤ A.)

ランナタイは、現在のビルマのシャン州、中国雲南省のシブソンパンナ(中国語表記では西双版纳)、およびラオス等の近隣地域と9世紀ごろから物や人の交流が盛んで、これらの地域の思考様式や慣行は相互に影響し合っていた。しかし、こうした歴史関係が見落とされていたり、1975年まで中国と国交がなかったため、従来のランナタイ研究の対象は、ランナタイ地域のみに限定されていた。

本プロジェクトは、このような理由で実施されてこなかったランナタイと中国雲南省のシブソンパンナの文化関係に関する研究の促進を図るために、タイ、中国および日本の研究者をタイに招待して国際会議を開催することを目的としている。同会議では、伝統建築、言語と宗教信仰、および社会組織分野におけるシブソンパンナとランナタイとの関連、類似性に関して討論し、比較を行う予定である。

45. モルディヴのディヴェヒ語の歴史・方言学的研究

(S. ウィジェステンデラ)

西暦紀元初頭にインド、スリランカからの移住者によってもたらされた言語であるモルディヴ共和国のディヴェヒ語は、その後モルディヴの地理的特徴等の影響を受けて独自に発展していった。本プロジェクトは、このディヴェヒ語に関して、①その起源および発達を歴史的に解明する、②シンハラ語との関係を明らかにする、③各地域の方言を分析・研究し、方言分布図を作成する、④社会的階層化など言語に反映されている社会現象を分析・研究することを目的としている。

研究方法としては、①古文書、寺院や墓石に刻まれた年代記、碑文等を用いてディヴェヒ語を歴史言語学的手法で分析する、②各島を訪ねて、方言を収録すると同時に、インフォーマントから情報を収集する、③また訪問先で、その地域の社会・文化行事を観察・記録する、等を行う予定である。

46. フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査

(M. B. D. アランパイ)

フィリピンの地方史研究を行い、地方と中央の関連を研究する場合の最大の問題点は、その研究に欠かせないスペイン語の古文書が総合的・組織的に整理されていないことにある。本プロジェクトでは、フィリピン地方史研究促進の基盤づくりとして、歴史学者に役に立つ資料の質的あるいは量的な概要を示すことを目的として、主な歴史公文書館の地方史に関連する文献目録を作成する。

調査は、フィリピンとスペインの公文書館において行われ、以下の内容を含むインヴェントリーを作成する。

①古文書のタイトル、②古文書が書かれた年代、③出処、④古文書のなかに含まれている特定の州、市、町、地区等に関する情報の概要と注釈。第1年度に行うフィリピンでの調査では、主にマニラ、セブ、ヴィガン、ナガ、サンボアング、ハロにある各修道会の公文書館を対象とし、第2年度にはスペインのマドリッド、セヴィリア、アヴェラ、バルセロナの公文書館を対象とする予定である。

47. フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成

(R. A. コンセプション)

フィリピン国立公文書館には、3世紀以上におよぶスペイン統治の歴史を知るために貴重な資料となるスペイン語古文書が1,000万点以上も所蔵されているが、それらはごく簡単に分類されて束ねられているだけで、その数も正確に把握されていない。

本プロジェクトでは、国立公文書館の内部のスタッフが中心となって、いままでに手つかずに放置されてきた古文書の束を整理し、誤って別の束のなかに収められている古文書を選び出し、古文書を年代順に並べ換え、利用者が古文書を検索しやすいように古文書の内容を記載したインヴェントリーを作成することを目的としている。作業の過程で破損のひどい古文書を抜き出して、特別の保存方法を考える。さらに余力があれば古文書を項目ごとにマイクロフィルム化することも、将来計画のなかで検討する。

48. 『社会科学ジャーナル』の発行

(S. フセイン A.)

本プロジェクトは、1983年3月、84年3月および85年3月の理事会でそれぞれ第1、第2、第3年度の助成が決定したプロジェクトの第4年度である。本プロジェクトで発行されるジャーナルは、マレーシア社会科学会が発行する季刊の学術誌で、すでに10号までが発行されている。その目的とするところは、①東南アジアの社会科学者による国際的な共同研究、共同出版を促進させ、②東南アジアの社会科学者間の知識と情報の交流を促進させ、③社会科学において、東南アジアからの固有の視点やアプローチを開発することに貢献することである。

ジャーナルは順調に評価を得つつあるが、3年間の助成期間を終えた時点で今一步自立に至る財政基盤が確立されていない。そこで本年度は、ジャーナルの発行の継続を行うとともに、自立して発行を継続するための財政的基盤づくりに向けての自助努力を一層進める。

49. 『チャム彫刻』の編集と出版

(P. フウ)

現在、ヴェトナム中部に居住するチャム族は、チャンパという名の東南アジアでも最も古い王国の一つをつくり、高い文明を誇っていたが、そのなかでも美術、とりわけ彫刻に優れていた。チャム人の建てた寺院の石彫は、千年以上もの時間を経てなお今日にまで残っており、その美術品としての芸術性の高さは抜きん出るものがある。

本プロジェクトは、ヴェトナム各地の博物館所蔵のチャム彫刻、および現在まだ残っているチャム寺院の彫刻を実際に現場を訪ねて写真に撮影し、これに解説をつけて出版してヴェトナム内外の多くの研究者に提供しようとするものである。

50. 『ドンソン銅鼓』の編集と出版

(P. H. トン)

ヴェトナムから出土するドンソン銅鼓と呼ばれる考古学遺物は、いまだ不明の点の多い東南アジアの古代史を探る重要な鍵であるとみられている。この銅製の鼓の形をした出土品の分布地域はドンソン文化圏と呼ばれ、一つの有力な共通文化をもつ人間集団が存在したと考えられている。

本プロジェクトは、これまでヴェトナムで発見されて各地の博物館に所蔵されている122のドンソン銅鼓のすべてについて、白黒写真、スケッチ、実測値をつけて出版しようとする初めての試みである。

51. 『ビルマのデザイン』の編集と出版

(チャーク S.)

本プロジェクトは、ビルマ人の1人の建築デザイナーが永年にわたって個人的努力を重ねて、複写し続けてきたビルマの伝統的なデザインのコレクションを解説をつけて出版することを目的としている。

この出版のためにタイのシンラパコン大学の装飾芸術学部と建築学部の研究者が協力することになっている。本プロジェクトでは、このタイ人専門家達がビルマを訪れて、このビルマ人デザイナーと相談し、またこの本に注をつけるためにビルマの伝統的建築デザイン等の写真を撮影することになっている。その後、これらの素材を基にしてビルマ人デザイナーと相談しつつ、この本の編集をタイで行うことになっている。

IV. 「隣人をよく知ろう」プログラム

IV-0 . プログラムの概要

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は1978年度に発足し、日本向けのプログラムは8年目を迎えるに至ったが、1982年度から東南アジア向けのプログラム、また1983年度から東南アジア相互間のプログラムが開始された。

日本向けプログラムのねらいは、日本の人々が隣人である東南アジア諸国の人々の文化・社会・歴史等についての認識を深めることを促進することである。そのために、東南アジア各国の人々が書いた文学作品や文化・社会・歴史等についての本のなかから日本の一般読者へ紹介することがふさわしいと思われる本を、東南アジアの人々の推薦を受けて選び出し、それらの本の日本語版を製作するときの翻訳料を助成する。この8年間で98件が助成対象となった。各国別の累計はインドネシア27件、シンガポール7件、タイ29件、ネパール2件、ビルマ16件、フィリピン8件、マレーシア9件である。

東南アジア向けプログラムは、東南アジアの人々の日本に関する正しい理解を促進することを目標に、日本人の手になる日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品および日本人による東南アジア研究の成果を東南アジア諸国の言語に翻訳・出版する際の助成を行う。翻訳対象書の選定、翻訳者の選定、出版者の選定等の実際の運営は、助成対象となる東南アジア諸国の組織が行う。1985年度にはインドネシア（第2年度）、ネパール（第2年度）、ヴェトナム、スリランカのグループが助成対象となった。現在、このほかに、これまでに助成を受けたタイ（1982年度）、マレーシア（1982、1983年度）の各グループが本プログラムの下で活動を行っている。

東南アジア相互間のプログラムは、東南アジアの国々相互の間の理解を促進することをねらいとして、東南アジアの人の手になる社会科学書、人文科学書、文学作品を他の東南アジアの言語に翻訳・出版する際の助成を行う。1985年度にはタイ（第3年度）とフィリピンのグループが助成対象となった。さらに特別プロジェクトとして、タイのプラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書の翻訳がヴェトナム、スリランカ、中国、ネパールで行われている。

なお、以上のほか、「隣人をよく知ろう」プログラムに関連する活動の基礎となるべき東南アジア諸語—日本語辞書の出版を促進することをねらいとして、辞書編纂作業費と出版経費の一部を助成する東南アジア諸語辞書編纂出版助成がある。これについては、現在までに、ヴェトナム語およびタイ語の辞書が助成対象となっており、編纂が進行中であるが、本年度は助成対象はなかった。

IV-1. 日本向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名 (原著国名)	出版者名	助成金額 (円)
1	二十世紀：ある小路にて ——ネパール女流作家選—— 寺田 鎮子 三枝 礼子	Kathama narihastaksar Sailendra Sakar (ネパール)	段々社	1,340,000
2	チャオ・ファー ラオス内戦を戦ったモン族の物語 桜田 育夫	Chao fa Piriya Phanasuwan (タイ)	めこん	1,180,000
3	明け染めぬ夜 高岡 秀暢	Nasamphagu Ca Ramashekhara (ネパール)	新宿書房	1,100,000
4	メイド・イン・ジャパン 庄司 和子	Made in Japan Surachai Chantimathong (タイ)	新宿書房	660,000
5	マニャールという鳥 舟知 恵	Burung Burung Manyar Y. B. Mangunwijaya (インドネシア)	井村文化事業社	1,860,000
6	漁師 河東田 静雄	Kô Tangá Kye Nyi (ビルマ)	新宿書房	2,000,000
7	マレーシアの夜明け 鍋島 公子	Looking Back Tunku Abdul Rahman (マレーシア)	井村文化事業社	1,640,000
8	裁き 星野 龍夫	Kham phiphaKsa Chat Kojitti (タイ)	井村文化事業社	1,400,000
9	運命の歳月 二村 健	The Fateful Years : Japan's Adventure in the Philippines, 1941-1945 Vol. I, II Teodoro A. Agoncillo (フィリピン)	井村文化事業社	5,200,000
10	会うは別れのはじめ 森田 和彦 原田 正美	Kan kon twa son soan sa Thaw Ta Swe (ビルマ)	井村文化事業社	800,000

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名 (原著国名)	出版者名	助成金額 (円)
11	ベチャ引き家族の物語——インド ネシアにおける貧困の文化—— 染谷 臣道 加納 啓良 井草 邦雄	Kisah Kehidupan Keluarga Ngadimin-Seorang Pengemudi Becak Heddy Shri Ahimsa Putra (インドネシア)	井村文化事業社	1,400,000
	合 計	11冊(インドネシア2冊, タイ3冊, ネパール2冊, ビルマ2冊, フィリピン1冊, マレーシア1冊)		18,580,000

助成対象概要

1. 二十世紀：ある小路にて—ネパール女流作家選—

ネパールでは、1951年の王政復古以後、女性の知的活動が自由に行われるようになり、上層階層のみでなく、山岳民族や下層カースト出身の才能豊かな女流作家たちも続々と登場し、彼女たちのおかれた矛盾に満ちた家族制度、社会生活を鋭く追求した作品を書いている。彼女たちの作品からは、ネパールの背負っている歴史的・政治的・経済的状態が容易に汲み取れる。本書は、そうした現代ネパールの代表的な女流作家14名の作品を、1975年に始まった「国連婦人の10年」に協賛して編集したものである。

2. チャオ・ファー ラオス内戦を戦ったモン族の物語

インドシナ戦争当時のラオスの内戦の実態を、右派・左派に分かれて戦ったモン族の目を通して描いたドキュメンタリー・フィクションである。主人公のネーン・リー・トゥは、右派政府側の将軍に率いられるモン族の若者で少数民族として蔑視されながらも、ラオスを自らの祖国とし、祖国のために勇敢に戦う。しかし戦いは左派が勝利を収め、ネーン・リー・トゥはタイに逃れる直前に射殺される。本書は、ラオス内戦の一端を知らせるとともに、ラオスにおける少数民族問題にも触れた作品である。

3. 明け染めぬ夜

第2次世界大戦後、第三世界の各国が民族自立・独立してゆくなかで、ネパールではネワール語および同文学運動が展開され、社会状況の批判をテーマにした小説も出版されるようになった。こうした背景の下、パルンク村の兄妹の描写を通して、農村の人々の生活、社会状況を描写したネワール語作品が、本書である。標題は、妹スシヤマが村の有力者の息子に暴行された事実を村人が解明しながらも、有力者が警察を味方にして事件を闇に葬ってしまった村の状況を暗示したものといえよう。

4. メイド・イン・ジャパン

著書スラチャイは、タイの農村の人々の貧しい暮らしぶりとそこに流れる温かい人間性への限りない憐憫と共感や、バンコクや東京などの大都会での疎外感などを表現している詩人・作家である。また、カラワン楽団の一員として自作の詩に作曲し演奏する音楽家でもある。本書は、彼の作品のなかで『カラワン以前：スラチャイ・ジャンティマトン短編集』、『メイド・イン・ジャパン』および『カラワンの日本旅行日記：1984年9月—1985年1月』の3冊から作品を選んで、翻訳・編集を行う。

5. マニャールという鳥

日本占領、独立宣言、独立革命戦争と、激動の時代は蘭印軍に加わった主人公テトの境遇を弄ぶ。幼友達のアティックは共和国側に奉仕し、その後20年の歳月、2人は別れ別れにそれぞれの道を辿った。しかし、彼らは偶然再会する。この恋人たちは、結婚という形では結ばれなかったが、祖国の歩みとともに苦しみ、傷つきながら成熟した人生に到達する。インドネシアの独立闘争を舞台に、反共和国側のテトを主人公にすえて、独立闘争中の1人の反共和国者の心の葛藤を見事に描写した小説である。

6. 漁師

本書は20編の短編集から成り、主人公の漁師ダアウンセイん夫婦をはじめとした貧しい漁民の生活を、イラワジ川デルタ地帯の漁村を舞台に、その風俗、伝統、信仰、自然などを織り混ぜながら、克明な筆致で描いている。ビルマの伝説、古典文学、古事、歌謡、諺などをふんだんに駆使した叙述部分は、文学的に格調の高いものとなっており、そのなかに原作者の郷里ダヌピュー地方の貧しい漁村の赤裸々な日常生活を彷彿とさせる会話を盛り込んで、強い土着臭も感じさせる作品に仕上げている。

7. マレーシアの夜明け

著者トウンク・アブドゥル・ラーマンは、マラヤ連邦初代首相として、1957年の完全独立の達成に中心的役割を果たしたマレーシア建国の父である。本書は、彼が統一マレー人国民組織の議長としてマラヤ共産党の指導者チン・ペンと行った会談の回想に始まり、シンガポールの分離に至るまでのマラヤ独立の闘争とマレーシア形成の経過を、その政策決定の中枢にいた人物自らが叙述した作品である。その文面からは、彼の間人愛、また非暴力と合法性を遵守しようとする一貫とした態度が読み取れる。

8. 裁き

タイ文学界の新進作家チャート・コープチティの代表作。小説の舞台は、道路建設や電気敷設など近代化の波が押し寄せているが、また伝統的因習も根強く残っているタイ中部の農村。貧しいながらも模範青年との評価を得ていた主人公は、父親の死後、学校の用務員の仕事を引き継ぎ、義母と暮らす。しかし、村人から2人の関係にあらぬ疑いをかけられ、孤立し酒に溺れて死んでゆく。彼の死体は近代化されたばかりの火葬場でダビに付される。登場人物の巧みな心理描写によって現代タイ人の内面を照らし出すことに成功した作品である。

9. 運命の歲月

第2次世界大戦における日本のフィリピン占領を、日本軍および米比軍双方の作戦行動や歴史的事象にバランスよく言及して、叙述した研究書である。冒頭では、開戦に至るまでの日比関係が、そして開戦後に関しては、フィリピン史にとって重要な事件が日本軍および米比軍の作戦行動を軸に叙述される。日本軍政期以降に関しては、日本軍の諸政策、ラウレル政権、フィリピン人による各地の地下組織活動が詳述される。締めくくりに、著者の歴史観に基づいた日本占領に関する総括がなされる。

10. 会うは別れのはじめ

時は第2次世界大戦後の1946年、主人公のゴスエはラングーンからマンダレーへ米を運んで売ったり、銅の売買をしたりして生計を立てようと努力するが、独立運動の激しく吹き荒れる社会状況のなかで商売は軌道に乗らず、結局すべて失敗してしまう。その後、薄幸の女性マ・トウとの出会いから妻子の許に帰るまでの生活が描写され、これらの一連のエピソードのなかに挿入されたビルマの地方の情報や人々の様子から、ビルマの社会状況を垣間見ることができる。本書では、ほかに同じ著者の短編小説4編も加える。

11. ベチャ引き家族の物語——インドネシアにおける貧困の文化——

ベチャ引きという職業は、狭小な耕地、過剰人口、限られた職業の選択肢、遅れた教育状態といった今日のインドネシアをおおっている様々な悪条件が生み出した一つの働き口といえる。したがって、ベチャ引きとその家族の生活実態は、現代インドネシアが抱える困難の標本である。本書は、ジョクジャカルタ市およびその周辺に住むベチャ引きとその家族の生活を参与観察という文化人類学の方法を用いて描いたドキュメントであり、インドネシア庶民の暮らしの理解の一助となる作品である。

IV-2. 東南アジア向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目

	プロジェクト名 代表者	助成金額 (円)
1 (継2)	ネパール向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト M. L. カルマチャルヤ 日本文学翻訳委員会	3,010,000
2	日本の産業、経済、経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 V. D. ルオック 世界経済研究所	4,930,000
3 (継2)	インドネシア向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト M. サストラプラテジャ カルティサラナ財団	9,440,000
4	スリランカ向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト D. A. ラジャカルナ 日本文学翻訳委員会	760,000
	合 計 4 件	18,140,000

助成対象概要

1. ネパール向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (M.L. カルマチャルヤ)

本プロジェクトは、1984年10月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。このプロジェクトでは、3年計画で日本の文学作品、日本に関する社会科学書、人文科学書、および日本人によるネパール研究の成果をネパール語に翻訳・出版し、ネパールの人々の日本に関する正しい理解を促進することをねらいとしている。

本プロジェクトの運営は、出版関係者、言語学者、作家等のネパールの知識人達が組織する日本文学翻訳委員会が行う。委員会には、日本留学経験者やネパール在住の日本人仏教研究者や日本語教師も参加している。第1年度には10冊の本を翻訳中であり、第2年度には11冊の本が翻訳候補に上げられている。

2. 日本の産業、経済、経営に関する本のベトナム語への翻訳と出版 (V.D. ルオック)

ベトナムでは現在までのところ、日本人経済学者の著作でベトナム語に翻訳されているものは少なく、ベトナムの一般読者、経済学者は日本経済についての正確な情報を得ていない。本プロジェクトでは、*Japan's Managerial System* (M.Y. Yoshino著)、*Theory 2* (William Ouchi著) および、*Japan's Economic Policy* (G.C. Allen著)の3冊をベトナム語に翻訳、出版する予定である。

プロジェクトの運営、財政、翻訳書の編集は5人の委員から成る委員会が責任をもち、翻訳された本は世界経済研究所から出版される予定である。

3. インドネシア向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (M. サストラプラテジャ)

本プロジェクトは、1983年9月の理事会で助成が決定したプロジェクトの第2年度である。本プロジェクトでは、主として日本人の手になる日本に関する社会科学書、人文科学書、文学作品および日本人による東南アジア研究の成果をインドネシア語へ翻訳し出版する。

本プロジェクトの運営は、インドネシアの一流の知識人が組織し、インドネシアの文化の振興のためにセミナー、文化交流などの事業を行っている民間財団、カルティサラナ財団に事務局をおく委員会が行う。プロジェクトの第1年度には、『窓際のトットちゃん』、『学問のすすめ』、*Authority and the Individual in Japan*、および『三四郎』の4冊が翻訳、出版された。第2年度では、現在候補に上がっている15冊のなかから8冊を選んで、翻訳出版を行う予定である。また、第1年度に出版した本の販売収入から、リヴォルヴィング・ファンドをつくる可能性も探ることになっている。

4. スリランカ向け「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (D.A. ラジャカルナ)

本プロジェクトは、日本の文化、歴史、社会、経済などの分野から選ばれた本をシンハラ語とタミール語に翻訳して出版することを通じて、スリランカの人々に日本と日本人の生活を知ってもらうことを目的としている。

本プロジェクトは当面7人の言語や文学の専門家から成る委員会によって運営され、同委員会が翻訳する本の選定、翻訳者の選出、翻訳原稿の編集、印刷の監督、出版社の選択などプロジェクト全般の運営を行う。プロジェクトの第1年度には芥川龍之介の『羅生門』と『藪の中』、およびこれを基にした黒沢明の映画『羅生門』のシナリオの翻訳を行う予定である。これは、この映画がスリランカでは大変有名であり、スリランカの読者を日本文学に導く入門書として、これらの作品が適切であると考えられるからである。これらの本の翻訳・出版を通じて委員会は経験を積み、第2年度はより組織的にプロジェクトを展開することを目指している。

IV-3. 東南アジア相互間・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継3)：継続3年目

	プロジェクト名 代表者	助成金額 (円)
1 (継3)	東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (タイ) プラモート W. サティエンコーセット・ナーガプラティーフ財団	4,070,000
2	東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト (フィリピン) F. S. ホセ ソリダリティ財団	4,860,000
3	タイ語ーヴェトナム語辞書編纂 (ヴェトナム) P. D. ズオン 東南アジア研究所	750,000
4	プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書の ヴェトナム語への翻訳と出版 (ヴェトナム) N. T. ダック 東南アジア研究所	1,230,000
5	プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書の ネパール諸語への翻訳と出版 (ネパール) S. L. シュレスタ チュワサ・パサ	1,440,000
6	プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書および 回想録の中国語への翻訳と出版 (中国) マー・ニン 中山大学東南亜歴史研究所 トゥアン・リーシェン	2,590,000
7	文学と翻訳の国際ワークショップ (タイ) チャーンウィット K. 社会科学・人文科学教科書プロジェクト促進財団	3,310,000
8	プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書の シンハラ語への翻訳と出版 (スリランカ) G. D. ウィジャヤワルダナ コロンボ大学	1,530,000
	合 計 8 件	19,780,000

助成対象概要

1. 東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト(タイ) (プラモート W.)

本プロジェクトは、1983年9月、84年10月の理事会でそれぞれ第1年度と第2年度の助成が決定したプロジェクトの第3年度である。本プロジェクトは、タイの人々が近隣の他の東南アジアの国々への理解を深めることをねらって、それらの国々で書かれた作品、すなわちそれらの国々の社会、文化、政治を反映した現代文学を中心とした作品を、トヨタ財団の『隣人をよく知ろう』プログラムの理念を共有するタイの民間財団が翻訳し、出版しようとするものである。

第1年度はフィリピン文学とマレーシア文学各1件のタイ語への翻訳・出版を行い、第2年度にはインドネシア文学、ヴェトナム文学、ラオス文学およびカンボジア文学各1件をタイ語に翻訳中である。第3年度には、ビルマ文学、フィリピン文学、マレーシア文学、ヴェトナム文学を各1件、およびインドネシア文学2件を順次翻訳・出版する予定である。

2. 東南アジア相互間「隣人をよく知ろう」翻訳出版共同プロジェクト(フィリピン) (F.S. ホセ)

本プロジェクトは、前述のタイのプロジェクトと同様に、フィリピンの一般の人々が隣国への関心を高め、理解を深めることを目的として、東南アジア諸国の社会科学書、人文科学書、文学書をフィリピンの共通語である英語およびタガログ語に翻訳し出版しようとするものである。

このプロジェクトの運営に当たるのは、『ソリダリテイ』という雑誌を発行することにより、長年にわたって東南アジアの知識人の情報交流の場を提供してきたソリダリテイ財団である。編集委員会はインドネシア人、シンガポール人、タイ人およびフィリピン人によって構成されている。翻訳予定書の選択、翻訳者の選定、翻訳された本の編集はこの編集委員会が行い、年に5冊の本を翻訳出版する予定である。

3. タイ語-ヴェトナム語辞書編纂

(P.D. ズオン)

ヴェトナムに住む100万人以上のタイ系、Nung系の人々、およびラオスを含む、他の東南アジア諸国に住むタイ系の少数民族によって話されている言語は、現在大多数のタイ人の母語となっているタイ語と起源を同じくする。そこでインドシナ、そして東南アジア全体の諸言語を深く研究しようとする学者にとって、タイ語が重要な言語であることは長い間指摘されてきている。ヴェトナムにおいてもタイ語辞書が永く待たれてきた。

本プロジェクトでは、タイとヴェトナムの間の相互理解およびヴェトナムにおけるタイ研究を促進することを目的として、タイ語を学ぶ際、およびタイ語からヴェトナム語への翻訳を行う際の道具としてのタイ語-ヴェトナム語辞書を編纂する。編纂方法は、Thai Royal Institute により編纂された辞書等から、見出し語を3万語選び、それをヴェトナム語に翻訳し用例をつける手順を取る予定である。

4. プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のヴェトナム語への翻訳と出版(N.T.ダック)

故プラヤー・アヌマーンラーチャトンは、タイ国人文科学界の中心人物、特にタイ民俗学の権威者として名高い。彼は、タイ民衆の文化について倦むことなく調査を行い、それに基づいた著作はタイの現代史、文化、社会を理解するための民俗学的資料の宝庫として非常に貴重なものである。

現在、東南アジア諸国で、1988年にプラヤー・アヌマーンラーチャトンの生誕100年を迎えるのを記念して、その著作の翻訳を行おうとしている。本プロジェクトは、この事業の一環として彼の民俗学関係著作をヴェトナム語に翻訳、出版しようとするものである。

翻訳は英語版の *Essays on Thai Folklore* から行われ、翻訳には東南アジア研究所の3人の翻訳者グループが当たる。この3人は、それぞれ翻訳、編集、評価を担当し、翻訳の質を高める。

5. プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のネパール諸語への翻訳と出版

(S.L. シュレスト)

本プロジェクトは、前出の「プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のヴェトナム語への翻訳と出版」のプロジェクトと同じ趣旨の下にネパールで行われるプロジェクトである。

ネパール諸語に翻訳されたタイ民俗学関係の本は、いままで1冊もない。プラヤー・アヌマーンラーチャトンの民俗学関係著書の英語版 *Essays on Thai Folklore* がネパール語およびネワール語に翻訳されれば、ネパールの人々に、タイの民俗と伝統に関する一般的な知識を提供し、タイに関する基礎的情報源としての役割を果たすことになろう。

翻訳は助成対象者が1人で行うが、翻訳の草稿が出来上がったところで編集者が翻訳の正確さをチェックする。本の出版はネパール向け『隣人をよく知ろう』プロジェクト日本文学翻訳委員会を通して行う。

6. プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書および回想録の中国語への翻訳と出版

(マー・ニン、トゥアン・リーシェン)

本プロジェクトは、やはり前出の「プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のヴェトナム語への翻訳と出版」等のプロジェクトと同じ趣旨の下に中国で行われるプロジェクトである。

翻訳は、*Essa on Thai Folklore*、『回想録』、および『民俗学エッセイ』から行われ、最初の1冊は、助成対象者の1人マー・ニンが英語版から中国語に翻訳する。後者の2冊は、トゥアン・リーシェンがタイ語のオリジナル版から中国語に抄訳し、3作品を併せて1冊の翻訳書として出版する予定である。

7. 文学と翻訳の国際ワークショップ

(チャーンウィット K.)

近年アジア諸国で、アジア地域の文学に対する関心が高まりつつあり、「隣人をよく知ろう」プログラムのようにそれらの文学をアジア各国の言語に翻訳する事業も進展している。しかし、その翻訳に当たっては、英語などを介した重訳をせざるを得ない、などの難しい問題点も多い。また、この種の文化交流をより有意義なものとするためには、各国個別に実施してきた翻訳プロジェクトをアジア諸国全体が包括的な形で立案、調整、実施していく必要があると感じられるようになってきている。

以上のような背景に鑑み、本プロジェクトは、アジア諸国の翻訳者、作家を一堂に集め、各々の抱えている問題を討議し、それを土台に今後のアジア文学紹介等の文化交流をアジア全体で包括的に実施する方策を探ることを目的としたワークショップをタイで開催しようというものである。参加者は、主として「隣人をよく知ろう」プログラムにかかわってきた翻訳者、作家等である。

8. プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のシンハラ語への翻訳と出版

(G.D. ウィジャヤワルダナ)

本プロジェクトは、前出の「プラヤー・アヌマーンラーチャトンによる民俗学関係著書のヴェトナム語への翻訳・出版」等のプロジェクトと同じ趣旨の下に行われるプロジェクトである。このプロジェクトでは、プラヤー・アヌマーンラーチャトンの民俗学関係著作の英語版、*Essays on Thai Folklore* をシンハラ語に翻訳しスリランカの読者に提供することを目的としている。

スリランカとタイには、両国とも中心的な宗教がテラワダ仏教であることに示されるように、数世紀にわたった緊密な文化関係が存在してきた。したがって、タイの人々の文化や生活を考察したプラヤー・アヌマーンラーチャトンの著作のなかに、スリランカの読者は自国と共通性のある文化・社会要素を多く発見することになろう。

V. その他の助成

V-0. その他の助成の概要

これまで報告した四つのプログラム以外に、トヨタ財団では本年度は次の三つのプログラムを実施した。すなわち、フォーラム助成、民間助成活動促進プログラム助成、成果発表助成である。これらの助成案件は、企画委員会（林雄二郎、浅田孝、天城勲、大島正光の4理事で構成）にて審査・選考を行っている。

フォーラム助成は、財団の今後の活動と関係深いと思われる小規模な研究会活動に助成するもので、その申請は、財団事務局と研究会との合議により作成することとしている。本年度は5件（手続き上は6件）が助成対象となった。

民間助成活動促進プログラム助成は、わが国における民間助成活動の促進を目指し、そのために必要な調査や事業について助成あるいは委託するものであり、昨年度から始めたものである。本年度の助成対象は助成財団資料センターの開設準備に対するもの1件であった。

成果発表助成は、当財団の助成による成果を広く社会に発表することを目的に、報告書の印刷、出版物の刊行、シンポジウムの開催、国際学会への出席などに助成を行うものであり、申請者はこれまでにトヨタ財団の助成を受けた者に限られる。本年度は40件の助成を行った。

なお、緊急を要するもので当財団の活動趣旨から特に重要なものは、その他助成として企画委員会の議を経て理事長決裁による助成を行い得るようになっていたが、本年度はこれに関して1件の助成を行った。

V-1. フォーラム助成

助成対象一覧

	テーマ 団体および団体代表者	助成金額 (円)
1	戦後科学技術史プロジェクトの基本計画の立案 中山 茂 科学と社会フォーラム	4,400,000
2	地域振興策としての「大野村方式」の展開における問題点の検討 山下 三郎 <ホッコ> のフォーラム	2,700,000
3	まちづくり市民活動を支える新しい協働の仕組みの一つとしてシビック・トラストを考える 阪上 順夫 シビック・トラスト・フォーラム	2,400,000
4	第2次世界大戦中のインドネシアにおける日本の占領軍政に関する同時代史料および口述記録の整理・ 収集・利用方法を検討する 永積 昭 日本のインドネシア占領期に関する史料調査フォーラム	2,800,000
5	漢独辞典プロジェクトの可能性に関する検討——日独辞典プロジェクトと漢英字典プロジェクトの発 展として—— 江沢 建之助 漢独辞典研究会	2,700,000
	合 計 5 件 [※]	15,000,000

※ 「科学と社会フォーラム」については2度に分けて助成を決定したため、助成手続きの件数は6件となる。

フォーラム概要

1. 戦後科学技術史プロジェクトの基本計画の立案

(科学と社会フォーラム)

科学と社会フォーラムは、1982、83年度のフォーラム助成により研究会を積み重ね、今後の科学技術と社会の関係を探求するためには戦後における科学技術と社会の関係史についての基礎的文献の集積・編纂が不可欠との認識に至り、プロジェクトの実現の可能性を検討してきた。

今回の助成では、さらに一步を進め、具体的なサブプロジェクトの構成なども検討し、プロジェクト全体の基本計画を立案することとしている。また全体の計画を具体化するうえで通史編の見通しを立てることが必要なことから、試行的にその予備研究を行うことになっている。

2. 地域振興策としての「大野村方式」の展開における 問題点の検討 (〈ホッコ〉のフォーラム)

1978、79、80年度の当財団の研究助成によって進められた「裏作工芸」導入による地域振興策の実践的研究は、岩手県大野村において一応の定着をみ、「大野村方式」として他地域にも波及しつつある。

今回のフォーラムは、大野村などの四つの地域の関係者と共同し、現状における問題点と将来の課題を探ろうとするものである。なお、〈ホッコ〉は「大野村方式」普及の推進母体として設立準備が進められつつある団体であり、各地のネットワーキングの結節点としての役割を果たしている。

3. まちづくり市民活動を支える新しい協働の仕組みの一つとしてシビック・トラストを考える
(シビック・トラスト・フォーラム)

わが国でも様々な分野で民間の非営利活動が盛んになりつつあるが、特に最近では草の根レベルの市民活動においてその動きは顕著である。このような活動を持続させ質の高いものにしていくためには、資金的な基盤を整備していく必要があるが、ここではそのための基金をシビック・トラストという形で構想している。

今回のフォーラムでは、それに類する各地の試みについて事例検討を行い、関係者と交流を深めつつ、将来の可能な姿を具体的に描き出すことを目指している。新しい動きについての情報交換の場となることも期待される。

4. 第2次世界大戦中のインドネシアにおける日本の占領軍政に関する同時代史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する
(日本のインドネシア占領期に関する史料調査フォーラム)

第2次世界大戦中のインドネシアにおける日本の占領軍政は、合計4年に満たない短期間にもかかわらず、戦後のインドネシア独立やその後の社会・文化に多くの影響を与えた。しかしこの時代の口述・記述資料は大半が日本語のため、インドネシア歴史家の利用は不可能に近い。

今回のフォーラムでは、インドネシアの国立公文書館を中心とする歴史家と日本のインドネシア史専門家が共同し、日本にある占領期資料を収集・整備し、インドネシア研究者の利用を可能とするための方法を検討する。

5. 漢独辞典プロジェクトの可能性に関する検討

(漢独辞典研究会)

1981年度から当財団の助成によって進められてきた日独辞典編纂の研究プロジェクトは、その後も順調に推移してきたが、これと関連して新たに漢独辞典の必要性が感じられてきた。一方、同じ年度に助成対象となった漢英字典編纂プロジェクトも、ようやく完成し、出版の見込みとなった。

そこで、当研究会を結成し、両プロジェクトの成果を持ち寄り、新たに漢独辞典編纂の可能性を検討することになった。日本と西ドイツに住む研究者の相互交流により、新たな可能性が生まれることが期待される。

V-2. 民間助成活動促進プログラム

助成対象

	テーマ 代表者および所属機関	助成金額 (円)
1	助成財団資料センターの開設準備業務 林 雄二郎 助成財団資料センター理事長	10,000,000
	合 計 1 件	10,000,000

助成対象概要

1. 助成財団資料センターの開設準備業務

助成財団資料センターについては、1984年5月以来22名の財団関係者有志の委員会においてその設立可能性の検討が進められてきた。その結果、幅広く会員を募ることにより最小限の運営は可能との判断を得、1985年11月に29名の財団関係者が発起人となって任意団体としてスタートさせた。そして、1986年3月までは開設準備を行い、同年4月から一般の利用に供することとした。

助成財団資料センターは、①助成型財団等の事業内容に関する文献・資料の収集・閲覧、②助成型財団等のダイレクトリー（要覧）の編集・出版、③助成活動に関する広報事業（広報誌の発行）等を主な事業内容とするもので、当面は任意団体であるが、近い将来法人化をめざしている。

今回の助成は、1986年3月末までの開設準備のためのものである。複数の財団の共同事業が軌道に乗り、わが国の財団界全体の発展につながることを期待される。

V-3. 成果発表助成

助成対象一覧

	母体となる助成 の助成番号	助成題目 代表者	助成内容	助成額 (円)
1	81-3-067 82-3-III-028	北アメリカにおける日系新聞の発達に関する研究 田村 紀雄	③	2,500,000
2	80-1-123	イルカの生態と生物濃縮——物質の性質と生物の種および組織特性との相互作用過程の研究—— 立川 涼	④	590,000
3	79-2-058 80-2-017	高齢化時代に対処するための生涯的職務設計に関する研究 長町 三生	④	530,000
4	83-2-II-060	乳幼児・妊産婦・障害者・老人に対する地域での包括的な歯科保健・医療のあり方に関する研究 新庄 文明	①	500,000
5	83-2-II-046	家族・家庭機能の変化に対応するための母子寮機能に関する研究 長睦 すめる	①	850,000
6	83-2-II-007	重篤な障害をもって生まれた新生児の生命権に関する基礎的研究 白井 泰子	①	390,000
7	83-1-II-168	「胤による空中撮影手法の開発と環境研究への応用」に関する研究 室岡 克孝	②	2,000,000
8	82-2-II-014 83-2-III-034	生体電気インピーダンスにより下肢の運動および機能を連続測定するための計測法の開発に関する研究 山本 尚武	④	620,000
9	82-2-II-017 83-2-III-020	ろうあ者用会話補助装置の開発 田村 進一	④	1,660,000
10	81-3-067 82-3-III-028	北アメリカにおける日系新聞の発達に関する研究 田村 紀雄	②	380,000

母体となる助成 の助成番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
11 84-F-002	文化としての先端技術を考える 加藤 迪	③	1,500,000
12 81-1-161 82-1-Ⅲ-092	歴史的街区における都市計画道路のあり方と住民による町並協定推進に関する研究 木原 勝彬	①	1,780,000
13 82-F-004 83-F-003	「生活」関連研究の実績評価と今後の方向 中鉢 正美	②	1,000,000
14 81-3-130 83-3-Ⅱ-098	技術移転の促進に係わる中国の経営管理の実態及び今後の課題に関する予備的研究 張 仁凱	①	700,000
15 82-1-Ⅱ-080 83-1-Ⅲ-037	焼畑林業システムによる自然環境の保全と活用に関する実証的研究 森田 学	⑥	2,000,000
16 84-Ⅱ-166	職業集団における文化摩擦と葛藤——便宜置籍船乗務員に関する研究—— 大橋 信夫	④	410,000
17 80-3-090 81-3-093	女性と職業に関する研究 原 ひろ子	②	590,000
18 81-3-185 82-3-Ⅲ-075	西南諸藩の洋学——萩・佐賀・鹿児島藩を中心に—— 杉本 勲	③	1,350,000
19 82-3-Ⅱ-098 83-3-Ⅲ-062	ことばあそびの応用による障害児の言語指導 谷川 俊太郎	③	1,260,000
20 83-1-Ⅱ-110	大気中における不均一系光触媒酸化反応の研究 堀 善夫	④	510,000
21 82-3-Ⅲ-043	古代日本文化に関わるアイヌ文化の収録・翻訳・記録作成に関する研究 小川 佐助	①	1,000,000
22 78-3-092	児童の校外生活に関する研究 小川 信子	②	2,580,000

母体となる助成 の助成番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
23 84- II-227	インシデント・レポート・システムについての試行的研究 宮城 雅子	②	1,300,000
24 79-3-198 81-3-118	ディシプリンの形成と変容に関する研究 手塚 晃	②	1,540,000
25 83- I-021	インドネシアの19~20世紀イスラム思想家・文筆家：ハジ・ハッサン・ムスタパの 著作収集、著作集（アンソロジー）の作成 アイップ・ロシディ	④	350,000
26 2C-025	「小字」地名の解析による農村社会空間のあり方に関する研究 岩尾 徹	①⑥	1,000,000
27 83-F-002 84-F-003	環境学の展望 山縣 登	②	1,900,000
28 79- I-011 80- I-007	韓国における民族文化教育 趙 折煥	②⑥	3,420,000
29 83-1- III-010	中小地方都市における高齢者の運転特性と交通計画上の課題 栗本 譲	②	1,550,000
30 84- III-021	ハシボソミズナギドリの大量斃死に関する総合的研究 黒田 長久	④	1,220,000
31 83-3- II-090	南西諸島の聖域における宗教空間の研究 浦山 隆一	①⑥	1,160,000
32 83-1- III-070	特徴ある農村集落の環境保全からみた空間秩序形成に関する研究 浦 良一	①③	2,000,000
33 84- III-021	ハシボソミズナギドリの大量斃死に関する総合的研究 黒田 長久	①	1,100,000
34 2C-003	身近な環境の観察を支援する情報の提供に関する研究 笹田 剛史	①	1,000,000

母体となる助成 の助成番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
35 2C-018	前橋市におけるインフルエンザの流行調査とインフルエンザワクチン効果に関する研究 由上 修三	①	1,000,000
36 83-2- II-078	読唇術への近代工学的接近とその応用に関する予備的研究 黒須 顕二	④	530,000
37 2C-052	三世代の遊び場マップづくりによる生活空間の点検と再生 木下 勇	①⑥	1,500,000
38 2C-043	児童・生徒の目を通して見た沖縄首里地区の「ふるさ」と「にあい」のあるまち 景観の発見と評価に関する研究 池田 孝之	①	1,000,000
39 2C-099	長崎市における斜面都市環境の研究と総合的改善計画 片寄 俊秀	①	1,000,000
40 83-3- III-043	日本・朝鮮・中国の暦と天文記事の蒐集と年代学的研究 桃 裕行	③	940,000
合 計		40 件	48,210,000

(注) 表中助成内容欄のマル数字は下記の内訳を示す。

- ①成果報告書の印刷
- ②出版物の刊行
- ③シンポジウム等の集会開催
- ④国際的学術研究集会への出席
- ⑤その他の形式の発表
- ⑥補足調査等の仕上げ業務

V-4. その他助成

助成対象

	テーマ 代表者および所属機関	助成金額 (円)
1	日本及び欧米における企業寄付及び民間財団の活動に関する資料作成 山本 正 (財)日本国際交流センター理事長	1,500,000
	合 計 1 件	1,500,000

助成対象概要

1. 日本及び欧米における企業寄付及び民間財団の活動に関する資料作成

(財)日本国際交流センターは、1985年12月に「国際協力における民間公益活動—企業の社会的責任と民間財団の役割」をテーマとした国際シンポジウムを開催し、そのための資料として二つの報告書を和英両文で作成することとした。日本の企業寄付と民間財団に関するもの、およびアメリカの企業寄付に関するものである。

今回の助成は、それらの翻訳と印刷の費用の一部である。これらの資料は、単にシンポジウム用だけでなく将来とも貴重な文献としての意味をもつものと思われる。なお、本助成は本来ならば「民間助成活動促進プログラム」の助成対象となるべきものであるが、決定手続の都合上、その他助成として扱った。

VI. 会計報告・事業日誌

VI-0. 事業実績の概要

今年度の助成事業の内訳は、次ページの表に示すとおりであり、研究助成は74件2億2,460万円、研究コンクールは第4回予備研究助成金として20件1,055万円、国際助成は52件1億2,700万円、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版助成は日本向けが11件1,858万円、東南アジア向けが5件1,814万円、東南アジア相互間が8件1,978万円、フォーラム助成は6件1,500万円、民間助成活動促進プログラム助成は1件1,000万円、成果発表助成は40件4,821万円、その他の助成は1件150万円となっている。以上合計すると助成件数で218件、助成金総額は4億9,336万円である。

その結果これまで11年間の助成累計は件数で1,554件、金額で47億7,801万5,880円となった。なお以上の金額は理事会決定段階のものであり、その後の変更(一部助成金の返却等)は含んでいない。

今年度の会計状況は104ページ以降の三つの表に示すとおりである。

なお、1986(昭和61)年6月開催の第41回理事会において、剰余金(当期収支差額)のうち5,000万円は基本金(運用財産)に繰り入れることとなった。これにより、当財団の基本金(基本財産+運用財産)は114億円となった。また剰余金のうち5,000万円は特別事業積立金に繰り入れることとなった。

今年度の当財団主催事業としては、第21回研究報告会(30ページ参照)を実施した。

VI-1. 助成金支出累計

(単位：千円)

助成種別	年度	1975～ 1981年度	1982年度	1983年度	1984年度	1985年度	累 計
研究助成金	—	491 1,858,580	94 280,070	97 274,090	78 218,700	74 224,600	834 2,856,040
研究コンクール助 成金	第1回	34	1	—	—	—	35
	コンクール	52,000	10,000	—	—	—	62,000
	第2回	20	12	—	2	—	34
	コンクール	10,000	36,000	—	10,000	—	56,000
	第3回	—	—	19	10	—	29
コンクール	—	—	9,500	41,000	—	50,500	
第4回	—	—	—	—	—	20	20
	コンクール	—	—	—	—	10,550	10,550
国際助成金	—	89 370,303	20 80,470	21 80,190	26 93,840	52 127,000	208 751,803
国際学術研究集会 助成金	—	30 60,263	〔当プログラムは1980〕 〔年度にて終了〕				30 60,263
「隣人をよく知ろう」 プログラム翻訳出 版促進助成金	日本向け版	44 104,140	15 30,870	16 29,900	14 25,440	11 18,580	100 208,930
	東南アジア 向け版	—	2 29,410	2 30,220	2 7,640	5 18,140	11 85,410
	東南アジア 相互版	—	—	1 1,080	2 6,070	8 19,780	11 26,930
	—	—	—	—	—	—	—
東南アジア諸語辞 書編纂出版助成金	—	1 5,000	1 13,000	1 4,500	—	—	3 22,500
フェローシップ助 成金	—	7 175,000	1 20,000	1 20,000	1 20,000	1 20,000	10 235,000
フォーラム助成金	—	—	5	4	4	6	19
	—	—	10,000	10,000	9,700	15,000	44,700
民間助成活動促進 プログラム助成金	—	—	—	—	4 9,800	1 10,000	5 19,800
10周年記念特別助 成金	—	—	—	—	3 40,000	—	3 40,000
その他の助成金	—	—	—	—	1 1,000	1 1,500	2 2,500
成果発表助成金	—	74 90,969. ⁸⁸	30 31,070	26 34,990	30 39,850	40 48,210	200 245,089. ⁸⁸
合 計		790 2,726,255. ⁸⁸	181 540,890	188 494,470	177 523,040	218 493,360	1,554 4,778,015. ⁸⁸

(注) 金額は各年度の理事会で決定されたものであり、その後の変更については含んでいない。上段は件数を、下段は金額(千円)を表す。

VI-2. 1985(昭和60)年度 会計報告

1. 収支計算書 (自 1985年 4月 1日 ~ 至 1986年 3月 31日)

	項目	金額(円)
収入	財産運用収入	897,699,821
	雑収入	2,891,285
	前期繰越収支差額収入	57,666,036
	収入合計	958,257,142
支出	事業費	644,996,482
	管理費	117,887,454
	退職給与引当金繰入額	3,200,000
	支出合計	766,083,936
	当期収支差額*	192,173,206
* 当期収支差額を下記のとおり処分		
	運用財産繰入	50,000,000
	特別事業積立金繰入	50,000,000
	次期繰越収支差額	92,173,206

(注) 次期繰越収支差額は次年度収入予算繰入

2. 貸借対照表 (1986年3月31日現在)

借方 科目	金額(円)	貸方 科目	金額(円)
(資産の部)		(負債の部)	
現金	85,617	未払金	302,801,673
預金	21,407,114	預り金	3,344,155
有価証券	12,018,676,338	退職給与引当金	19,176,122
前払金	2,343,502	(正味財産の部)	
立替金	24,232,585	基本財産	7,000,000,000
仮払金	750,000	運用財産	4,350,000,000
固定資産	47,936,239	剰余金	440,109,445
合 計	12,115,431,395	合 計	12,115,431,395

3. 財産推移表

年度末	基本財産(円)	運用財産(円)*	合計(円)
1974(昭和49)年度	3,000,000,000	133,057,559	3,133,057,559
1975(昭和50)年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976(昭和51)年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977(昭和52)年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978(昭和53)年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979(昭和54)年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980(昭和55)年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981(昭和56)年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982(昭和57)年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983(昭和58)年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984(昭和59)年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985(昭和60)年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445

* 運用財産のなかには剰余金(次期繰越収支差額, 次期繰越増減差額, 準備金, 積立金等)を含む。

4. 助成金変更および返納一覧

(自 1985年4月1日～至 1986年3月31日)

助成番号	助成代表者 助成金種別 事由	所属	助成決定日	上段：決定金額(円)		
				中段：変更および返納額(円)		下段：最終助成額(円)
1	83-S-006 西川幸治 成果発表助成 報告書枚数減	京都大学	58. 6. 15			940,000
						150,000
						790,000
2	83-B-006 めこん 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減		59. 3. 13			1,100,000
						254,000
						846,000
3	83-B-005 井村文化事業社 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減		59. 3. 13			1,960,000
						80,000
						1,880,000
4	84-B-002 弥生書房 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減		60. 3. 7			1,300,000
						100,000
						1,200,000
5	82-III-069 大滝栄蔵 研究助成 助成金残	北海道建築士会	57. 9. 29			3,000,000
						285
						2,999,715
6	83-B-004 井村文化事業社 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減		59. 3. 13			1,400,000
						120,000
						1,280,000
7	85-K-035 野村かつ子 研究助成・特定課題 記録作成中止	海外市民活動情報センター	60. 10. 3			1,900,000
						1,900,000
						0

この表は、各年度の年次報告書記載の助成金額(理事会で決定した額)を、後に助成対象者側において、計画変更、辞退等の理由で変更したものの一覧表です。

VI-3. 1985(昭和60)年度 事業日誌

1985年 4月1日	研究助成公募開始	
4月6日	第2回研究コンクール特別賞贈呈式・記念報告会(東京)	
4月30日	トヨタ財団レポートNo.32発行	
5月31日	研究助成公募の受付締切(712件)	
6月10日	第38回理事会	
	1984年度事業報告, 収支決算及び剰余金処分の承認	
	フォーラム助成, 助成先決定	1件
	成果発表助成, 助成先決定	1件
	選考委員の選任について	
6月10日	第10回評議員会	
	財団活動状況の報告	
7月31日	1984(昭和59)年度年次報告(和文)発行	
8月1日	翻訳出版促進助成公募開始	
8月1日	翻訳出版促進助成・刊行物紹介(英文)No.5発行	
8月9日	トヨタ財団レポートNo.33発行	
9月30日	翻訳出版促進助成公募の受付締切(11件)	
10月3日	第39回理事会	
	研究助成, 助成先決定	74件
	国際助成, 助成先決定	26件
	翻訳出版促進助成(東南アジア向け), 助成先決定	2件
	翻訳出版促進助成(東南アジア相互間), 助成先決定	5件
	フォーラム助成, 助成先決定	2件
	民間助成活動促進プログラム助成, 助成先決定	1件
	第4回研究コンクールの公募について	
10月15日	第11回助成金贈呈式	
10月24日	トヨタ財団レポートNo.34発行	
11月1日	第4回研究コンクール公募開始	
1986年 1月15日	第4回研究コンクール公募の受付締切(140件)	
1月20日	トヨタ財団10年の歩み発行	
1月25日	トヨタ財団レポートNo.35発行	
2月15日	第21回助成研究報告会(東京)	
~16日		

3月20日	第40回理事会	
	第4回研究コンクール、助成先決定	20件
	国際助成、助成先決定	26件
	翻訳出版促進助成(日本向け)、助成先決定	11件
	翻訳出版促進助成(東南アジア向け)、助成先決定	3件
	翻訳出版促進助成(東南アジア相互間)、助成先決定	3件
	フォーラム助成、助成先決定	3件
	1985年度収支決算見込み、剰余金見込み額の 処分について	
	1986年度事業計画、収支予算の承認	
3月20日	翻訳出版促進助成・刊行物紹介(和文)No. 6 発行	
3月25日	1984(昭和59)年度年次報告(英文) 発行	
3月31日	「これからの民間助成財団」発行(編集:トヨタ財団, 発行:東洋経済新報社)	
3月31日	第2回研究コンクール報告書発行	

事務局員

1986年3月31日現在

事務局 局長	山口日出夫
総務部	亀沢直道(部長) 伊藤勝義(係長) 渡辺 元 牧田東一(兼) 松倉康子 田村美恵子 成田真澄 星名優子
企画調査部	山口日出夫(部長兼)
研究助成部門	山岡義典(プログラムオフィサー) 久須美雅昭 渡辺 元(兼)
国際助成部門	若山佳子(プログラムオフィサー) 牧田東一 姫本由美子 岩本一恵(プログラムコンサルタント)

1985(昭和60)年度年次報告

発行者	財団法人 トヨタ財団
	(〒163) 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル37階・私書箱236
	TEL.(03)344-1701~3
発行日	1986年7月31日
制作	童夢出版株式会社
印刷	真友工芸株式会社